獄で惡魔で神である」などいふたそうであるが、精神の混亂は實に恐るべき結果に至らしめるものである。青年は幾分か此れに類似した精神狀態を現はしてゐる。「神は無いと思ふ、併し怖ろし時や、苦しい時はあるやうな氣がする」「極樂は昔の人のいふ事で神經である。併しある事はある」などは確かに矛盾の告白である。

青年に於ける煩悶は右に述べし如き精神的の理由のみでなく生理的にも淺からざる理由があるのである。殊に女子に於ては男子よりも多く生理上の權衡が不充分なる所から煩悶が現はれる事が屢々である。スターバックの書から其一例を引くなら。女「十三歲に至るまで、私は嘗時自分の了解して居つた樣なキリスト敎徒の生活を送り、神を崇拜して行く事を眞實に喜んで居りました……。十三歲から十七歲に至る間は私の生活がモット平坦でなくなりました。今から考へて見ますに、それは健康が惡かつたが爲めであつたと思ひます。私は其時分には全く氣分が惡く醫者の厄介になつて居つたのでありました」、の如きは卽ちそれである。青年期の初めには迅速なる成長が現はれる。此迅速なる成長は直ちに神經系統に大なる動搖を與へる故、健康が惡ければ精神上種々なる煩悶を來す事になるのである。

煩悶と覺醒及び回心との關係　上述の如く青年期は、理性と情緒との相背反して矛盾撞着の

狀態を現出し、且つ生理的にも精神上の煩悶を伴ふ時期であるが、此煩悶苦惱の中に新しき意識が生產せられるのである。凡て人類の意識は煩悶苦惱の中に產出される事は前にも述べて置いたと思ふ。「婦子を產まんとして苦しむ」といへる如く新しきものゝ生るゝには、必ず苦みを伴ふは天の命數であらう。スターバックも煩悶と覺醒との間に、密接なる關係の有る事を主張してゐる。而して氏は「煩悶と自發的覺醒と回心とは同一の根本的事情から起つてくる結果である」（「宗敎心理學」二二三頁）といふてゐる。尙ほ彼は煩悶が始まる年齡を男女に別ちて百分比にて表に示してゐる。卽ち次の如くである。

年齡	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
女	2	2	7	5	21	15	15	5	11	9	5
男	0	0	4	4	12	28	28	12	4	4	

此れを見ると女に於ては十二、十三、十四歲及十六歲に於て高まり、十五歲に於て低くなつてゐる。男に於ては十三、四、五、六歲に於て高く、十七歲に至りて急に低下してゐる。スターバックは此れを自發的覺醒の年齡と比較せば甚だしく類似點が見出されるといふてゐる。田中氏も亦煩悶の昇降線を作り、女子は十三歲十六歲及十八歲に於て波頂を形成し男子は十四歲十六歲

に於て波頂を形成せるを見出し、此れを自發覺醒の曲線と比較し、其二者の間に密接の關係ある事を述べてゐる（一一七頁）。又此れを後に擧げる回心の年齢と比較せば又それとこれとの間に著しき類似點を見出す事か出來るであらう。

只煩悶の方が回心よりも幾分か早いといふだけで年齢の關係上には、精密なる一致がある事が認められるのである。其外煩悶の要素と回心の要素とを比較しても、兩者の一致點は一層明かになる。又煩悶と回心とは、其繼續時期に於ても亦同樣で、女に於ては男の約二倍である。

以上述ぶる如く煩悶と覺醒及回心とは密接なる關係を有してゐるのである。少年時代に於てはまだ眠つて居りまだ目さめずにあつたものが、青年期に於て煩悶苦惱の深みから芽を萠し、急に働を始めるのである。要するに青年期の煩悶は、スターバックの言を借りていへば「青年時代に於ける煩悶は特別の出口を見失つた新らしい力の働きが何所かに出口を求めて、強いて表はれやうとする所から起つて來るのである。若し新しい力が抵抗を受けずに働いて行くならば新生命のとばしりとなり、新しい眞理の認識となり、道德上の進歩となり、喜びとなり、幸福の感となつてゆく。然るにそれが自由に表はれ得ない時には其れを障ぐる所の能力と衝突し苦惱不安憂慮病的瞑想模索病的情熱などゝなるのである」。

人生と懷疑　人生の懷疑時代と稱する時代は青年期であるが、スターバックに依れば女の五三%、男七九%が長いか短いかの相異で皆懷疑時代を經過してゐる。パルムハム博士は其「青年研究」に於て彼の取扱つた人々の四分の三が懷疑の時期を通過したといふてゐる。（スターバック「宗教心理學」二三三頁）。併し全人生を通じて全く懷疑のない時代はないのであつて、嬰兒が新らしき刺戟を受けて驚異の眼を見張るのも、既に一種の疑惑の發生したものと見てよい。信仰や知識の進歩發達する過程には必ず懷疑は現はれるものと見るべきであつて、人生は實に懷疑の連鎖である。而して神は斯の如くに人類を造り給ふたのであつて、人の心に幾度となく懷疑の雲が現れるのは寧ろ創造の妙を告ぐるものといふべきであらう。故に懷疑であれば、何でも罪惡の如く目する者があれば、それは全く間違つてゐる。病的な懷疑は別として取扱はねばならぬが、正常的な懷疑は惡いものではない。ヨリ高い生活に進むには必ずこのブリッヂを渡らねばならぬのである。此れあるが故に人生に向上があるのである。疑ふといふ事がない者には、知識も信仰も向上しないのである。

青年期は實に懷疑の時期で、人生の一大危機を示してゐるが、併し其懷疑は全く正常的なもので、若し適當なる指導さへあれば少しも憂ふるに足らぬ。スターバックの研究によれば、此時

期に於て信仰の落伍者となる者は百人中六人で、殘る百九十四人は懷疑より再び信仰に立ち歸えり、前よりも一層堅實なる信仰生活に入るといふのである。

懷疑は矢張り一つの信仰である、或る人はこれを「困難なるものに對する信仰である」といふてゐる。固よりそれは未だ確實なる信仰ではなく「不確なる信仰」である。無知と知識との境であり、光明を暗黑との境である。而して吾人は廣く知れば知る程、知らぬ範圍が大となり、光明の範圍が大となればなる程、闇黑の範圍が又一層茫漠たるものとなる。故に吾人の無知は常に知識よりも大である。されば懷疑は永久に吾人生活の一要素となるのである。

蓋然性は人生の案内者　併しながら懷疑は吾人の實際の生活に取りては一大難事である。吾人の知識や信仰は凡て懷疑によりて大なり小なり傷害を受ける。或は餘白付けられる。さりとて吾人はしばく不完全なる、又疑はしき信仰や知識の上に立つて吾人の行動を躊躇してゐる事は出來ぬ。吾人は如何なる事柄に於てもそれを爲さんとするに當りて絶對の確實さを見出す事は全々不可能事である。吾人は充分知らぬ人と共に同じ事業にたづさわり、又吾人は豫定通り必ず達し得られるといふ事を知らずして旅行の途に就く。若し確實なる知識がなければ決して行動を始めぬといふのであれば吾人は恐らく何事も爲し得ぬであらう。恐らく一歩も足を踏

み出す事さへも出來ず、ほんの一氣息もつく事も出來ぬであらう。そこで或る人はいふた「蓋然性は人生の案内者である」—"Probability is the guide of life"—と、然り吾人は此の蓋然性の上に吾人の社會を形成し、事業を企て、科學を起し、宗教を保持して行くのである。

懷疑は誤謬の破壞者　吾人は人生に於ける懷疑の價値を認める場合、それが誤謬の破壞者であるといふ點も亦認めて置かねばならぬ。所謂迷信邪道を刈り倒す大鎌は即ちそれである。死せる信仰を一掃するものも即ちそれである。トレミー時代の天文學者の狹溢なる宇宙說は懷疑によりて燒き盡された。其代り懷疑は無限大の宇宙に吾人を向はしめる道を開いた。それ故吾人人類の想像は無限に擴大せられた。されば懷疑は一方よりいはゞ誤謬の破壞者である。併し他の一方よりいはゞ勿論それは建設者である。誤謬は懷疑によりて打破せられるが、それと同時に眞理の芽が生へ出るのである。舊い天地が破られて新天新地が築かれる。夫れ故此の方面より見れば懷疑は吾人の無知を探り、新世界を開く開拓者である。

青年期の懷疑　兒童に於ては外界からの印象は繪書の如く子供の心に書かれてあつた。而して外界から與へられるまゝをそのまゝ受けて何等疑心をも生ぜず、其生活は極めて平穩無事で又極めて樂觀的であつた。然るに理性の發達と共に懷疑の雲は益々濃密になり、從來の繪書的

概念は破壊せられるが、それと同時に發達の方向は新しくなる。注意は凡て內面的に向けられ合理的批判は凡ての心理現象に影響し、平和的樂觀的生活は破られる。而して獨創的の思想が現はれて來る。從來の外部的生活は一變して內部的となり、今迄外部的權力の配下にあつたものが、自己意識が著しき發達を遂げ、內部に權力の存在を認めて愈々自己自身の自由なる世界を創造する樣になる。夫れ故青年期の懷疑は極めて眞實であり、又眞面目なるものである。

懷疑の對象　それでは青年は如何なるものを懷疑の對象としてゐるかといふ事であるが、之れに就いては既にスターバック其他の者の研究を見る事が出來る。スターバックは次ぎの如き便利な表を作つてゐる。此れによりて見るに女子は聖書の權威、神の存在、一切の事物に對する懷疑が最も大である。何故に然るかといふ事は今直ちに斷じ難いが、スターバックは自ら次の如く說明してゐる。曰く「女はヨリ多く有機的な又無判別的な遣り方に於て反應して行く。男よりも女はヨリ多く事物の中心に入つて生活する。女は特種の經驗や特種の事情を解釋する

	女	男
	%	%
傳來の習慣及信仰（概して特種的）	8	25
聖書の權威又は靈感	12	20
キリストの神性	5	12
神の存在	17	5
一切のもの	11	7
永　生	5	2
キリスト教徒の生活	5	2
特別なる攝理	8	0
特に示されてないもの	12	22

にそれを一般的の事のやうに見て行く」と。男子は傳來の習慣及信仰、聖書の權威、キリストの神性等に對する懷疑が最も大である。神の特種なる攝理に就いての疑は男子の方には一つも現はれてない。女子の方には比較的多くある。（「宗教心理學」二三八、二三九頁）

又田中氏も青年の疑惑の對象に就いて特に研究をしてゐる。

年齡	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	平均
新藤禮拜の効能	男%十八 女%十三	一〇 二四	一八 二五	五〇 六四	六二 六四	五〇 四三	三九 五一	四五 五三	五二 四三	四四 五四
地獄極樂の觀念	男%二三 女%九	一九 一一	三六 三五	二九 二八	三二 三四	三一 二二	三六 三七	四七 四七	五七 四三	三九 三五
神の正體に就いて	男% 女%一〇	二〇	一一 五	一八 一一	二四 九	一七 一四	三四 三四	五一 六一	七五 四二	四四 二〇
神の或屬性に就いて	男% 女%〇〇	〇〇	五 三	八 五	五 四	九 一〇	三 三	四八 三五	四一 三一	一八 一七
神の功德に就いて	男% 女%〇〇	〇〇	一一 三	四 一〇	一九 七	七 六	一三 一一	一四 一八	一八 五	一八 一八
善惡の應報に就いて	男% 女%					二〇	二二	一三〇	一〇一	二四

（信仰を基とせる道德的陶冶の研究、一二〇—一二八頁）

此れによると青年の最も多く疑惑を挟むのは祈禱禮拜の效能である。四割九分は實に此疑惑を有してゐる。

而して其萌芽は早くからあるのであるが、十四歳は其全盛時である事を示してゐる。平均數から見て男よりも女の方が餘程多くなつてゐる。此れはさきに擧げたスターバックの表中「特別なる攝理」の項に於て幾分か符合してゐる樣である。地獄極樂の觀念に付いての疑惑は祈禱禮拜に對する疑惑よりもやゝ後れて萌芽し、十七、八歳の頃は其最も盛なる時である。此れは十一歳以前には殆んど起らない。十七、八歳に至りて著しく現はれて來る。こは知力の發達と深き關係を有するものと見へる。我が國の如き到る處に金銀木石繪畫を以て神體を表現されてある所に於ては、人類の知力發達と共に、此の種の疑惑に襲はれるは蓋し自然であらう。此れも十一歳以前には全くなく、十二歳以後に現はれ、十七、八歳頃から一段多くなつて來る。更らに進んで十二歳頃から神佛の功德に對する疑惑も起つて來る。倘進んでは善惡の應報に關する疑惑も十六、七歳頃に其萌芽を見せてゐる。

疑惑の起る原因　然らば疑惑の起る原因は何であるか。これもスターバックの研究の結果に據つて調べて見るに、第一に科學及哲學の研究の結果懷疑に陷るものが最も多くある。例へばダーウヰンとかヒユームを研究した爲め、從來教へられてゐた神學思想に疑はしき點を見出したと云ふなどはそれである。男に於ては殊にかゝる疑惑が起る樣である。又新しい書物、新しい教育を受けた爲め懷疑心を抱く事も多くある。一體疑惑は外部からの影響に應じて生起するのであるが、併し外部の影響のみで懷疑が起るのでなく內部にそれに應ずるものが有るからである。それ故疑惑の起る原因としては、常に外部的と內部的との二種類のあることを認めて置くべきである。ブラットによれば青年の懷疑には、矢張り二つの大なる原因又は疑惑の起る理由がある。其第一は遺傳的で殆んど本能的のものである。此れは凡ての種類の權威に對する叛逆て青年の側から云へば、獨立の宣言である。第二は一層大切なもので、それは新事實に對する若き理性の反動である。前者は先天的原因で、後者は後天的原因である。（「宗教的信仰の心理」二一六頁）スターバックは十一歳から二十歳までが懷疑の起る主なる時期で、三十歳以後に減多に起らぬとし、而して彼はそれ以後にも外部的影響は繼續してゐるにもかゝわらず懷疑の起らざるは、懷疑の起らざる原因が內に存するからであると云ふてゐる。疑惑の內部的原因として最も明らかなる事實は、懷疑の自然的發生である。即ち何も明かなる事情なしに生ずる懷疑である。スターバックは此の種の懷疑は生理的原因に基いてゐるもので、此場合外部的影

響は殆んど認められないと云ふてゐる。彼の統計によりて見ると此の種の懐疑は女子に最も多く、男の一五に對し女は四七である。

此等の他懐疑を起す原因には災難、キリスト教徒の不行蹟、祈禱の無應驗及病氣等がある。災難及病氣の如きは直ちに信仰を得る動機を作る事もあるが、懐疑の原因となる事も尠くない。余の知つてゐる或る婦人は仲々熱心なクリスチャンであつたが、僅か數日の間に父と弟に死別して遂にそれが爲め信仰生活に大なる疑惑を生じ、其後は教會に行く事を止めた。余自身は最初生後一年になる女の子を亡くした時信仰上尠からず利する事があつたが、次ぎに四歳になる男の子を亡くした時、死は最後であると考へ、永久に存在すべき靈魂の存在を一時疑つた。今は前の如き信仰に立ち歸つてゐるが一時は唯物的無信仰者に陷つたのである。又自己の健康狀態が懐疑心を醸す事となるは其例決して尠くない。神經衰弱症、消化不良症などが直ちに宗教心に影響を及ぼし信仰上の蹉跌を來す事はしば〳〵である。ピーチャーは嘗て「消化不良に惱む者は天國に入る能はず」と云ふたが胃腸病の者必ずしも皆然うでないにしても、病氣の結果信仰上の懐疑に陷り不信仰者となる事は珍らしくない。キリスト教徒の不行蹟が懐疑の原因となる事は吾人のしば〳〵耳にする所である。余は基督信者にならんとする者から種々なる質問

を受けるが、「クリスチャンの中に行狀の修まらぬ者があるのは如何なる理由か」と云ふ質問が最も多い樣である。尙スターバックの「宗教心理」から一例を擧げて見やう。「私は教會の或る役員が淫猥な話をしてゐるのを聞きました。それは私にとりては信仰上の大なる打撃でした。私は其方の誠實を疑ひました。而して凡ての人の誠實をも疑ふ樣になり、宗教の價値も聖書のインスピレーションも神の存在も皆疑ふ樣になりました。私はそれからと云ふものは聖書に反對した書物を讀んだり、非宗教的の人と談話したり、他の宗教を研究したり、キリストの名において犯した犯罪に就いて讀んだりなど致しました」(二四七頁)。次ぎに祈禱の應驗がない事であるが、此れに就いて、さきに掲げた疑惑の對象に就いての表を見れば十三、十四、十五歳頃が最も多い樣である。年の長ずると共に、神の攝理を考へる樣になるから、たとひ祈禱の無應驗と知つても、それを以ていつまでも信仰上の懐疑に陷つてゐる事は少くなる。

懐疑の原因には以上の如きものがあるが、スターバックはそれを次ぎの如き表にして表はしてゐる(二三頁)。

教育的影響	23女		
自然的發達	47	73男	
	15		

災難(死、不幸其他)	9	9	
基督敎徒の不行蹟	2	3	
祈禱の無應驗	7	0	
病氣	12	0	

懷疑の年齡　さて懷疑が如何なる年齡に於て一般に生ずるかと云ふに、スターバックは前にも云ひし如く、十一歲より二十歲が懷の起る主なる時期で二十歲以後に於ては懷疑に陷る事はないと云ふてゐる。而して彼は懷疑の初まりと年齡との關係を表に作つて次ぎの如き結果を得てゐる。

年齡	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
女	12	6	12	14	16	16	10	10	2	4	0	0	0	0	0	0
男	0	2	2	12	10	7	7	17	10	10	2	5	7	2	2	5

此れによると女は十五、十六歲に初まるのが最も多い。男に於ては十四五歲及び十八、十九二十歲に於て多くなつてゐる時期は如何なる時期であるかと云ふに、女に於ては身體成長の最も盛んなる時期の後で、回心の最も多く起る十二、三歲頃は

懷疑は著しく減じてゐる。男に於て　十六歲十七歲の回心現象の最も盛んなる時期であり、身體發達の最も速かなる時期に懷疑は少くなつてゐる。又自發的覺醒の最も多き時期にも懷疑は少くなつてゐる。これによりてこれを見るに懷疑は精神的にも生理的にも極めて不活潑な時期に於て起るものである樣に思はれる。即ち懷疑と精神的弛緩とは互に一致してゐる樣である。さきに煩悶と自發的覺醒と回心とは年齡上互に一致した所がある事を見たが、懷疑に於てはかゝる一致を見出す事は出來ぬ。

懷疑と煩悶　然らば懷疑と煩悶とは性質上相異つた點があるやと云ふに、確かに此の二者の間には相異點がある樣である。スターバックによれば、女の二七%は懷疑なき煩悶を有し、男の三七%は煩悶なき懷疑を經驗してゐると云ふてゐる。然らば煩悶必ずしも懷疑を伴はず、懷疑必ずしも煩悶でない。煩悶と懷疑とは共に知的生活の迅速なる發展を表示するものであるが煩悶の方は懷疑よりもより多く複雜なものであり、一般的であり、且つ有機的性質を有する成長である。懷疑の發達も亦腦髓の同じ部分に於て現はれるものゝ樣であるが、此れは煩悶よりも一層部分的のものである。それは亦懷疑が煩悶よりも少し遲れて現はれる事によりても認められる。此の二者の初まる平均年齡を取つて見ると約一年半の差がある。而して懷疑は知的生

活が宗教的發達に最も多くの價値を有してゐる時期、卽ち青年時代の後期に最も多いのである。懷疑と煩悶とは同一の本質的性質からの發達であるから、大體に於て相等しい性質を有してゐるのであるが、煩悶はより多く情緒的の性質を有し、懷疑はより多く知的要素を含んでゐる。（スターバック「宗教心理學」二四一頁）

尙男女の經驗に於て見るに、男は煩悶なくして懷疑を經驗すること多く、女は懷疑なしに煩悶する事が多い。男で懷疑なしに煩悶を有したものは一〇%で、女で煩悶なしに懷疑を有したものがそれと全く同數のパーセンテージを表はしてゐる。之れを以て見るなら青年期は女に取りては煩悶の時期であり、男に取りては懷疑の時期であると云へる（同二四一頁）。

青年の超俗的傾向　煩悶や懷疑の結果青年の心理には往々超俗的傾向を現はすものである。煩悶や懷疑の結果在來の信仰が動搖せられ、それらが皆迷信の如く見へ、敎義とか儀式などは無用の長物の如く思はれ、祈をする事や、聖典を讀む事などは極めて馬鹿らしき事の樣に考へられ、かゝるものを信じ、且つ行ふ者を見て嘲けりたく思ふ樣になる。此れは所謂一種の精神錯亂（アリエテーシ）の結果であるが、自分では固より然うは考へてゐない。自分ではどこまでも、かゝる習俗に遠ざかり超然たる態度を敢て取らんとする。

此る傾向を現はす原因は煩悶や懷疑である場合が多くあるが、其他健康狀態も屢々其原因となる。神經性の病症は殊に此の傾向を現はす事が多い。又四圍の境遇も亦青年をして此の傾向に入らしめるものである。つまり青年が自己の境遇と衝突する樣な事があつて、其境遇と調和が出來なければ、彼は周圍を下に見下して自ら超然たる態度を取らんとする。或る婦人が敎會に行つて牧師の說敎を聞いたが、其說敎の中に容貌に化裝して一心に美を衒はんよりは、精神を日々磨いて麗しくせなければならぬと云はれ、心に甚だ不快を感じた。其人は或る事情の爲めに自ら他の人よりもより多く化裝をせなければならぬと思つてゐた。それ故其婦人は其後遂に敎會に行く事を全然止め、宗敎に全く超然たる態度を向ける樣になつた。斯くの如く自己の周圍が自己と一致しない時は自然自己維持の本能が働いて自己を周圍より遠ざける樣になるのである。強い氣質の者は自ら超然として周圍を下に見るが、弱い氣質のものであれば陰鬱になり沈んでしまふ。何れであつても自己を他より遠げるのである。斯くの如く四圍の境遇が超俗的傾向に導く事があるが、今一つの原因は精神を長い間働かして疲勞せしめた時に此の傾向が現はれる。疲勞の結果休息を求むるは之れ又自然である。信仰を得んとして長い間努力し遂に失望して超俗的態度を取るものも往々ある事である。宗敎家の中に反つて不信仰ものが多くあると

聞くが、彼等は全く信仰生活を獲得せない中に或る事情の爲め止むなく宗教的の職務に己れを置き、職務の爲め其れにふさわしき信仰を得んものと隨分努力したであらう。併し思ふ樣に信仰が得られず、其内精神に疲勞を生じ職務と反比例した狀態にあつて僞善的なる生活をなしてゐるのである。

スターバックによれば彼が取扱つた人々の三分の一以上が此の超俗的經驗を持つてゐると云ひ、而して此の經驗の繼續する期間は長短樣々で、ほんの一寸の間のもの、數年間に亘るもの一生涯つゞく如く見ゆるものなどがあると云ふてゐる。

青年期に於ける孤獨の感　余は中學生の頃から「自分は凡人では世に立たぬ」と云ふ氣分を持つてゐた。其「凡人では世に立たぬ」と云ふ心持の中には別に非凡な大人物となると云ふ考へはなかつた樣であるが、兎に角水平線上に立つて平凡な生活をするのは厭だと云ふ考へから、何でも多少變つた色彩を世の中に表はしたいと云ふ位の心であつたのであらう。兎に角然う云ふ考へが其時代からあつた。而して自分は他の者よりも全く變つたものであると云ふ考へが頻りに働いてゐた。世の中に立つて働いてゐる者が種々なる事によりて失敗をしてゐると、其れを見て「自分ならばそんな失敗はせない、それは他人だからそんな失敗をするのだ」と思つて

ゐた。知人が結婚をして其妻に對し仕打が惡いなら、直ちに「自分ならそんな間違つた事はしない。他人だからそんな事をするのだ」と考へた。如斯自分はどこまでも他人とは異つたものであると云ふ感じがあつた。併しかゝる感じは自分獨りの感じでなく、青年期に於ける共通の心理である。自分では他に類のない感じであると思ひ込んでゐるが、實は甚だ普通の感じである。キングスレーが廿二歳の時其母に送つた手紙の中に次の如き文句がある。（スターバックの引用による）

私は普通の人のやうではありませぬ。併し他の多くの人々に較べて私がモット賢いと云ふのでもなく、モット利巧だと云ふのでもなく、モット善人だと云ふのでもありませぬ。併し私は心に於ても頭に於ても全く一般の人々とは違つてゐます。」

此れに似た例は他にも多く見出す事が出來る。つまり此の時代には自己意識が確立し、高い自我の誕生があるからである。幼少な子供の時には自己と云ふ意識はない。自己の手や足を見て自分のものと思はず、恰かも他の物の如く見てゐる。自己保存の本能は最初から現はれてゐるのであるから自己は本能的に保たれて行くのであるが、自己意識なるものは二三歳頃から徐々に發達するのである。自己意識が未だ充分の發達を遂げてない時代の宗教は外部的で神とか

天とか云ふても、それらは何か或る物の如く受取られてゐる。宗教と云へば種々の儀式や目に見へる教會など物質的外部的なものであると思つてゐる。成人でも教義や習慣などを以つて直ちに宗教と考へてゐる事は多くあるが、それは發達せない子供らしい考へてある。「神は靈なり」「天國は汝らの裏にあり」など云ふ思想はこれこそ實に成人的であるが、幼少なる子供にはそんな考へは未だ起つて來ないのである。そは兎も角、さきに云ひし如き「自分は一般の人々よりも違つてゐる」と云ふやうな考へのあるは自己意識が大に發達を遂げた證據である。青年期に至つて自己意識は大なる發達を遂げるのである。而して此の時自我は全く新しきもので、此れまでよりは一層大なるものとなる。此の新しき自我を中心として凡てを判斷するのであるから、自然自分は周圍の人々よりも餘程高いものであると云ふ感じが強く働くのである。夫れ故傳統的な神學や敎理敎訓をなみし、一般に人々の行つてゐる儀式や習慣を輕んじ、無暗に宗敎を迷信呼はりしたりする。而して二十二三歳頃には盛んに人の意見に反對する傾向を現はす、自分では殊更に反對するわけではないが、他人の意見と自分の意見と兎角一致せない故止むなく反對するのである。此れは一見如何にも傲慢のやうではあるが決して然うではない。精神的發達の過程には必ずかゝる傾向が現はれるのが眞實なる心理なのである。斯る傾向の現

はれる事により一層青年の自己意識も發達するのである。而して自己の有する思想が益々明確なるものとせられるのである。

以上述ぶる如く青年期に於ては自己意識が大なる發達を遂げ、新しき自我、大なる自我を以つて何事も判斷する故、周圍が自己よりも劣つてゐるものゝ如く考へられるのである。夫れ故此の時期には俗社會を全く脫離して我獨り山頂にあると云ふ樣な孤獨の感を抱くのである。青年期は實に孤獨の感の切なる時期である。併し此の孤獨的時期にありて、そこに强い自覺がそなはるのである。而して自覺した者が再び社會に出でゝ活動する時、眞の意味に於ける活動が出來るのである。故に社會はそれによりて大なる益を得るのである。されば人生に孤獨的時期あるは實に創造の妙であると云ふの外はない。釋迦は六年間山に閉ぢこもりて一時孤獨生活をなした。キリストは四十日四十夜食ふ事をせず飮む事をせずして荒野に孤獨生活をなした。モハメットは洞窟に入り、ポウロはアラビヤに赴いた。人は何か至難の問題を解決せんとし、又新しきものを發見せんとする場合、或は自己自身のものを創造せんとする場合、一時複雜なる社會的影響を離脫して孤獨生活に入るのである。然らば青年期の孤獨は實に大なる意味の存する事とせなければならぬ。即ち青年が自ら他人とは何となく懸け離れてゐる樣な氣持になり、

自分は他の人々とは何となく違つた者の様に考へ、他の人々よりも自分の方がより大きな眞理を攫へて居り、より確實な知識を有してゐる様に思ひなす事は發達上頗る大切な事である。個人の獨創性はかゝる時期に於て充分涵養せられ、而して發揮せられるに至るのである。

青年期の信仰　青年期に於て深刻なる宗教的經驗の起る事は、既に一般に認められたる事實であると云ふてもよいのである。而して其宗教的經驗に於ても最も顯著なるものは回心現象であるが、此れに就いては別の章に於て特に考究したいと思ふのであるから玆には云はぬ。玆には只青年期に於ける信仰の特徴の數種を述ぶるに止めるのである。

(1)條件的斷定の信仰

少年期に於てはその本來の信仰性を基礎として模倣及び服從によりて信仰してゐたのであるが、青年期に至りて內部反省作用を生じ、自己內心の要求を滿すにあらざれば、容易に受容れなくなる。從つて青年期に於ける發表には條件的斷定が多く見出されるのである。例へば

「神は信仰すればある、信仰せざればなし」

「神はあると思へばあるが、ないと思へばない」

「ヤソ教や佛教で云ふ樣な神が果してあるかないかは知らぬが私自身の心では神を確かに認

めてゐます」

「普通一般の人が云ふ樣な神はありませぬ、併し眞の神は良心です」

等の如きものである。此れを見れば以前に模倣及び服從によりて非反省的に何でもかでも信じてゐたのとは餘程趣きが異つた自己獨特の神佛を信仰せる事が明かである。而してそは兒童期の信仰に比して一段の發達を遂げたものである。

(2)宗教的感情が代用せらるゝ諸方面

青年期に於ては宗教的感情は極めて深奧なる所から築かれるものである故、たとひ所謂傳統的の宗教を受け容れる事が出來ないとしても、其深刻なる內部の切なる要求を滿す爲めには何等かの方面に向はなければならぬ。夫れ故青年期に於ては宗教的感情を移すべき種々なる方面が現はれるのである。或る者は哲學的方面に、若しくは科學的方面に、或る者は倫理的方面に、

一層多く自己の情意の滿足を感じてゐるものが多くある。余の知つてゐる或る婦人は始め熱心なクリスチャンであつたが、何かの事によりて從來の信仰を打ち棄て、茶の湯挿花の稽古に耽るやそれによりて無上の慰安を味ふ樣になつてゐる。それから知的方面に走るものにあつては眞理を追求しそれによりて滿足を感じてゐる事恰も宗教的信者が自己の信仰によりて安心立命を得てゐる樣と異らぬ。之れは青年ではないが故加藤弘之博士などは全くそれであつた。宗教感情の現はるゝ倫理的方面は青年期に於ては最も盛んなるものである、「心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神は守らん」と云ひ、或は吉田松陰の「至誠動天」と云ふなどは即ちそれである。よい事をする事が宗教であつて、其外に宗教の意味はないと考へてゐるのは青年期に宗教感情の現はるゝ一方面である。スターバックの調査によれば倫理的方面に現はれるのが女三三%男四三%で、知的方面に現はれるのは女二一%　男三二%　美の方面に現はれるのは女一五%男一六%である。(宗教心理學二七三頁)。して見ると宗教感情に代用せらるゝ方面は男女共に倫理的方面が最も大である。

(3)青年の心に映じてゐる神

兒童期に於ては神は常に具體的のもので、何らかの形體をそなへたものとして其心に映じてゐたのであるが、青年期に於ては無型なもの抽象的なものとなる。勿論青年と雖も矢張り具體的に神を考へてゐるものはあるのであるが、一般に神の觀念は抽象的となるのである。石神氏によると神佛を無形者とするものは男三・二　女五・六であり、偶形者とする者は男には一人もなく、女に四・二ある。而して神を一種不可思議のものとし、又は「精神」であるとし、「良心」と「絶對」「萬有」「實在」「理想」「假想」「自己の心」などゝし、「祖先の靈」とし、「超人」とし、或は「絶對」「萬有」「實在」「理想」「假想」「自己の心」などゝして云ひ表はすに至るのである。石神氏の調べた所によるに神佛を「假想」(例へば「圓滿なる人格、神聖なる想像物」と云ふが如きもの)が最も多く、「自己の心」と「祖宗の靈」は共に七、九%で第二位を占めてゐる。併し「假想」の一七、五%に比すれば遙かに小である。而して「假想」は男子に於て多く、女子は男子に比して頗る小數である。「自己心」は矢張り男子に比して多く女子には少ない。然るに「祖宗の靈」は女子は男子よりも遙かに多くなつてゐる。

尙其他の項目を一々擧げて說明する事を止め、石神氏の作つた表を直ちに上に揭げて

	男	女
不可思議者	1.6	1.4
對象	6.3	2.4
靈的存在	7.9	26.4
想像	1.6	1.4
想	4.8	1.4
心	3.2	
心	12.7	2.4
己	17.5	5.6
人	1.6	2.4
宗		1.4
仰	7.9	1.4
可	65.1	47.2
信		
祖		
心		
超		
絶		
實		
假		
理		
良		
自		
計		

置く。

神の數は兒童期に於ては、年の長ずるに從つて增加する事をさきに述べて置いたのであるが、青年期に於ては次第に神の數を減じ十八歲頃には一神敎になつてしまふのである。青年には概括作用發達する故神佛は漸次併合せられてしまふのである。」

兒童期に於ては神は兒童の方便であり、自己の或る目的を達せん爲めに神を利用して居つた事は前章に述べて置いたが、青年期に於ては神に或る一種の權威が認められ、青年の心は神によりて左右せられるものゝ如く考へられ、且つ此の宇宙を創造しそれを支配し、人類の上にありて常に權威を以つて臨み、人類の運命を左右するものと思ひ、神人の區別判然と辨へられ、信賴歸依の傾向が一層著しくなる。而して神の救助を受くるには「正しき行をしなければ」「ベストを盡さねば」「自分の罪を悔改めなければ」と云ふ風に一定の條件を必要とし、又一定の義務を思ふ樣になる。又祈禱をなすにも赤心を吐露して神の哀を乞はんとし、眞劍なる態度を現はすに至る。

石神氏によると青年男子は神佛を「救濟者」とするものが最も多く、一二、七%である。神佛を「慰藉者」とするもの、「慈悲者」とするものは共に 四、八%、「支配

者」とするものは三、二%、「守護者」とするものは一、六%である。女子に於ては神佛を「慈悲者」とするものが最も多くして一三、九%であり其次ぎには善惡照覽者とする者で、それが一二、五%である。其他「守護者」とするもの九、七%、「創造者」とするもの四、二%、「支配者」とするもの、「救濟者」とするものは共に一、四%である。(「宗敎心の研究」七一頁)

更らに進んで神の能力が青年の心に如何に映じてゐるかを調べて見やう。それに就いて次ぎの四つの方面から考へて見る。

一、道德的。兒童期に於ては神は懲罰的であつたが青年期に於ては善を勸め惡を矯正し、人類の人格を向上せしめ常に善導する者と考へられる。」歷史から考へても古代に於ては神は惡人を罰して之れを亡ぼし、善人のみを救ふものと考へられてゐたが、個人の發達に於ても即ち同樣である。惡人でも善化して救ふと云ふ考は青年期に至らねば現はれぬ。

二、全知全能。神の能力として全知全能を意識する事は兒童期に於ても既に認められる事は前章に於て述べた如くであるが、青年期に於ては一層それが發達するのである、田中氏の調査した所によるに全知全能を意識するものは十一歲に於て僅に八%、十二歲に於て一〇%であつたものが、十三歲以後に至りて急速に增し、十六歲に至りて頂點に達し、其後は青年の抽象作用

が精に入り密に進むにより、幾多の疑惑を生じ、遲疑逡巡遂に五里霧中に彷徨する爲め、漸次其歩合を減ずる傾向を呈するといふのである(一七九、一八〇頁)。

三、博愛的。兒童期に於ては神の恩惠は主として個人的、利己的であつたが、青年期に至れば漸次社會的となる、「神は一家を幸福ならしめる」とか「世界を正義正道に導く」など此れに類する思想が此の時期に加はつて來る。

四、安心立命。兒童期に於ては未だ安心立命の思想は充分現はれてなかつたのであるが、青年期に至りて此の思想が始めて現はれて來る。併し此れは始めは現在的の安心立命であるが、進んでは永遠に希望を認めて眞の宗教的安心立命の思想を抱く樣になるのである。

死及び靈魂の觀念　兒童期に於ては有機的組織體の一部停止を以て死と目してゐた。而して其說明は客觀的で且つ現世的であつた。然るに青年期に於ては死を以てかゝる生理的物理的とは見ず、次第に靈的に見て客觀的現世的でなく主觀的來世的に發表する傾向を現はし、青年の思想は漸次其方面に發達する。

一體人間の生きんとする意志がめざめる爲めには死に對する觀念が明瞭になるを要する。始めは漠然生命に對する感じを抱き、其感じを直ちに外物に移し、萬物は皆生命を有するものと

居つた。かゝる時代に於ては生命は即ち常態であつたのである。然るに死の現象は次第に强き疑問を起し死は果して何物であるかを深く考へる樣になり、一方に於ては生きんとする希望が熱烈になり、死を厭ふの念が盛んになる。然るに死は何人も免かる能はざるものである。夫れ故人の思想が現世的より來世的に進むのは自然である。「而して人は身體の外に靈魂を有してゐる故、身體は死するも靈魂のみは永久に存在するといふ、即ち靈魂不滅論も現はれるに至るのである。されば人は死を知つて始めて生に對する自覺を生ずるものと思はれる。

青年は死の淵を越へて來世を見る樣になつた。而して人の身體は死して土塊となるも、靈魂は不滅にして永久に存在するものと考へるに至つた。所で靈魂そのものは如何に考へられてゐるか、幼少なる子供に靈魂(たましひ)とは果して何であるかと問ふも殆んど答へる事は出來ぬ。よし答へるものがあつても、聞いたまゝを答へるか、さもなくんば聞いた事に多少自分の想像を附加して答へるかであるが、其說明は常に具體的物質的である。或る子供は人間の身體の中に靈魂なるものがあると教へられ、身體をさすりながら硬き骨を指して之れが靈魂かと反問した。或る子供は鼠が車にひかれて道に倒れ臟腑を露出せるを見て「鼠の靈魂が出てゐるから來てごらん」と慌いて告げて來た。又血が傷口から出るのを見て靈魂が出てゐるよといふものもあつた。如

斯兒童期に於ては靈魂を說明するに未だ物質的境域を脫して居らぬ。併し青年期に至ればかゝる物質的說明に於て滿足をせず、而かも知識未だ其れを說明するに充分ならざる故、多くの者は「不可解のもの」とするのである。「不可解」とは知識的には否定であるが、感情的には肯定である。蓋し青年には感情强くホールは前にもいふた如く青年に於ては其精神の四分の三は感情であるといふてゐる。斯の如く精神の大部分を占むる青年の感情はたとひ知識上否定し說明し能はずとしても、感情上では肯定し得るのである。靈魂を一種不可解のものとなすは實に青年の大部分を占めてゐるのである。併し靈魂を不可解のものとする者の外、一步進みて心又は精神といふ言葉を以て說明する者も青年期に於て現はれる。此の種のものは靈魂を單に不可解のものとして置く能はず、どこまでも知識上の肯定をいひ表はさんが爲め、靈魂を精神とか心とかいふのである。或は又之れを良心であるといふ者もある。靈魂を良心であるといふに至れば、そこに始めて其道德的性質が說明される事になる。此の外靈魂を以て「電氣の如きもの」「神の一種」「神經」「無色無臭のもの」「腦髓」「エネルギー」などの言葉にて說明せんとするものがある。青年期に至りて物理化學生理學等の知識が授けられる故、不可解のものも其等の方面より得た知識により、又それを利用して說明を加へる樣になるのである。

然らば此の靈魂が人の肉體の死と共に滅乏するものであるかといふに、青年の大部分は不滅を信じてゐる。田中氏によれば五割二分が不滅の信仰を有してゐる。而して「靈魂不滅の信仰は年齡と共に其數を增すものと斷言し得べく、滅の唯物的信仰は漸次其勢力を減ずるものと斷言し得べし」といふてゐる（「信仰を基とせる道德的陶冶の研究」二〇一、二頁）。

靈魂が不滅であるとせば、其不滅の靈魂は果して如何になるのであらうか、又死後何所に行くものと考へてゐるのであらうか。幼時期、兒童期などに於ては「遠い所に行つた」とか、「御寺」、「御墓」などに行つたといふのであつたが、青年期に至れば地獄極樂及び天國などに行くといふものが多くなる。尤も兒童期に於ても地獄極樂天國などの考もあるが、併し兒童期に於ける地獄極樂は極めて現世的である。青年期に於ては之れが漸次神靈的になつてゐる。而して兒童期に於ては地獄へ行く、天國へ行くといふ事はいふが、之れに苦樂の狀態を附して考へてゐない樣である。ある事はあつても極めて少ない。それが青年期に至れば其邊の考が一層多く加つて來る。「神に愛されれば死して安らかに天國の如き所へ行き、罪によつては死して煩悶來らん」「良い人は……天國に行き、惡い人は地獄へ行つて永遠に苦しむ」などの如くである。

又青年期に於て輪廻の思想も現はれる。更らに靈魂が漠然と宇宙に瀰漫するものとなすものもある。又更らに神佛と合體するといふ神佛化身說も青年期に於て現はれる。或は又死後は絕對眞理に歸すると考へるものもある。

應報の觀念　右に述べし如く人に死後生前の行爲に應じ靈魂の狀態に相違を來し、或る者は苦しみ、或る者は樂しむ。これ一種の應報の觀念であるが、青年期の應報觀念は兒童期のそれとは餘程異つてゐる。そは善惡の標準が異つたからである。兒童期に於ては多くは作法的外面的に善惡の標準を定めてゐたのであるが、青年期に至り動機的良心的社會的となる。而して苦樂は感覺的でなく心靈的になる。應報者は兒童期に於ては神佛又は人間であつたが、青年期に於ては神佛又は良心及び自然などがいひ表はされてゐる。

宗教的儀式に對する青年の態度　青年は宗教的儀式に對しては一般に冷淡である樣に思はれる。青年は甚だしく精神的になる故形式的の事は意味なきものゝ如く考へるのであらう。特に宗教的儀式をなすは如何にも馬鹿々々しき事と考へてゐるものが多くある。青年が宗教的儀式に冷淡であるからといふて、直ちに無信者と斷ずる事は出來ぬ。「儀式はせずとも心にて信仰すればよい」と考へてゐる者も青年期には多くあるのであるから、此れらは矢張り一種の

確信であつて、必ずしも非難すべきものではない。

青年は一般に儀式に冷淡であるが、凡ての青年が悉く冷淡で全く之れを行はないといふのではない。中には之れを行つてゐるものもある。然らば之れを行ふ動機は何なる考への下に之れを行つてゐるであらうか。石神氏は宗教的儀禮の動機及び效果の兩方面より取り調べてゐる。それによると宗教的儀式を行ふ動機は習慣上のものは男が最も多く、女は「希求」(「夜翌日を幸ひに送らんと祈る」の如きもの)が最も多い。「感謝」の動機よりなすものは男女共に多く、殊に男子に多い。女に於ては「習慣」と「感謝」とは同數である。「尊信」(例へば「長敬の念より之れを行ふ」の如きもの)は女子には多くあるが男子には女子の半ばにも達しない。男子には職務上行ふのがあるが女子には之れがない。(尚上の表を見よ)。次ぎに儀式の效果であるが「歡喜」が男子に於ては最も多く、之れに次ぐものは「慰藉」である。「止惡」(例へば「之れを行ふ時は心に一の邪念もなし」の如きもの)及び「力與」(例へば「之を行ふは心を淸め靈力を得ること益々多け

		男	女
ふの宗教的儀式を行	職務習慣	21.9	25.0
	尊信	34.4	20.0
	希求	9.4	30.0
	感謝	9.4	25.0
の動機	止惡	18.2	14.3
の效果	慰藉	22.7	50.0
宗教的儀式	歡喜	40.3	35.7
	力與	18.2	

ればなり」の如きもの）は共に同數である。女子に於ては「力與」といふのは全く無く、最も多いのは「慰藉」、其次きに「歡喜」「止惡」といふ順である。（上の表を見よ）

第五章　成人の宗教意識

一、序　說

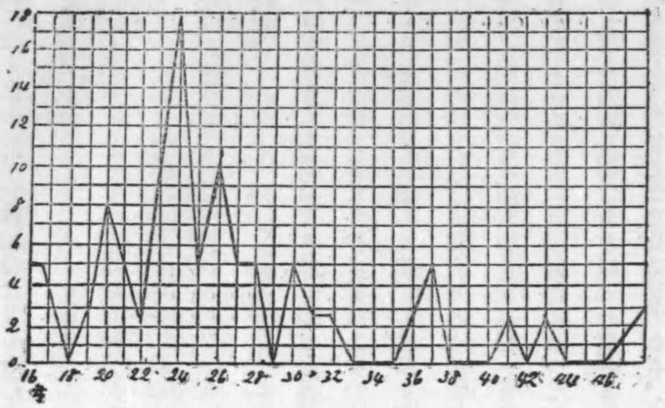
前二章に於て兒童及び青年の宗教意識を概略述べたが、本章に於ては成人の宗教意識を考究して見やう。

こゝに成人と云ふのは二十五歳以後の年齡の總稱であるが、若しさうすれば、假りに人生を五十年としても成年期は二十五年の長き歳月を含んでゐる。況んや七十八十の壽を重ねるものは少なくないのであるから、斯る長期間の事を一樣に見る事は勿論出來ぬ。殊に三十歳四十歳頃と六十歳以後の必理狀態は餘程異つてゐるのであるから、此の成年期は矢張り幾つかの時期に區別して考へた方が便利であると思ふ。夫れ故余は此の時期を壯年期と老年期の二時期に分ちて考へて見たいと思ふ。壯年期と云へば凡そ三十年間であると云ふ事であるが、若し、然りとせば壯年期は二十五歳頃から五十五歳頃迄を稱して云ふ事になり、老年期は五十五歳以後を稱して云ふ事になる。所で此の壯年期の三十年間の長期を又一樣に取り扱ふ事は無論出來得べき事ではない。若し充分の研究をなさんとせば、此の三十年間を更らに十年づゝに分ちて三期

となし、少壯期、壯年本期、老壯期とでもしたらよいと思ふ。老年期も亦何期かに分ちて考へなければならない。併しこゝには別に精細なる研究はせず。只大體の所を單に壯年期と老年期とに別ちて考究する事とする。

二、壯年期

概說　有名な宗教家と認められてゐるものは古來多く輩出してゐるが、今其れらの宗教家の立教の年齡を調べて見るに大低は三十歲四十歲の頃である樣に思はれる。釋迦は二十九歲にして出家し三十五歲にして成道、教を說いた。マホメットは四十歲にして忽然一變し宗教を說いた。弘法大師は三十三歲にして眞言宗敎を開き、傳敎大師は三十九歲にして天台宗を興し。源空（法然上人）は四十二歲にして淨土宗を立て、親鸞上人は二十九歲にして法然の敎を受け始めて志を立て四十歲の時師上人死して後始めて眞宗の基を開いた。日蓮上人の法華妙法の宗義を唱へしは三十二歲の時であつた。ルーテルが改革の事業を記せしは三十四歲、イグナチウスロヨラは三十歲の時身を宗教界に投じ三十七歲にしてゼスイットの新派を開いた。其他道元禪師は三十八歲に曹道宗を、日興上人は四十四歲にして本門宗を、榮西禪師は五十一歲にして臨濟



［宗教心理の研究］　三十九頁

宗を、黒住宗忠は三十五歲にして黒住教を、藤井文夫郎は四十二歲にして金光教を開いた。此れにより て見ると三十歲四十歲の頃は信仰の確定期である事がほゞ推量する事が出來ると思ふ。飯沼龍遠氏は十五名の宗祖師開宗年齡を平均して三七・四六としてゐる（「現代日本人の信仰」一四六頁）。

更らに石神氏の名僧大悟の年齡曲線に就いて見るに二十四歲に於て最高頂點を示し、二十六歲三十歲に於て各々山が出來てゐるが、二十四歲の時よりも漸次減退してゐる。三十七歲の時に三十歲の時と殆んど同じ高さの山があるが、其後は山が又次第に減退してゐる。して見れば信仰の決定期又は確定期は青年期より壯年期に移る頃にあるものと思はれる。而して開宗年齡は信仰が一應確定し、相當の修行を

經て後となる故三十歲以後になるわけである。

壯年期の始めに於て單に信仰の確定期があるのみでなく、此の時期に於て又科學的知力の成熟期がある。それは下澤瑞世氏が自然科學的事功と年齡に就いて調べた結果を見ても明かである。氏は曰く「自然科學的事功は旣に十二三歲の頃より起り、二十一二歲の頃より頓に增加し二十七八歲に於て著しき功程隆起をなし、著大事功亦二十二三歲より漸次增加し來るを見る。三十歲以後は事功著しく頻類高く漸次增加して三十五歲に於て最高頂點を示せり。數學物理化學上の事功の如きもこの頃に於て最も多くあらはるゝを見る。三十五歲以後は著しき頓挫を示し、三十八歲に於て多少の隆起をなせる後は再び頓挫し四十歲乃至五十六七歲迄は高原狀態を呈し六十歲以後は著しく低下し去るを見る」（「心理研究」十七卷第四冊）と。して見れば知的にも情意的にも三十五歲乃至四十歲頃は實に人間の成熟期であると見て先づ差支はないかと思ふ。孔子は「三十而立四十而不惑」と云ふてゐる。かくの如く考へが確固たるものとなり、他人が何と云ふても外圍が如何になつても容易に動かなくなるのは此の頃にならぬと出來てこない。而して俗に四十五十は「分別盛り」と云ふが如く何事をなすにも前後を考へて周到なる注意をなして行動を始める時期である。

青年期に於ては萬事に落付がなく、常に動搖してゐた信仰は、此の時期に入りて落付きが出來る。一般に三十にならねば心に落付きが出來ぬと云ふが實際然うである。三十歲頃になると何となく心に落付が生じて來るのである。と云ふのは精神がそれ程發達したからである。所で精神がそれ自身單獨に發達するのでなく矢張り外部の事情がそれを助けるのである。

此の時期に這入つて起る外部的事情と云へば、此の時期に這入つた者が家庭を造り子供を產み、社會的には漸やく一個の地位を占める樣になつてゐる事を考へても、略想像する事が出來る。此れまで學生々活をなして居つた者は此の時期の始め頃に於て各々專門の學業を終へ愈々實社會に立ち、自己の手腕を各々發揮せんとして努力してゐる。それには事業又は人に對する責任觀念もあり、野心もあり、又生活問題もあらう。それ故此の時代に於て思想の最も中心になるものは實際上の問題で人生問題生活問題などである。而して生活が順調に進んで居れば信仰に急激なる動搖も起らないが、一朝生活が順調でなくなるか、又は行きつまつて來でもするとそこに不安を感じ、宗教に歸依して安心の道を得んとするのである。單に精神的の安心を信仰によりて得んとするのみならず實際生活の安定をさへ信仰によりて得んと企てる傾向さへ生ずるのである。於是乎所謂迷信邪道に走ることさへあるのである。これ成年期に於て迷信が多

くある所以である。家庭に對する責任上、或は社會に對する責任上自己の品性を高むる必要を深く感じ信仰に入るものもある。或は病氣又は子供を失ひし事、妻を亡ひたる事等によりて入信の動機を得る事もある。要するに此の時代に於ては信仰の急激なる變化動搖は斯る外圍の動搖變化を待つて始めて生ずるものであるが、此の時期に入りては外圍に動搖がなければ內部は先づ安定を得てゐるものと思はれる。即ち此れまで煩悶懷疑の中に迷つてゐたものが、此の時期に於て愈々再建設をなすのである。

再建設の時代　此の壯年期の始めに當りて、スターバックの所謂再建設（リコンストラクション）の時代がある。而して其平氏によれば二十歲より三十歲迄の間に二十四、五歲を頂點として此の時期がある。均年齡は男二十四歲半女二十四歲となつてゐる。尙氏は女四二％男三九％は皆此の再建設を經驗してゐると云ふてゐる。

此の時代は實に青年期より成年期に移る一轉期である。それ故再建設時代は成人に入る門戶なのである。

前に述べし如く青年期に於ては種々なる方面に於て矛盾を感じ、煩悶懷疑の雲霧中を彷徨してゐたのであるが、此の時期に這入ると共に外圍の事情は此れまでとは全く變り實生活に於ける要求が盛んになり、之れまで受けてゐた所を再檢察し、新しき解釋を加へる事になる。それが爲め、玆に愈々再建設をなすに至るのである。夫れ故此の再建設の時代は壯年期に於ける最も變化著しい時である。此の時期に於て、此れまで回心の機會を得なかつたもので回心するものがある。つまり青年期に於て平坦な變化なき年月を送つたものは、此の時期に這入つて回心するのである。此の回心も矢張り煩悶懷疑を經て再建設をなしたと同樣の經驗である。

斯くの如く此の壯年期の始めに於て再建設をなすのであるが、又全く此れまでの信仰を絕滅せしめるものもあるのである。絕滅せしめる程でなくても、宗教に對して極めて冷淡になるものもある。例へば研究の餘暇なしとの口實の下に宗教より次第に遠ざかるのは即ちそれである。

再建設に至る狀態　再建設に至る狀態は個人の氣質とか、興味とか、又は外圍の事情の如何によりて種々異つてゐる樣であるが、スターバックは次ぎの六つの項に分つて之れを考へてゐる。

(1)活動によるもの。例へば日曜學校の敎師をしてゐる間に其働きに對する興味から、其働きを繼續してゐる中に、其働きに對する理想など生じ、遂に自己の信仰上に一大變化をなすが如きは尠くないが、此れなどは活動によつて再建設をなしたものと見てよい。

(2)思索によるもの。例へば、幼時教へられるまゝを信じてゐたものが、中途何かの事情に拍かされて之れまでの信仰を破壊し、更らに思索に耽けり、研究をなして遂に再び宗教的興味を喚起するが如きはそれである。

(3)職責（デューチー）によるもの。此れは道徳的の動機からの再建設である。即ち「自分は自分の過失を征服し、自己の理想に向つて其れを標準として生活したい」、「自分はモット高い品性を作り上げたい」と云ふが如きはそれである。

(4)美の方面から這るもの。ウォーズウォースやキーツの如きものを讀み、或は自然の美に接し詩や自然の中にあつて偉大なる美觀に觸れて、一旦は破壊せられてあつた宗教心を再び建設するが如き事あるは即ちそれである。

(5)個人の生活に表はれた美と力を嘆美する事から這るもの。「私の身の上に起つて來た變化の主なる原因は仕事の變化と一人の幼い子供に對する愛とでありました。其子供に對する愛が土臺となつて次第々々に私は他の人間に對して暖い心を持つやうになりました。其内に何ういふ風にして來たのか解りませんけれども、信仰が少しではありましたけれど、私の内に表はれて參りました。」と云ふが如きは此の一例である。

(6)自己を降服（サレンダー）して這るもの。例へば「私は全く自分を擲ちました。未來の生活についての利己的な憂慮を投げすてゝしまひました。自分といふ牢獄から脱け出して、客觀の世界に立ち場を採りました」の如きはそれである。

再建設の結果　再建設の結果或る者は他人の信仰とは全く獨立した自己の獨特の信仰を築き上げ、而して其中に生活し其中に幸福を見出す。或る者は再建設の結果從來の信仰の形式即ち少年時代の信仰に立ち歸りそれに新しき意義を附するに至るのである。他人の信仰とは全く獨立した自己獨特の信仰を築き上げるものは、天才肌の人か又は理性的に餘程偏した人に多くある。かう云ふ人に取つては他人の造り上げたものが一向役立をせぬらしい、併し大部分の人は大抵少年時代の信仰に再び立ち歸り、そのまゝそれを信ずるのである。其中には新しき意義を見出して信ずるものもあるが、單に實際生活の安定を得んが爲めに少年時代の信仰を抱くものが多くある。三十歳以後は現實的興味に支配せられる事が多くなる故、其結果其頃になると少年時代の信仰に立ち歸つても、其中に新しき意義を發見してゐるものは形式に於ては舊信仰であるが、其精神に於ては全く新しくなつてゐるのである。斯くの如くなる故再建設後は種々なる信仰のタイプが生ずるのである。

此の時代の信仰のタイプ　プラットは嘗て質問書を發して宗教的信仰の基礎は何であるかを調査した。其時彼は六十八の答案を得、それを五つに分類した。第一は知的で、第二は敎へられたから信ずると云ふ者、第三は惰力的に信ずる者、即ち信仰を止めるよりも續ける方が容易であるからそれで信じてゐると云ふもの、第四は神を信ずる事が必要であるから信ずると云ふもの、第五は感情より信ずるものである。（マッコマス「宗敎的宗派の心理」三四―三七頁）吾人は成年期に於ける宗敎的信仰を見て矢張り此の五種のものゝある事を見るのである。或るものは知的な信仰を抱き或るものは感情的な信仰を抱いてゐる。又或るものは此れまで信じてゐるものもあり、又或るものは何か神を信ずる必要を感じてそれが爲めに神を信ずる者もある。されば予は次ぎに特に五種のタイプを擧げて見やう。此の五種のタイプはプラットがなした分類によつたのではないが、プラットの分類した五種の類型は其内に含まれてゐる積りである。

(1)素朴的信仰　此の時代に現はれる信仰のタイプの一つは素朴的信仰である。即ち云はゞ原始的のものである。原始的と云ふのとは趣が異つてゐる。野蠻人や子供の原始的信仰には進歩が豫想せられる。どんなに進んだ宗敎でも始めから同じ形式を保つてゐるのではない。皆單純素朴なる信仰から漸次發達進歩したものである。故に素朴的信仰と云ふても然う云ふ將來進歩の豫想のあるものは兎に角とし、成人の素朴的信仰と云ふのは單にプリミチーブの信仰と云ふのとは違つてゐる。子供時代に敎へられた事をそのまゝ信じてゐる信仰は此の部類に數へなければならぬ信仰である。又此の素朴的信仰は多くの場合寧ろ迷信と云つた方がよいと思ふ。

此の種の信仰を抱いてゐる人は其實際生活の安定をのみ求めんとする所から、即ち現實生活に對する興味にのみかられる所から、其信仰性質が如何にあつても、信仰の對象が何であつても、そんな事は少しも考へる所ではない。單に實生活に對する欲求が充されさへすればそれでよいのである。東京附近で云へば羽田稻荷や川崎大師成田不動などの如きものが盛んに信仰されてゐるのを見れば、如何に此の種の信仰を有するもの〻多きかと云ふ事が想像される。

迷信　ついでゞあるからこゝに少しく迷信に就いて述べて置かう。一體迷信と云ふのは何であるかと云ふに、それには定義を作る事は甚だ困難であるが、これまで迷信と云へば直ちに科學的知識にもとる信仰を稱して悉く迷信と唱へてゐたのである。中村古狹氏が定義した所を見

ると「その時代の科學又は一般的知識で眞實でない。或は合理的でないと云ふことが明白に分つて居ることを信仰するのを名づけて迷信と云ふ」と云ふのである。尋常小學修身書教師用巻四にも「すべて道理の正しからぬ事に迷ひこれを信仰し之に依頼することを迷信と云ふ」とある。併し科學的知識を尺度として迷信正信の堺を附せんとした所で到底駄目である。若し科學的知識を尺度としてはからんとならば、恐らく凡ての宗教は迷信となつてしまふであらう。一體科學的知識は宗教的信仰を徹底的に評價する權能を有して居らぬ。のみならず知識は日々に進歩して止まぬものを以つて宗教的信仰を評する事は誤つてゐる。それ故固より科學的知識の光に輝して見る必要がないと云ふのではない。が單にそれのみを尺度として迷信と正信とを區別するといふのは誤りである。野蠻人や子供の信仰は吾々文化の域にある成人の信仰より見れば皆迷信であるとせなければならぬ。併しそれを信じてゐる野蠻人や子供に取りては迷信ではない。進歩した宗教は迷信から發達したとは云へないからである。それで迷信正信の區別を付するには主觀が宗教に對して現はしてゐる態度にも認めなければならぬ。宗教は或る意味に於て主觀の產であつて、外部からかれこれ評する事の出來ぬものがある。而して宗教は元來全生活そのものゝ擴大であり延長である故、宗教は生活の本

體である。然るに他に別箇なる生活觀念が現はれ、其生活の爲め宗教を利用すると云ふ事になると其場合は其個人に取りては其利用されてゐる宗教的信仰は迷信であるといふの外はない。それでかくの如く宗教を生活の爲め利用せんとする傾向は即ち此の時代に於て最も盛んに現はれるのである。幼年期は所謂見聞時代とも云ふべき時代で他人のなす事を見、云ふ事を聞いて其のまゝ信じてゐた。併しそれをそのまゝ信じて何の疑ふ事もなかつた。それをそのまゝ信じてゐると、それを直ちに迷信といふ事は出來ぬ。青年期に達すれば感情が著しく發達し空想や想像が盛になり、且つ事物に對して科學的說明を得んとするよりは神秘的方面に憧憬する傾向が強い。それ故かゝる時代は宗教心が盛んに湧起して來るのである。而して極めて感情的な信仰に因はれる事が多いのである。併し青年期の宗教を取つて未だ迷信と評する事は當を得てない。何となれば青年期に於ては生活そのものが宗教であるからである。所が成人期に達すると生活と宗教が全く別になり動もすれば生活の爲め宗教が利用せられる事になる。大きな無手を家に持ち込んで其年の幸福を祈るが如きはそれである。かゝる傾向のあらはれる時は即ち迷信發生の時期なのである。

(2)傳統的信仰　此の期に於ける信仰の第二のタイプは傳統的信仰である。兒童期に於て教へ

られた信仰をそのまゝ再び思ひ出してそれを信じて居るのは素朴的信仰の中にもあつたが、此の傳統的信仰の中にもある。一體習慣は如何なる習慣でもそれが一旦根づいてしまへば仲々のことにはなくなるものではない。青年期に於ては精神の發達上動搖を來し、以前の習慣をそのまゝ奉ずるのであせんとする夢を呈したが、其の動搖が一旦をさまると再び以前の習慣をそのまゝ奉ずるのである。勿論誰でも皆然うであるのではない。舊習慣を全く打破して全く新しき天地に住ひ、成人期に入りても尙其れを繼續するものもあるのである。

昔バッサイ宗の者等が祖先傳來のユダヤ敎を習慣的に信奉してヨハネやキリストの新しき宗敎運動に反抗したのは此の種の信仰を抱いてゐた者の著しき例である。更らに基督敎のオーソドックスの人達の中には此の傳統的信仰に支配されてゐる人が多くある。佛敎徒の中にも又多く此の種の信仰を有する者がある。

此の種の信仰を抱いてゐるものは單に祖先が斯く信じてゐたといふ所にオーソリチーを置いてゐるに過ぎない。

(3)道德的信仰　第四のタイプは道德的信仰である。子供らしく傳統的の信仰に依賴してゐるのでなく、たとひ傳來の信仰の形式を保つてゐても信仰する動機とも見るべきものは道德的で

ある。善をなさんが爲めに神を信ずる。此の種の信仰を有する人の信仰の對象は善の源であり善の最高なるものである。故に神は善行爲の理想であると見られてゐる。小學敎員で「二十七歲の時自己の品性を高むる爲めキリスト敎を信仰しエス樣の如き完全なる人たらんと祈をなす」(西澤氏より)といふが如きは其の一例である。

(4)知的信仰　第五のタイプは知的信仰である。此の種の信仰を抱いて居るものは他人の抱いてゐる信仰をそのまゝ受け納れる事が出來ぬ。傳統的信仰の場合の如く兒童期に敎へ込まれたものをそのまゝ信ずるのでなく、愈々信ずる所まで到るには一應何らかの論證を試みる。而して自ら滿足する程の論證が出來れば信ずるが、若し出來なければ信ずる事はせない。かゝる人は大底哲學的の神を其對象として信じてゐる。それ故其神は哲學者の所謂眞理といふのと同樣である。而して眞の神を信ずる事の出來ぬ人である。セコンダリーの神を捕へてもファストハンドの神を捕へる事の出來ぬ人である。

しばゝゝある事であるが、多くの宗敎の美點と見らるべきものをつき合せてこれこそ眞の宗敎なりと標榜してゐる者は此の知的信仰の人である。

(5)感情的信仰　ブラットは六十八人の答案を得て、其內三十六人は感情的信仰を抱いて居り

十四人は何か或る神秘的經驗を有つてゐる。故に六十八人の内都合五十人までが此の部類に屬する人であるといふてゐる。以て感情的信仰の如何に多きかを覗ふ事が出來る。感情的信仰といふのは神に對する欲求、又は願望、或は又一種神秘的要素の上に築かれたものである。神は自分の唯一の希望であり、力であると感じて神を信じてゐるもの、自分はどうしても神を信仰し其神に祈を捧げなければ居られぬ樣に感じて信じてゐるもの、即ち自分が神を信ずるのは何も他に理由があるのでなく自分では信じまいとしても信じないでゐる事が出來ぬ故、此の自然の欲求の爲めに信ずる者、即ちボーロの信仰の如きもの、又自分が常に神の現前にある如き神秘的感情の爲めに信ずるものなどは皆此の種の信仰家である。

職業と信仰　職業は其人の境遇を造る大なる要素であるから、職業の如何によりて信仰の工合が餘程變つて來る事はいふまでもない。併し實際調査して見るとなれば、それには甚だ困難が伴ふて來るに相違ない。何故なれば一人にして數種の職業を有するものが多くあるからである。併し何とかして之れを調べる事を得ば、面白い事實が見出されるに相違なからうと思ふ。此れまで未だ職業と信仰との關係を細しく調査したものがない故、茲に實驗的研究の結果を取つて何もいふべき材料がないのは殘念である。極めて俗な方面に眼を注いて觀察して見るに、

例へば金光敎の信者の多くは商賣人であるが如きは商人の營利心を充す或るものが金光敎にあるからである。又職業の割合に着實なそして安全なものに從事してゐるものは迷信に陷る事が比較的少ないが、これに反して非常に不安なそして危險な職業に從事するものには迷信が多いのなどを見ても職業と信仰のタイプとに大なる影響がある事を認める事が出來る。相場師、株屋、請負師、藝娼妓など投機的又は僥倖的の職業に從事せるものは成田不動や羽田稻荷や川崎大師の如きものを信じてゐる。

外部的影響　外部的影響の最も著しい事實は少年時代及び青年時代に於て認められる。壯年期以後には殆んど外部的影響はない。少年時代に於ける外部的影響は極めて穩かなるもので、家庭の影響、父母の影響、敎會の影響などである。子供は極めて感じ易きものである。處が青年期になるとそれがもつと歪曲的になる。青年は人や書物などに廣く接觸し、而して其宗敎生活は科學的思想によりて動かされ、藝術や自然に對する情熱によりて湧き起される。不幸や困難によりて揺り動かされる事も多くある。青年は爆發的狀態の中にゐるもので如何なる影響に感動するか一向解らない。處で成年期になると外部的影響には容易に動かされなくなる。此の時には習慣が既に出來て居り其行くべき道も既に定まつてゐる。思想も感情も既に固定してゐ

る。それ故成年は外部からの影響に支配されず、自己の理想によりて支配される。少年時代青年時代に於ける如く外部からの影響によりて動かされるのでなく、内部からの影響を受けるのである。

成年期の信仰内容　成年期に於ては信仰の内容は如何、これ次ぎに考へんとしてゐる問題である。處でこれに就いては未だ研究が甚だ不充分である。我國の如き種々なる宗教の入り交つてゐる國に於ては極めて複雑したものがあるに相違ない。併し我國人の成年期に於ける信仰に就いては未だ調査したものゝあるを知らない。それ故止むを得ずこゝにはスターバックの研究の結果を以つて述ぶる事とする。彼は壯年時代の宗教意識に於る中心的信仰ともいふべきものを擧げて統計表を作つてゐる。それは次ぎの如くである。

	女	男
神	七五	七五
キリスト	四三	四四
永生	二三	二八
行爲	二一	二八
内なる生命としての宗教	一五	二一

發達の過程としての宗教……九
哲學上若しくは科學上の思想に集中したる宗教……二七
五　二四

こゝに單に神とあつてもスターバックの說明を見るに其名稱は種々異るものがあるのであつて、或は造物者といひ、律法といひ、父と呼び、或は愛といひ、力といひ、或は根底に横はれる實在といひ、或は凡ての物の中にある靈といひ、其他種々ある。又キリストに就いても或る者はキリストを個人的救主といひ、或る者は世界の救主といひ、或る者は完全なる理想的人格といひ、或る者は單にキリストとして其内容を示してゐない。靈魂不滅に就いても大低は其内容を表はして居らぬ。或る者は未來生活を非物質的であるとし、或る者は既に存在せるものは不滅性のものであるといふてゐる。行爲といふのは、宗教の本質が正しき行爲であると見る者を含んでゐる。内なる生命としての宗教といふのは、自己の内部に高き生命を認めるものである。宗教は高き生命に對する若し高き生命がありとせば、そは人格のうちに現はれるものである。宗教は知性によりて獲得するのではなく、信仰によりて得るもの一つの衝動として存在する。宗教は知性によりて獲得するのである。生命の本質は靈であるなどいふのは皆此項の中に含まれてゐる。次ぎに成長の過程としての宗教といふのは例へば「宗教は上に向つて絶えざる進歩を意味す」といふが如きもので

ある。哲學上或は科學上の思想に集中した宗教とは例へば「眞理の哲學的追求と理想に對する獻身とが私の宗教である」とか、或は又「私は自分の希望する凡てのものを自然の法則のうちに求めて居る」などいふのはそれである。

要するにこれによりて見ると壯年期に於ける信仰の内容は男女何れに於ても神が最も多くある。神は晩れの年齢に於ても信仰の最大中心である。併し神に對する信仰の内容は年齢の相異と共に大に異つてゐる。少年時代と青年時代とは同じく神と呼ぶも其内容は著しく異つてゐる事は既でに述べた。成年期の神は青年期のそれとは又大に異り、思想の極めて複雜したものがある。スターバックのいへる如く、或る者は造物主といひ、或るものは父といひ、或る者は愛といひ、或る者は力といひ、或る者は法則といひ、或る者は實在といひ、或る者は靈と呼ぶ。それはキリスト教國であるからであるが、若し我國の如き複雜した國柄であると、自然とか、天とか、天帝とか、佛とか、如來とか、アミダとか、種々樣々な名稱を附して呼ぶであらう。

キリストに對する信仰は神の信仰についで大である。此れはスターバックによれば壯年者の中で未だ再建設の狀態に進まない者には表はれて來ない信仰である。處が再建設後著しく顯はれて來る。併し此の信仰は變化なき平穩なる成長をなして來た者にあつては、年と共に幾分か

減ずる傾向がある。此れに反して神、靈魂不滅及び倫理的方面の信仰は年齢と共に增すのである。

キリストに對する信仰に次いで多いのは靈魂不滅の信仰である。此れはスターバックによると、矢張りキリストに對する信仰の如く、再建設に未だかゝつてゐない壯年の者の信仰の中には顯はれてない。再建設後に至つて俄かに現はれてゐる。

未來觀念に就いては飯沼氏も調べてゐるが、其れによると（現代日本人の信仰一六九―一九一頁）

(1)	個體的靈魂の存續と解せるもの	二一六
	(a) 有	九十七
	(b) 無	五十八
	(c) 老へし事なし又老ふる能はず	五十八
(2)	個體的靈魂を否定し又は別意に解せるもの	二一
	(a) 人格的永世	七
	(b) 子孫となりて	七

(c) 事績となりて歴史的に

(d) 人々の記憶の中に

此を見るに全體の約半數は靈魂の不消を信じてゐる。リューバは種々なる學者に就いて此れを調べたが、其結果彼は餘り名高くない自然科學者で八三、八%、餘程名高い自然科學者で六七、七%が靈魂不滅を信じて居り、小生理學者の六八、四%が矢張り此れを望んで居り、其他社會學者、歴史家などの中にもパーセンテージは之れらと略ぼ同樣であつた。心理學者の中には靈魂不滅を信ずるものが最も少ない、只五三、八%あるのみである。數年前心靈研究會の米國支部にて「君は死後生存せんとするや否や」といふ質問を發して答案を取つたが、其時三千二百十八人の內二千九百九十三人が之れを肯定し、二百二十五人が否定してゐる。プラットの三人の學生が學生の中に「君は未來の生活を希望せられるか」といふ問を發したが、其時六十五の答案を得、其中五十八が「然り」といひ、僅か七が「否」といふてゐる。シメオン、スピッドルといふ人は百〇七の答案を得、其の內九十五が此れを希望し、他の十二が無關心であつたと報告してゐる（プラット「宗教意識」二三二、三頁）。此れ等の何れを見ても靈魂不滅を信ずるものは半數以上で、飯沼氏のはそれに比すれば甚だ少ない。何故に少な

いかは今直ちに斷じ難いが、我が國人の如き宗教的に不幸な教育を受けて來たものには或はそれが當然であるかとも思はれる。それにしても約半數が靈魂不滅を信じてゐるとせば先づ多くあるといふてよい。然らば此の信仰は如何なる根據に基づくやといふに飯沼氏に依れば、

(1) 教義に依りて之を信ず

(2) 單に自己の信念

即ち前者は教典に說かれてある處を信受してゐるもの、後者は幾分か先哲の遺訓によつてはゐるが、大體に於て自己の意見によつてゐるものである。而して自己の信念によるもので勢力物質の不滅則より、或は進化論の見地より推して科學的見地よりの信念を有する者、哲學的見地より信ずる者、整理觀念として信ずる者、經驗的體證によりて信ずるものなどがある。教義によりて信じてゐるものは全然經典に依るものと、自己の思索を加味せるものと二種ある。

死後の狀態に就いても亦教義によりて信じてゐるものと、自己の想像によりて信じてゐるものとある。自己の想像によりて信じて居るものは若し精細に檢すれば、各人殆んど各別であるけれども、大體上より分類すれば哲學的に解せるもの、一種の靈界とせるもの、又來世は宛も雲の如く夢の如き美感に擊たれたる如きものといふ風に漠然と想像せるもの

其他愛の滿たる所とか、理想の實現さるゝ所とか云ふのがある。死後を一種靈界と信じて居るものでも、全く現世と同じとせるもの、現世に似たりとせるもの、惡人は沒落し善人天上するなど考へてゐるものがある。

それならば人は何故に未來を信ずるかといふに、プラットは此の信仰が主として願望の上に築かれてゐる事を述べてゐる、(「宗教意識」二三四頁)。人は元來自己保存の本能を有してゐる。此の本能はフランケンの云へる如く最も有力なる本能の一つで墓を越えて彼岸に出て行く、それ故靈魂不滅の願望は自己保存の本能の現世界から飛び出たものに他ならぬ。

未來觀はそれだけにして再びスターバックの表にたちかへり、內なる生命としての宗教は倫理的の信仰に次いで數は多く顯はれてゐる。これは成長としての宗教と共に未だ再建設期に入らぬ者には全く認められない。而して再建設期中よりも再建設後に至りて多く現はれる。年の進むと共に益々多くなる。成長としての宗教は女に於ては再建設中に多く、男子に於ては再建設後に多く現はれる。哲學上若しくは科學上の思想に集中した宗教は女子よりも男子の方が著しく、再建設期に入る以前に既に甚だ多くなつてゐる。而して女に於ても男に於ても若し變化のない平穩な發達をなして來たものであれば、年齡の進むと共に增して行く、併し變化ある發

達をなす者にあつては其反對である。何故に平穩な發達をなしたものがこの知的宗教が多くなるかと云ふに、そは即ち青年時代に於て宗教上の問題を取つて餘り考究しなかつたので、壯年時代に入つて漸やくそれを考究するに至つたからである。

壯年期に於ける宗教感情　宗教感情は時代によりて著しく異つてゐる點がある。少年時代に於ては神に對する親密な感情特に神に對する愛と信任の感情が多いが、崇敬及び畏敬は殆んど現はれてない。併し壯年時代には崇敬は甚だ多く出てゐる。少年時代には崇敬の代りに恐怖が出てゐる。崇敬は恐怖心の發達したものである。神との親密さは壯年時代に於ても著しい。少年時代の宗教で最も著しいのはクレヂユリチーと神を利用する傾向である。壯年時代にはそれの代りに依賴心が最も多くなつてゐる。年齡と共に最も著しく進んで來るのは依賴心(デペンデンス)と崇敬(レヘレンス)と神との一體(ワンネスウヰズゴッド)の感と信賴(フェース)とである(ス氏「宗教心理」三三三頁)。是れ等は少年時代より既にあつたのであるが年と共に增してゐる。シユライエルマツヘルが宗教を信賴の感であると定義して以來漠然と信賴の感と宗教とを密接なる關係に認めてゐたのであるが、宗教心理の研究者が實驗的に調べて、矢張りこの感情の著しき事を認めたのである。スターバックは依賴心(デペンデンス)が年齡の進むと共に如何に進むかを表にて示してゐる。(同上)

年齢	一六―一九	二〇―二三	二四―二九	三〇―三九	四〇―以上
女	13	27	27	33	50

信頼心は男女何れにも多いのであるが、殊に女に男よりも多い。」感情の方面から云へば宗教の發達は右に述べた四つの感情即ち信頼心崇敬神と一體の感及び信頼に現はれてゐる。而して此れ等の感情は少年時代より既に現はれてゐたといふのみでなく、年齢と共に益々多くなるのである。是等の感情は自己と自己以外の大なる生命との關係を示して居る。而して宗教の根本的眞理は神と人との關係に集まつて居るのである。

壯年期の祈禱　祈禱は宗教の心臓であるとコー教授は云ふた。サバチエーは祈禱を以つて直ちに眞の宗教であるとした。而して内的祈禱なき所に宗教あるなしと云ふてゐる。更らにヂエルケームは「宗教の目的は其對象と我との關係を調整する事で、祈禱とか供儀とか或は和解（プロピチユエーション）的儀式などのなき所に宗教はあり能はず」といふてゐる（「宗教生活の原始的形式」三〇頁）。

ゼームス博士も亦祈禱は人間の天性より出づるものである事を說いてゐる（「心理學」第一卷三一六頁）。即ち祈禱は人間の天性より出づるものにして、自然の要求に外ならずといふにゐ

る。されば祈禱の心理を探るは宗教心理に於て最も肝要なる事である。佛教の眞宗などでは祈禱を排してゐる。併しそれは祈らずとても恩惠が與へられ守護が加へられる故、それに祈禱をすれば催促をする事となる。夫れ故祈禱をするは甚だ不見識であると考へるからである。然し眞宗の信徒に内的祈禱がないのではない。祈禱をせないと云ふ事その事が既でに内的祈禱なのである。

さて壯年期に於ける祈禱は如何であるかと云ふに、幼年時代のそれとは餘程趣きが異つてゐる。幼年時代に於ては何でもかまわず祈つてゐた。でたらめの祈であつた。或る時或る母親が井につるべを落して其れを上げるに苦心してゐたが、其れを見てゐた五歳の女の子が神樣につるべが上る樣に祈つてやると云ふて跪づいて祈つた。又或る子供は母親に叱られて、自分を打つた母親の手を取つて下さいと祈つたと云ふ事もある。そう云ふ風に幼少な頃は何でも、かまわず神に祈つてゐた。前に述べて置いた如く幼少なる子供は神を利用してゐたのであつた。成人になると餘程進んでゐる。神には如何なる事を祈るべきかを考へて祈る。即ち知的作用が加はつてくる。而して神を自己に利用すると云ふよりも神の意志に服すると云ふ方面が表はれて來る。キリストがゲッセマネの園に於て捕縛せられる直ぐ前、血の汗を流して「父よ御旨なら

ば此の杯を我より取り去りたまへ、然れ共我が意にあらず御意の成らん事を願ふ」（路加傳二十二章四十二節）と祈つた。こは神の意志に服する祈の最美なるものである。祈禱の效果を疑ふ心は理性の發達し始める頃、卽ち十一、二歳頃から盛んに起り始め十四、五歳頃は其頂點であつた。併し青年期に至り祈禱に對する懷疑は漸らぎ、多くは他人が信心してゐる故滿更利益がないでもなからうと考へたり、或は祈禱の效果は兎に角とし、心の慰安の爲めに祈禱するに止まるなど考へたりする樣になるのである。それから進んで成人になると祈禱の聽き容れられるや否やは全く神の意にある事と信じ、又時には祈禱の聽き屆けない事を自己の信仰の薄弱にして誠心誠意の不足に原因する事と考へる樣になる。而して熱烈なる祈禱を神にさゝげ、それでも聽かれざる場合は神の方に深意が存してゐるものと信じ、祈禱の聽かれざる事は神の攝理に協ふてゐるのであるとする。此れは一方より云へば神に對する熱心の薄らいだものと云へる。併し他方より云へば神と云ふ大なる能力に自己を服せしめる最も美はしき發達である。始めは自己の願望を滿す事のみを考へてゐて對象の如何は考へなかつたが、後には對象を主として考へる樣になる。兎に角成人は神の攝理を信ずる故、祈禱と事實との矛盾を苦にせなくなるのである。同じ神の攝理を信ずるにしても次の樣な不眞面目なものもある。其中には單に神の

攝理を信ずると云ふ事丈けでなくして、一つは習慣性によつてゐるものである。中村歌右衞門と云ふ役者が「自分は家内に勸められて自分の病氣の時は信心する事があるが、御利益があると思へばあるし、無いと思へばない。神樣が聽くか否かは先方の御都合に任す」と云ふた。又同じく役者で中村吉右衞門は「辨財天には聲の良くなる樣に、清正公には人に負けぬ樣に各々神樣には夫々の受持がある樣に思つてゐるので、病氣の時も夫々の神佛に參詣してお願ひをする。御利益があるか無いかと云ふ事に就いて考へれば勿論無いと思ふので成可く考へない樣にしてゐる」此れは二つともに役者の例であるが、何も役者に限つた事はない。役者以外の者にも此の種のものは多くあるのである。

三、老年期

老人の心理　幼年期少年期は別として、青年期は概して云へば其生活が未來に向けられてあつた。未來に大なる希望を抱いて生活してゐる故、現在に滿足せず常に不平不滿に充され、煩悶苦痛をなめてゐる。然るに壯年期に至ると現在の生活に多忙にして、未來の事を考へてゐる餘裕がない。然るに老年期になると身體の衰へると共に活動は出來なくなる。新進の士は出で

ゝ其鋭氣を振つてゐるが自分は既でに活動は出來ず、時代には忘れられて來る。身の自由はきかなくなる。それで愚痴も出る樣になる。而して記憶をたよりに若い頃の思ひ出を物語りて責めてもの慰めにする。何か云へば現在を呪つて過去を讃美する。

斯う云ふわけで老人は過去に生活してゐるのである。それ故若い者とは自然話が合はぬ。老人が口をきけば「又年寄りが」「又昔自慢が出た」など云ふて、若い者はまるで取り合はない。それで若い者のする事はとかく氣に喰はぬから意見をする。折さへあれば敎訓がましい事を云ひたがる。意見をし敎訓をするには常に自分の經驗を金科玉條とする。と云ふ樣なわけで老人は常に過去を追懷して生活してゐるのである。固より凡ての老人が全く過去に生活して未來に生活する事も現在に生活する事も全然せぬかと云ふに然うではない。人は子供でも青年でも老人でも皆未來を自己に消化しつゝあるのであつて、何人も其意味から云へば現在に生きてゐるのである。併し自分の精神で何れに重きを置くかと云ふ事になると、老人は一般に過去に生活してゐると云はねばならぬ。併し敎養の深い老人、心がけのよい老人にあつては過去を追想すると同時に又未來の事も考へ、現在の事も考へてゐるのである。それで老人になれば凡て若い者と衝突するに定まつてはゐない。併し一般から云へば右に述べたやう次第であ

る。

凡そ精神作用は身體と密接の關係を有してゐる。身體の狀態に變化が來ると精神の働きにも自然に影響を及ぼして來る事は人生の何れの時期に於ても同樣である。老人になると皮膚には皺波が打つ、髮は白くなる、腰は曲る、頭ははげる、手はふるふ、脚はひよろづく、耳は聞えなくなり、齒は落ち、目はかすむと云ふ樣なわけで、種々なる現象が身體上に現はれるのである。此れと共に自然精神の働きも鈍くなり、又しても又しても同じ話を繰り返へす。つまり精神が鈍くなつた爲め目前の事を直ぐ忘れてしまふからである。老人がくどいと云ふのは卽ちそれが爲めである。老人は身體の衰へた結果思ふ樣に立ち働きが出來ない。それで自然氣短かになる。其れが又愚痴になるは女四十五六歲、男五十五六歲の頃であると云ふ。

斯樣なわけで老人には可成り不平煩悶があるのである。それが爲めであらう、自殺者の數は此の老年期になりて急に增加するのである。日本人の全生涯中自殺の最も多く現はれるのは廿歲乃至廿五歲の期間である。それについで五十五歲乃至六十五歲に又多く現はれるのである。此の自殺の多くなる所以は身體の衰へたと共に將來に對する希望が絕えたからでもあらうが、

周圍に對する不平不滿の生ずる結果でもあらう。或は又死に對する恐怖が薄らいだからでもあると云へやう。

明治卅四年より同四十三年に亘る十年間の統計によりて、死亡率から考へて見ると、出産より一年間の死亡率は非常に多い。五歳乃至十歳の間に於ては最少に達し更らに十五歳より廿歳廿五歳に至りてやゝ降下し、四十歳より四十五歳の間に上昇し始め、六十五歳より七十歳に至る間に頂點に達し、それより急に降下してゐる。されば老年期は死亡率の最も多き時期である。所謂薪盡きて火の消ゆるが如く、知人の間に死亡するものが多くある。老人自らも長く此世に生きる事の出來ぬことを知つてゐる。併し「死にともながる」のは人情である。さりとて日を追ふて頽齡の樹木の如く枯槁する我身體を如何ともする事は出來ぬ。それ故老人は止むを得ず死をアキラメてゐるに過ぎぬ。或る學者例へばメチニコッフの如きは、老年に達すると死の本能が現はれ「死にたい」と思ふ樣になると云ふのであるが、實際はそうでない樣である。

御覽に

つく杖にすがるともよし老人の、千歳の坂をこえよとぞ思ふ

とあるが全く其通りである。

老年期の宗教　右述べし如く、老人には我々若い者の想像だに及ばぬ樣に煩悶苦痛がある。併し其苦痛煩悶を打ち開いて、新天新地に生活しやうと云ふ樣な心は起らぬ。由來宗教で信仰の覺醒するには餘からざる努力を要するが、老人は心身衰頽して其努力心は起らぬ。又激烈なる欲求の情熱がなくては宗教的覺醒は起つて來ない。併し老人には其情熱はない。それ故老人は到底心機一轉信仰を求むるに堪へざるものである。人やゝもすれば宗教を以て老後を慰めるものとし、祭事を以て老人の役目としてゐる。成る程老人になると所謂佛いぢりをなしたり、神佛詣でをなす事を好む、それ故若い女等が老人を慰めるために賽錢袋を作つて進ぜたり、喜こぶのである。併しさへあれば神や佛詣に誘ひ出すのである。老人自身もかくせられて甚だ此の場合の信仰は、殆んど生命なき素朴的信仰で、自己の信ずる神が又自己の有する信仰が善かれ惡かれ、そんな事には少しもかまはぬ。有り合せの宗教に身を寄せるのである。而して其爲す所も其考ふる所も全く習慣的戒律的で、其中に僅かに滿足を得てゐるのである。

されば老年期に於ては肉體上の衰へと共に精神上にも根氣弱く、精力盡き、希求の心薄く、痴愚煩悶はあつても向上の一路を開く事なく、從つて宗教的覺醒を老年期に見る事の出來ないのは蓋し偶然ではないのである。

第六章　回心の心理（其一）

一、序　説

回心の意義　グランガーは其著「クリスチアンの精神」に回心を定義して「回心は、其本質に於て志向（インテンション）への變換である」と（七十七頁）いふてゐる。プラットは「回心に就て最も大切な事は、性格の統一（ユニフィケーション）と新しき自我の獲得である」といふてゐる（「宗教意識」一二三頁）。

更らにゼームスは、回心を定義して「從來分裂してゐた、そして邪に劣等に且不幸に思はれてゐた一自我が、宗教的實在を確と手に捉へた結果として、統一あり且意識的に正しく優等で又幸福であるやうになるといふ、徐々たる又は俄然たる過程をいひ表はすものである」といふてゐる（「宗教經驗の種々」三五〇頁）。抑も人間の内部には、二種の自我、即ち現實的自我と理想的自我とがあつて常に相敵對してゐる。人生は實に其二つの自我の戰場である。こゝに於て人生の矛盾が現はれるのである。セント・ポウロがいひし如く「我が欲する善は、之を爲さずして反つて願はざる惡は之れを爲せり」といひしは相分離せる二ッの自我によつて現はされた人生の矛盾を示してゐるのである。

荒野に砂があり又水溜がある如く、人間の中には二種の自我があつて互に相爭ふてゐるのである。所が其一方の自我、劣等な自我が宗教的實在を確と認めるに至れば、そこに内的統一が生じて、精神的矛盾をもはや感じなくなる。孔子が四十にして其欲する所を行ひ則を越へずと言ふたのは其狀態である。而して、以前には不幸だと思はれて居つたものが、今度は如何にも幸福である様に思はれる。回心とは即ち、「この統一の事である。自己の心中に二ッの我即ち現實我と理想我とあり主客一轉して、現實の我が從となり、より高き我と一致することである。」

英語のコンバージョンは、論理學の術語としては、換位と譯され、一ッの命題の主辭と、賓辭とを轉換する事をいふのであるが、心理學上又は宗教上に於ていふコンバージョンは從來發心、改宗、入信、轉心、回心など種々に譯されてゐる。併し其意味としては、常に精神の方向を轉換する事を指すものである。改宗と言へば、或る宗教より或る他の宗教に轉移する事を意味する様であるが、コンバージョンは必ずしも其場合のみを意味するに限らぬ。同じ宗教の信者であつても、自己が自己を充分反省して、過去になして居つた生活を一轉して、前よりも一層神に忠實を盡すに至るは、同じくコンバーションである。又これを發心と譯すなら、何となく隱道脫俗の意に解せられ、如何にも頭髮を剃つて寺に這入ることを指す様に感じられる。の

みならず佛教で發心といふのは、發菩提心又は、初發道心などの意で信仰に入る全過程を含めていふ言葉ではない。それ故發心と言へば、意味が甚だ狹くなる恐れがある。又入信といへばこれまで信仰のなかつたものが、信仰生活に入る事を意味する様である。併しコンバーションは、必ずしも宗教的現象に對してのみいふのでなく、一般に精神の方向を轉じて新らしき方面に向ふ心理現象に對しても言ふ事が出來るのである。水泳をなすもので、多くの者が其術を獲得するまでに溺れかけた經驗を有してゐる。而して溺れかけた時、そこに精神の内部の或るものが除かれるか又は或ものが加はるかして、それから次第に泳ぐ事が出來る様になる。これも精神の狀態から考へると矢張り回心である。カーライルの場合も其一例である。彼は有名な「フランス革命」の第二卷を書き終つた時、其原稿をジョン・スチユアート・ミルの許に送つた。ミルは又其友人にそれを又貸しをした。所が其家の下婢が、其原稿をストーブの焚付にしてしまつた。その事がカーライルの耳に達した時、彼は殆んど倒れんばかりに殘念がつて悶へた。其後は何事も手に附かず、毎日快々として樂しまず、空しく時を過して居つた。所が或日、窓の彼方に一人の男が煉瓦の壁を築いてゐるのを見た。見れば其男は如何にも根氣强く一ッ一ッの煉瓦を重ねて、而して其上を叮嚀に鏝を以て叩いてゐた。而して如何にも樂しげに歌を歌ひ

ながらそうしてゐた。其様を見たカーライルは、種々自問自答を始めたが遂に彼の頭は、喬を注がれた如く感じ、不愉快の雲にとざされてゐた彼の胸は再び晴やかになつた。ソコデ彼は再び筆を取りて現在の「フランス革命」を書いたのである。

即ち彼は宗教的の意味でなくして、其心を全く轉換したのである。故にコンバーションは決して宗教的の意味のものゝみではないといふ事を認めて置くべきである。

更らに又コンバーションは必ずしも積極的の意味を有するのみならず、消極的の意味をも有してゐる。それ故逆回心（カウンター・コンバーション）と稱するものがある。此れは信仰より不信仰への推移過程をいふのである（ゼームス「宗教經驗の種々」三二二頁以下）。プラットはロベルト、アルヂゴーを此の逆回心の一例に擧げてゐる。アルヂゴーは生れながら宗教的性質を有し、正統的カソリックの中に育てられて司祭となつたが、青年の時より教會の教ふる眞理について疑惑を抱く樣になり、遂に科學及び哲學に走つてしまつたのである。

コンバーションには廣義と狹義とがある。若し廣義に解するなら精神生活の轉換を一般的にいひ表はす事になるのである。故に單に宗教的の意味を有するのみではない。されば此れを飜譯する場合其廣い意味を成るべく包括し得る樣な譯語を用ゐる必要がある。それ故コンバーシ

ョンの譯語として最も適當なものは轉心又は回心であらうと思ふ。此の二語は何れでもよい樣に思はれるのであるが、予は專ら回心といふ語を從來用ゐて來た。夫れ故こゝにも此の語を用ゐる事にする。所でこゝには先きに述べたやうな廣い意味に於ける回心現象を探るのは吾人の目的とする所ではない。玆には主として宗教的回心の心理を研究するのが目的である。所で宗教的回心としても其中には廣狹の二義がある。若し狹義の回心を取るなら急激的なものに限るのであるが、予は狹義に之れを取らず、宗教的回心の中でも極めて廣義に取つて置きたいのである。

さて回心とは精神の轉換であつて、尙平易にいひ表はすなら「新らしく生まれる事」又は「生れ更はる事」—New birth or born again—である。或は又他の言葉を以ていふなら、新しき興味を創造する事であるといふてもよい。夫れ故一度回心が人の心に起るなら、その後は其人の人生觀は全く變革せられ、而して前よりも一層有力な動機が精神に加はるのである。從つてそこには新しき自我の創造があり、眞の自我の確立がある。聖書にある彼の有名な放蕩兒の話に「此のとき（放蕩兒が）我に反りて」とあるが（路加傳十五〇十七）、此の「我に反りて」といふ言葉は科學的にも亦正確なるものである。回心に於て「自分の（マヽ）」といふ代名詞は此れまでになな

かつた意味を有するに至るのである。衝動的の部分は消えて自己の行爲、自己の態度は前よりも一層意識的に自己に結び付けられる。而して「我」は新しき道に屹立して自己自身を批評し自己の世界を審議するのである（コー「宗教心理」一七一頁參考）。人は回心によりて始めて神性の發揮をなすのである。神性の發揮、一方よりいへば要するに之れ眞我の實現である。舊き自我が葬られ新しき自我の復活である。是に成就せられたる自我の實現、自我の復活はコーがいへる如く大概永久的（パーマネント）の所得で一時的（テンポラリー）泡（エバネッション）起ではない。スターバック曰く「回心の結果それと共に人生に對する異つた態度が生ずる、而してたとひ感情が動搖しても、それは明かに永久不變のものである」（「宗教心理」三六〇頁）といふてゐる。人は回心に於て實在の神を認め、之れを信仰して初めて自己に徹し、自己に醒め豁然として自覺の境に入るのである。神を認め神を信仰せざるものは到底眞の自己を知る事は出來ぬ。之れに反し眞の自己を知つて居る者は必ず神を抱擁し神と一致合體してゐるのである。神を信仰する事は一方よりいへば確かに我を失ふ事であるが、又他方よりいへば我を得る事である。「吾れ生けるにあらずキリスト吾れにありて生けるなり」といひ「我れキリストにあり、キリスト又我れに在す」といひ、「彼は我がもの、我は彼のもの」といひ、或は又「眼を開けば我天地の中にあり、眼を閉づれば天地我が中にあり」

といふなどは。何れも實に大自覺者の美はしき歌であつて、而して宗教の極意を示す言葉である。

回心のない者　所でゼームスによれば回心の全くない者があつて、而して宗教の極意を示す言葉である。

「回心なき者は立派な人物であり、實際上神の僕であるかも知れない。併し神の王國の子ではない。彼等は不可視なるものを想像する事が出來ないか、若しくは篤信者のいひ表はし方を用ゐるならば、彼等は生涯實を結ばざる、且つ乾ける人たちであるのだ」と。而してゼームスは理智的のものに往々回心なき者があり、又宗教的方面に無感覺な血の氣のない精神的不毛な性格を有するものにもこれがあるといふてゐる。彼は更らにかゝる宗教的方面に無感覺な者でも其生活の晩年に當りて宗教的感情が、かゝる人の硬い心に突入して他の場合にもまして急激的回心を奇跡的に起して來る事があるといふてゐる（「宗教的經驗の種々」三七八―九頁）。

併し回心のない者でゼームスがいふが如き意味の者のみでなく、スターバックがいへるが如き「劃然たる變化なき成長」をなす者も或る意味に於て、矢張り回心なきものと見る事が出來る（「宗教心理學」第二十四章）。其れは固より一方よりいへば後に述べんとしてゐる漸次的回心の部類に屬するものであるが、他方よりいへば矢張り回心なきものと見てもよいのである。併

しゼームスのいへる如き「回心なき者」とは全く其性質を異にせるはいふまでもないことである。かれには成長がないが、これには成長がある。スターバックは次ぎの如き例を擧げてゐる。

「私の兩親は何れも神を畏れる人でありました。そして私は宗教的な性格を養ふ上に適當な境遇の中に置かれて居りました。幼少な頃から私は救主を信ずる樣に、又救主が私を愛して下さつてゐることを信ずる樣に敎へられて居りました。キリスト敎思想及びキリスト敎徒との交際を喜ぶ私の心持は年と共に只其度を增して往くのみでありました」(二百九十九頁)。

二、回心の典型

回心の典型はそれを內面より見た場合と外面より見た場合と二樣に考へる事が出來る。最初に先づ其外面より卽ち其形式上より見るならば、二種に區別する事が出來る。一つは急激的回心、他は漸次的回心である。さきに擧げたゼームスの回心の定義の中にもこの二種の典型のある事が表はされてゐる。スターバックは特に急激的の經驗を回心を認めて「回心は急激に高級の自我の爲に低級の自我を捨てる事である」といふてゐる。(「宗敎心理」百五十七頁)。エームスも徐々たる宗敎心の生長又は覺醒を常態的發達とし、突如たる覺醒を特に回心とした。

漸次的回心　漸次的回心といふのは、いふまでもなく徐々に起る回心で、其過程は自分にも殆んど意識されないし、又他からも之れを觀察する事が困難である。例へば少時より敎育によりて宗敎的習慣を構成せられし者の中で、何等の疑雲にも襲はれず、何等の精神的激變にも遭はずして、そのまゝ宗敎的發達を遂げて行く者がある。所で精神が發達するには直線を或る角度を置いて引いた樣に其過程に於て全く變化のないわけには行かぬ。夫れ故徐々の回心をなす者に於ても、時々特に强く神に賴り縋る心、宥恕を求むる心など現はれ、日頃はさまで感じなかつた文字や言葉が如何にも恩惠と敎訓とを、もたらすが如く感ぜられ、いはず語らず內心に或る渴望が滿されるかの如く感ぜられる場合がある。夫れ故かゝる時々の心的狀態は、一種の回心ではあるが、其强度が餘りに微弱である爲め、而して其狀態が餘りに平凡である爲め、それが一回位では未だ生活全體を根本的に一變してしまふ事は出來ぬ、併し度重なりて斯る變化が意識に出沒してゐる間に或時期に達して所謂徐々の回心が愈々成立する事になるのである。此れは恐らく回心の最も簡單な典型であらう。果物が充分熟してゐる時には、一觸れがよく其果物を地に落させると同樣に、幼時より宗敎々育が施されて、而して其敎育が宜敷を得てゐた場合、別に大なる奮鬪を見ずして而かも立派に回心が成立する事が尠くないのである。エーム

スが嘗て宗教經驗に關する質問書を發した時それに答へた者で或る婦人が、

「私は何時でも決心をする爲めに大した苦悶をした事はありません。併し只一度ありました。それは私が甚だ愚かな事を敢てなさんとした時で、その外にはありません。私の生涯に於ける眞に大きな決心は、極めて容易いものでありました」。

と。

漸次的回心の中には今述べし如きものでなく、稍々短期間に於て成立するもので、而かも漸次的のものがある。ゼームスはトルストイとバンヤンを漸次的回心の例證として擧げ、「トルストイは少しづゝ動かない確信に到着したのだ」といひ。又「バンヤンの回心はトルストイのよりも徐々であつたらしい。數年間彼は全く聖書の中の文句で捕へられたり、高められたり、沈められたりしてあつた。然し遂にキリストの血によつて救が益々ハッキリとして來たのだ」といふてゐる。トルストイにせよ、バンヤンにせよ、其回心期間に於ては可成り人生の奮鬪があつた。併し次に述べんとしてゐる急激的のものとは全く其趣を異にしてゐるのである。予が友人にNといふのと、Mといふのとがある、Nは京都の高等學校に入學した頃宗教に深く興味を抱き熱心なる基督敎研究者となつた。「年ばかり過ぎて牧師から信者になる事を勸められた。

併し彼は肯がはなかつた。研究は前と同樣に繼續してゐた。それから二年の後漸やく、決心して遂に信者になり、今日に至るまで——十五年間——堅固なる信仰生活をなしてゐる。Mは或る專門學校に居る頃、宗教的興味を抱き、其後佛敎と基督敎とを比較研究する事約二年、彼は最後に牧師の家に止宿せん事を申込んだ。牧師は快よく之れを承諾したので、數ケ月間牧師の家に居つたが、彼は遂に洗禮を受けて、基督信者となつた。而して彼は今堅實なる信仰の持主となつてゐる。此NとMとの場合も矢張り「少しづゝ動かない確信に到達した」ので漸次的回心の例である。スターバックによると男は女よりも漸次的である。彼は回心前の經驗の繼續期間を女二十四週、男六十九週としてゐる（「宗敎心理」六十三頁）

急激的回心　次ぎに急激的回心といふのは、回心が瞬間的に起るのをいふのである。パウロの回心は、其最も適例である。其他ペンテコステの日に於ける回心、ピリピの獄吏の回心（徒十六〇二十六）の如きは何れも皆急激的回心である。余は尙ゼームスの書から、此の種の回心に屬する一つの例を茲に示すであらう。

「私は野外集會に連れられていつた、母や宗敎上の友達が私の回心のために求め祈つた。私の感情的本性は、その奥底までかき亂された。墮落の告白や罪からの救濟につきて神に懇願す

ることが、私に一切の環境を忘却させた、私は慈悲を願つた、そして私の本性の更新と、寛容とを求ざ〳〵と心に浮べた、起き上つた時「舊物は去つて一切の事物が新らしくなつた」と叫んだ。それは他の世界新らしき生存の狀態に入るに似てゐた。自然の對象が、光輝を放ち、私の精神的視力は甚だ明らかになつて、宇宙の一切の物體に美を認め得るに至つた。森は天國の音樂を唱和した。私の心は神の愛に愉悅した。私はこの喜びをどの人にも頒ちたいと思つた」。

ゼームスの書は此の種の回心によりて滿ちてゐる。余は玆にくど〳〵しく例證をなす事を努めて避けたいと思ふ。

要するに、以上述ぶる如く回心のタイプを其外面より區別するなら、急激的と漸次的の二種に分つ事が出來るのである。然らば如何なる點に於て其の二種の區別が生ずるといふ事であるが、思ふにこれは人々の心身の狀態、外境の如何によりて生ずるものであらう。特に氣質の差異は回心のタイプを生ずる主たる原因であらう。コーの調べた所によると、急激なる變化は多く多血質神經質のものにある。急激なる變化を經驗せざるものは膽汁質粘腹質のものに多くある機である。即ち急激的回心は感情的の氣質のものに多くして、漸次的回心は理性的の氣質の

ものに多くある。夫れ故之れを男女に就いて考へて見るなら、急激的回心は女子に多く漸次的回心は男子に多い。又之れを年齡の上より考へて見れば、青年期に急激的回心が多く、成年期に漸次的回心が多くある。要するに回心のこの二種のタイプは氣質の差異による事が甚だ大である。(尙後に述ぶる氣質と回心の項を參考せよ。)

抑々回心には三つの要素がありて、それが成立するものである。宗教的素質、機會、指導即ちそれである。人にして若し宗教的素質がなかつたなら、如何に好機會があつても、良指導があつても畢竟無益に終るであらう。併し人は何人と雖も苟も人たる以上、固より其素質に强弱厚薄の差はありと雖も、之れを全く缺如したものはないのである。此の素質が或る機會に遇ひて發芽し、それに適當なる指導が加はりて愈々入信といふ結果に到達するのである。然らば入信の經路は大略三段に見る事が出來る。即ち之れを佛敎的にいへば發心、修行、菩提である。所で或る者は此の三段の經路を正しく經驗し、或る者は殆んど同時に經驗するのである。こゝに於て回心に急激的のものと漸次的のものとが現はれるのである。入信の徑路を正しく踏むものは漸次的回心を現はし、入信の徑路の三段を殆んど同時に經驗するものは急激的の回心を現はす事になるのである。

此の二種の回心のタイプは固より其人の氣質による事が大であるが、又其人の職業地位宗教の種類、及び男女の相異によりて尠からず影響を受くる如く思はれる。予は特に玆に飯沼氏が作った二種の表を掲げて讀書の參考に供するであらう。

職業地位	頓機的入信	漸機的入信
藝術家	4	
職工	8	
商業	27	1
農業	14	1
教職の子弟	7	2
會社員	4	3
官吏	5	1
教師	9	4
新聞雜誌閉記者	5	3
感化事業人	2	2
軍人	3	2
工業家	5	3
學生	21	18
政治家	6	6
醫師	4	4
教職	8	30
著述家	1	6
計	133	86

（現代日本人の信仰[52頁]）

宗派	頓機的	漸機的
自力門	50.6	49.9
他力門	76.7	23.3
基督教	74.2	25.7
計	67.1	32.6

（同 五十九頁）

以上に於て予は形相上より回心タイプを二種に分ちて考へたが、次きに回心のタイプを內面的に考へて見やう。回心を內面的に觀察するなら知的、意的、情的の三つに分ける事が出來る。人の心は便宜上知情意の三ッに別ちて考へる事が出來る。回心のタイプも亦これによりて三樣に見る事が出來るのである。勿論知的、意的、情的の三ッの典型の各が、全然獨立したものであるといふのでなく、その中或る一つが著しく特性付けるならば、他は皆その背景となつてゐるといふに過ぎないのである。

知的回心　知的回心に於ては「知る」といふ所に重きを置いてゐる。それ故知力的要素が首位を占めてゐる。夫れ故宗教上の事を深く考へ、常に論理的で容易の事には變化は來ない。かゝる者に論理的でない極めて感情的な教說が與へられても、恰かも火に水を投じたと同樣になつてしまふのである。此の種の回心者が、回心する迄には仲々の歲月を要するのが普通である。併し一度回心狀態に入るなら根底が深いので再び變化する事が殆んどないといふてよい。よしあるにしても容易の事には變化しないのである。この種のタイプは若し形式よりて見れば大抵漸次的である。

情的回心　これは心の感情の力が回心の主なる要素となつてゐるのである。知る事意思する事は第二位にあり、時には全く知的要素意的要素は消へ失せたものゝ如き觀がある。而して此感情的回心は時間から云へば、極めて短期間に急激的に成立するのであるが、一向當てにならぬのはこの種の回心で、極めて變り易いのである。極めて容易に燃える藁の如く直ちに燃え切れて跡には灰を殘すのみである。一夜の間に生え出づる木の子は根なきが故に、朝の光に燒け

倒されてしまふ。多くのレバイバル的な、刺戟の強い説教會などでは幾多の回心者が出來るであらう。併し燃え切れた燃えくさりのコーバートが跡に播き散される事は人のよく知る所である。

意的回心　この種のものは意志、又は行動に主きを置くので、知る事、感ずる事は第二位に置かれてある。而して何でも行動に訴へてゞなければ滿足を得ない。而してこれには善惡正邪の觀念が甚だ强いのである。それでこれを道德的といふてもよいのである。

「私は善人にならん事を熱心に願ひ、淋しい、靜かな所へ行つて神に祈りました。」

私は十歲の時、家でも學校でも殊に善ひ子供になりました、私は何んでそんなに考へたのか解らぬが、其時私をより多く愛して下さつたと思ひました、其時から長い間善いといふ事に對し私に影響を及ぼしました」

勿論吾人は以上三種の回心典型の何れかを取りてそれを理想的回心とする事は出來ぬ。決めには知的、意的、情的の三要素が平衡を保つてゐなければ理想的といふ事は出來ぬ。何れか一方に偏したものがあれば、そはかたわで効果も少ないわけである。

三、回心の種類

回心の種類は一方より考ふるなら之れを自發的、他發的の二種にする事が出來る、又他方より云へば正常的、異常的、と分つ事も出來るのである。

自發的回心　自發的回心は、宗教の漸次的發達の過程、又は結果として起るものである。それ故何でも信じ易き、且つ無考な兒童期から、青年期に至るに從ひ、或は青年期に於て宗教心理の活きた經驗にめざめる事によりて現れるのが普通である。併し同樣の經驗は青年期以後にても決して起り得ない事ではない。抑々自發的回心は外部からの示唆によつたのではなく、内部に於てこれまで徐々に養はれてゐたものが、何等かの刺戟を受けて、殼を破りて外に現はれたものである。恰かも牝鷄の翼の中にあたゝめられてゐた卵が、時至つて殼を破つて孵化すると同樣である。宗教心は元來深く人心の奥底に潛める自然の要求であるから、或る時期が到來すれば必ず外部に現はれるのである。夫れ故この種の回心には極めて温和な典型のものがある。例へば

「或る安息日の朝牧場、を散歩してゐる時私は、いつもになく神の善と愛の現實なる事を經

驗した。それは私の全生涯に於ける最も祝福された瞬間であつたのだ」

「私は父母の單純にして强固なる、而して純潔な信仰の中に生長した。十五歳の時私は神に就いて殊に考へ始めた、而して神を我が生活の個人的要素として考へ、慰めを其神に求める樣になつた」(以上二例スターバック「宗教心理學」一九九、二〇〇頁より)。

の如きは回心狀態が如何に溫和であるかを示してゐる。この種の回心は宗教心の自然的發達の結果であつて、これが現れるには或る定つた時期が統計的研究によつて見出されるのである。スターバックによるに、彼は「正確な年齡は常に與へられてないが、全部の中で女八十八男五十が年齡を明記してゐる」。といひ、一つの表を作つてゐる。(百四十二頁を見よ)それによると、男女いづれに於ても十歳から二十一歳の間に、大抵起つてゐる、其前後には只僅かしかない、それ故自發的回心は明らかに、青年期に於ける現象である事が解るのである(「宗教心理學」二〇二、二〇三頁)。

固より自發的回心の中には溫和なるものゝみにあらずして急激なるものが含まれてゐる。梅のやうに靜かに開花するものもあるが櫻の樣に「三日見ぬ間の櫻かな」で忽然として開くのもある。

他發的回心　自發的回心が宗教心の自然の發達の結果であつたに反し、他發的回心即ち模倣的の回心が更らに眞正の回心を生み出す事は決して稀ではない。併し模倣的回心そのものは眞正の回心と云ふ事は出來ぬ。宗教は元來傳染的のものである。故に一人が回心するなら、それが他に傳染して他の回心者を作るのである。古來基督教會內に「畫一的なる救濟策(ユニホームプランオブサルベーション)」と云ふのがあるが、それは主として福音主義の新教々派の中に一般に行はれてゐる。グランガーは曰く、「彼らがそれを救濟と呼びしものは單にボウロの經驗を器械的範式(メカニカルユニホーミュフ)にまで再生したものであつた事を彼らは知らなかつたのだ」と。思へば二十世紀の昔ダマスコ途上に於てボウロが急激なる、そして自發的に回心經驗をなして以來今日迄彼に模倣して幾萬の人が器械的に回心した事であろう。

吾人は模倣的のものを凡て排斥せんとするのではない。併し回心が單に模倣的で、內部に於ける個人的宗教生命が呼び出される事がなかつたなら、斯る回心は全く無意味であると思ふ。

以上述ぶる如く回心の種類には一方より見れば自發的、他發的の二種を認める事が出來るのである。此の二種は男女性の異るに從つて幾分か數字上の相異を現はす樣である。スターバックによれば自發的回心は男六十三、女五十五であるが、他發的回心は男三十七、女四十五とな

つてゐる。されば男に於ては自發的が多く、女に於ては他發的が多い。併し一般から見れば他發的のものよりも自發的のものが多い樣である。

他發的回心にも自發的回心にも漸次的に起るものと急激的に起るものとがある。自發的で急激的のものは、主として其個人の氣質によるもの、樣である。殊に感情型の人にこれが多くある。他發的で急激的なものはレバイバル運動の結果起るのが普通の例である。自發的で漸次的なものは、固より遲速の相違はあるが、宗教の堅實なる發達を意味するものである、他發的で漸次的なものは、單に習慣的戒律的信者を意味するものである。故にゼームスに云はせるとこの種のものは、皆間接的受賣的の信者で、取りて以て研究材料とするにも價せぬものであると云ふであろう。

正常的回心と異常的回心　さきに予は回心の性質上より自發的、他發的の二種に分ちた。今度は回心の狀態より正常的と異常的に分ちて見る。固より如何なる回心が正常で、如何なる回心が異常であるかを定めるは甚だ困難な問題である。英語のノルマルはラテン語のノルマ（大工の曲尺）から來て規則的な事を意味する。アブノーマルはノーマルの反對を意味する。即ちノーマルを正常とすればアブノーマルは異常である。文字の上で此の二語を區別する事は容易

であるが、さて心理上の區別となれば中々容易ではないのである。夫れ故スターバックは止むを得ず回答者の陳述を標準として正常と異常とを分けてゐる。而して回答者自身の精神生活の發達に有害であるなら、それを異常的回心と見、若し何らかの效果をもたらすものであつたなら、それを正常的回心と假りに定めてゐる、（「宗教心理」一六四、五頁）。予も亦其邊の意義を明かに吟味せんとはしない。今は只スターバックに從つて置きたいと思ふ。スターバックは正常的な回心を說明せんが爲めに先づ宗教的ならざる所謂自然的經驗中に回心の各時期に現はるゝ現象と類似の現象があるか否かを調査した。其結果次ぎの如き四つの點が現はれてゐる。

一、沈鬱（デプレッション）と喜悅（ジョウイ）

二つ若しくは二つ以上の異つた行爲又は執着物があつて其何れを取らんかと迷ふ時は、苦痛不幸及び沈鬱などの感情が何となく不安の念を伴ふて來るが、一度決心が付いて何れかを選擇してしまへば、心は輕快を覺へ喜悅を感ずるのである。此れは恰も回心前後の心持と同樣である。

二、突然の覺醒（サッドゥン アウエークニング）

能力とか洞察などの如きものは、回心と同樣に突然に湧起して來る事がある。例へば自轉車

の稽古をしてゐた者が、どうもうまくゆかぬ、もうだめだと思つてゐた所が急に自由に乘れる樣になる事がある。學校でいつも成績不良であつたものが、學校を變つて急に良好になつた例も多くある。

三、情緒的態度（エモーショナルアツチチユウド）に於ける突然の變化（サツドウン チエンヂ）

以上の二つよりも尙神秘的であるのは、情に於ける突然の變化である。何等特別なる原因もなしに俄かに情が變化する場合がある。其簡單なるものは食物に對する嗜好より全體の性質に關する拒否及び執著に至るまで種々樣々である。例へばトマトの嫌いなものが急に好きになつたとか、嫌厭してゐた先生が何の理もなく急に好きになつたとかはそれである。

四、習慣打破（ブレーキングハビツツ）

スターバックは此れは動物にも認められると云ひ、或る亂暴な馬が、持主が變つて柔順になつたと云ふ例を擧げてゐる。腕白小僧が急にをとなしくなり、酒好きの男煙草好きの男が急に禁酒禁煙家となる事がある。斯の如く舊習を打破して、新らしき生活に入るは恰かも回心によりて低い生活を脫離して新生活に入ると同樣である。

吾人は以上の說明によりて「回心の事實は自然的過程の表現である」と云ふ事を明かにする

事が出來る。精神生活の何所にもかゝる現象がありとすれば、回心過程に於ける以上述べし如きものは、即ち自然の法則として承認し得られるであらう。只一般の經驗に於けるものとして、以上に擧げたものは部分的の經驗に止まるのであるが、回心に於ては全體的の經驗になるの相異があるのみである。例へば一個の習慣が打破せられたと云ふ事は、何も精神生活全體に涉つた事柄でなく、局部的變化を來したのである。所が回心となれば精神生活を、根本的に變化させるので、これによりて人間の性格全體が、全く新らしくなるのである。一部分の改修でなく全心全靈の改革である。

次に異常的回心に就て述べやう。

異常的回心と云ふのは一言にして云へば病的なものである。其最も際立つて危險なのはレバイバルに於ける感情的にして、昂奮的なものゝ中に見出される。レバイバルの結果は、單に感情狀態を惹き起すのみにて、昂奮が過ぎ去るなら、後に何等靈的結果を殘さない。而して不合理的な行動を誘導して、反動的に最初の告白を拒否するのみでなく、宗敎全體をも排斥するに至る（スターバック「宗敎心理」一六五頁）。此れを說明せんが爲め一の例を擧げるであらう。

「私は宗敎に對しては無關心の態度で、自動的に敎會と日曜學校に行きました。十五歲の時私

を回心に導いた力は今考へると、催眠的の性質であつたやうです。私の意志は全く他の者等の（分けてもリバイバル者Mの）思ふまゝにせられたやうでした。知力的要素は全然なく、私は教理や、教義は少しも考へず、純然たる感情の働きでありました。それからエクスタシーの狀態が續いて起りました。私は善事をなす事に心を傾け、他人に訴へるには雄辯になりました、併しかゝる道德的發揚は續きませんでした。昂奮が全く弛んで、正統的宗教から全然離れるやうになりました。今その時の經驗を考へると恥しさと嫌忌の情が感ぜられます。其時の狀態は不自然な狀態で永く維持さるべきものではありませんでした」

がゝる結果に至るには群集心が大切な動因となつてゐる。宗教運動に於ける一般精神の勢力は政治的運動、爭鬪、暴徒、同盟罷工等の如きものと同樣である。夫れ故宗教運動の指導者の用ふる方法は暴徒の煽動者や、催眠術の施術者の用ふる方法と同樣である。ガスターブ・ル・ボン曰く「群集の心に觀念や信仰を吹き込まうとする時、指導者は種々なる方法を用ゐる。その主なるものは、肯定（アフファーメーション）と反覆（レペチション）と傳染（コンタギオン）の三つである。何等の理論を含まず、何等の證明を伴はざる單純なる肯定は、群集の心に、觀念を打ち込む最も確かな方法の一つである。併し肯定は反覆されないと效力がない。幾度も反覆されてゐる內に、深く意識下に刻み込まれる。

我々の動作の動機は、此の意識下に於て作られるのである。肯定が充分反覆され、而してそれを反覆してゐる中に、一致がある時意見の流れと稱するものが形造られる、而して力强い傳染が始まるのである」と（「群集」（一八九六）一二六頁、スターバック「宗教心理」百六十七頁より）。斯くして群集は、同じ觀念、同じ信仰に動かされて行くのである。精神物理的立脚地から見るなら、かゝる場合腦中樞は弛緩狀態となり、從つて高等中樞が下等中樞に及ぼす制止作用が鈍くなり、下等中樞は其束縛を脫したやうな狀態になつて其働きが活潑になる。從つて精神の暗示性が强くなる。夫れ故意志は麻痺せられることになるのである。高等中樞の制止作用の起るのは低級な發達にある者に多い。併し稀には普通以上に教養を受けた人々にもかゝる現象が起る事がある。それは其人の理知的拘束が消失し、其結果壓迫されてゐた催眠中樞が無限の滿足を以て爆發する。そこでいはゞ異常的な回心が成り立つ事となるのである。

レバイバリスト　レバイバリスト（予は此れを回心術者と譯す事とする）が人を回心せしむる方法に就いて予は尙玆に一言を費すであらう。熟練せる福音宣傳者はレバイバルを起さんとする集會の準備の爲めには多くの時日を費やすのである。早くから廣告の印刷物などを會を開かんとする土地に送り、其他の働き人には早くから大體の方針を通達して置く。或は特別な準備者

を遣す事もある。斯くして先づ人々の注意を彼等のなさんとする事業に集注せしめる事に努力する。此の時最も大切な事は、他の所でしか〳〵の事をなしたなど、彼等の事業の成功した事を頻りに吹聴する事である。そうするとそれが、第一に人々の注意と好奇心を促がし興味を喚起する故一層回心術者の現はれる事を待ちまうけるといふ事になる。それは田舎芝居、河原乞食ののぼりを澤山立てたり、ふれ廻つたりするのと心理は同様である。つまりいはゞ人氣を取らんとして然うするわけである。

宗教關係者等は、日々の仕事を中止して種々考案したり、祈つたりなどして只管人々の「魂の救はれん」事の爲に働く。さて愈々集會が開かれるとなると、用意周到全會衆の心を集めて同一の感情に滿さしめん爲に苦心する。斯くして同じ思想と一致した行動によりて群衆意識のアトモスフエヤーが一旦作られるなら、もう占めたもので各個人の心意は其群衆心に全く影響せられてしまふ。

集會は先づ歌とか祈禱などで始められる。歌は人の心を浮き出させる樣な調子のもので、禮拜用のものとは全く異つてゐる。歌と祈禱とを以て先づ人々の心を極めて感情的に耕やし、說教を人々の心に印象する準備とする。說教は會衆の心を充分惹き附ける樣に組立てられ、其中

にある例などは極めて卑近なもので、他の說教者等の到底用ゐ得ない樣なものでも平氣で使つてゐる。言葉使ひにもゼスチエアーにも一種奇妙な風がある。說教の性質からいふと寧ろ勸告的である。而して知的注意と云ふよりも、寧ろ感覺的注意を促がす樣な調子でせられる。說教中の教義は極めて平凡な教義で、云はゞ通俗的の教義である。夫れ故レバイバル說教は神學上から云へば大抵保守的で徹の生へた神學である。

群衆心といふものは實に驚くべき勢力を有してゐるものであるが、其群衆心が說教中に養はれる要素としては會衆の中にうなづいたり、同意的に「あゝ成る程」といはんばかりに微笑を漏らしたり、會場内に物音がして說教者の聲を妨げる場合シッ、シッ、といふ聲、それから又彼方此方で調子ぬけた樣な大きな聲でハレルヤと叫んだり、如何にも有難そうに、おなかの深い所から息氣と一緒にはき出したアーメンといふ聲などは、皆悉く群衆心を養ひ又堅めるに大切な要素となるものである。かくして群衆心が一旦出來上ると個人は其社會的壓迫の下にあつて、それに反抗する能力を殆んど全く失ふ。而して人々は各々自己を降服せしめ全體の感情に支配せられ、全體の行動に支配せられてしまふ事になるのである。

會衆の中で最も感受性に强く、示威行動に唱應し易いのはチヤンと席に付いて居る者よりも

脇側に立ちむらがつてゐるものである。ロッスの「社會心理學」を見ると、佛國舊式の芝居でビットに立つて見てゐるものよりか一層感情的で且つ激烈である。併しビットに席を備へてやつた所が其態度が極めて靜肅になつたといふてゐる（四十四頁）。

レバイバルと暗示　予は玆に暗示とレバイバルに就て少しく述べて置きたいと思ふ。先きに述べた如くレバイバル者は催眠術の施術者と同樣の方法を用ゐるのである。彼は罪の事實に就て又救濟の必要なる事に就て繰り返し繰り返し說きつける。而して頑固な意志を服せしめんとする。多少自己の意志に動かされた樣子が見れると說敎者は其人と共に跪き、時には其人の上に手を按きて、感情に滿ちた一本調子の低い聲で「キリストが今あなたの心の戸を叩いて居られます」、「あなたはキリストの救の力を信じさへすればよいのです」、「キリストはあなたの罪を赦してあげようとして待つておいでなさいます」、「キリストは私を救はんが爲に十字架の死をお遂げになりました、此の私の如きものゝ爲めでさへキリストは十字架の死をお遂げになりました」、「さあ、あなたの心には信仰が湧いて參りましたか」などいふ樣な句を幾度も繰り返していふのである。其間一般の會衆は歌をうたひなどして一層刺戟を强めるのである。說敎者は

信仰の絶對的に必要な事を繰り返して說く。若し一人の說敎者の暗示が失敗すれば他の說敎者がそれに代つて更らに新らしく暗示を與へる。かくして指導者の心に信仰が成立しキリストの救の力を信じ生れかはつた新らしいものとなつたと自ら感ずるまでそうする。

暗示は固より惡い事ではない。暗示を與へるといふ事は如何なる敎育に於ても最も有效な方法である。賢い敎師は正しい感情狀態に人を導き、而して理想的行爲の方向に其人の意志を指し向けるのである。暗示療法なるものがあるが、此れも醫者の指導のもとにせられる時には、子供の惡癖を根本的に矯正するに正しい方法である。暗示は又病氣を輕減する爲めにも用ゐる。醫者が病氣を治療する上にも用ゐる。人間に被暗示性の有るのは決して禍ではなくして幸である。此の被暗示性を利用する事は惡い事ではない。唯此れを濫用する場合それは惡となるのである。回心術者は凡ての人を同一方法で信仰に引き入れようとする。既に惡習に染つた者で、所謂病膏肓に達したものを彼等の方法によりて過去の罪惡を悔改めさせ、新らしき生活に導くはよい、其時彼等の方法は最も適當なるものであらう。併し氣質の如何によりて徐々に回心するものもあり、急激に回心するものもあるのであるから、それを無視して同一の方法で一時に器械的に回心せしめんとするは極めて誤つた仕方である。

レバイバルによる回心者と、普通教會事業による回心者　吾人は我が國に於てもしばゝ〳〵レバイバル的の說教會など開かれ、一夜に數十人乃至數百人の求道者又は決心者を得、而かも其求道者なり決心者なりは、殆んど全く洗禮を受け、信者になるまで志を續けないと云ふ事はしばゝ〳〵耳にする所であるが、未だ統計的に調査した結果を有してゐないから、確なる事はいへないが、スターバックの調査した結果によれば、レバイバル的會合に於ける回心者と普通の教會事業（例へば家庭又は日曜學校等）に於ける回心者との間には初志の持續に著しき相異あることを見出すのである。次ぎに掲ぐる表は即ちそれである。

	始めに得た回心者の數	六週間の中に落ちた者	全く會員になつた者	全く會員になつた者	現在從全なる信仰を有する者
レバイバル的會合に於ける者	92	62	39	15	12
				其後の失信者	
	68	16	52	10	41
					69%
普通教會事業に於ける同心者					13%

（「宗教心理」一七〇頁）

四、回心の階梯

回心の階梯は之れを三段に分ちて考へる事が出來る。

一、混亂と不安の時期

二、回心の頂點

三、安心と喜悅の時期

イ、混亂と不安の時期

自我の分裂　此の時期に於て人は決して自ら滿足する事がない。精神の混亂を來して何となく不安の感を抱いてゐる。然らば何故に斯る狀態になるかといふに、それには種々原因を數へる事が出來るであらうが、概していへば「我」と外界とが對立の狀態になるからである。此れを短かく我境對立といふてもよい。又ゼームス流に「自我の分裂」といふてもよい。此れまでは自我は極めて漠然たる狀態にあつたのであるが回心前になると自我は分離して理想我と經驗我又は現實の我と相對立の狀態にある。發達の方面からいへば此れまでは外界も內界も未だ區別が立たず、即ち我境不分立の狀態であつたものが、自己意識の發達と共に、次第に內外兩界は對立狀態になる。

罪の感　右述べし如く、自我が分裂すると一方に反省作用が盛んになり、他方に於て理想追

求の念鬱勃として起つて來る。人は自己を反省して、其現實の自我の內に種々なる缺陷を見出す。そこに精神上の矛盾衝突が起り、苦痛煩悶を感ずるに至るのである、此の苦惱から自己の小なる事、不完全なる事、人間の特むに足らぬ事、人間の脆い事、弱い事、儚ない事、などに氣が附き、而して想像的に圓滿なる理想的觀念を心に畫いて、それに憧憬するのである。夫れ故理想は現實の自我の內に缺陷を感ずる事より生ずるのであるといふてもよい。罪の感は卽ち此の現實の自我に對する缺陷の感に外ならぬ。此の意味よりすれば、人は罪の感によりて進歩するのである。罪の苦みなきものには進歩なく全く動物的である。或る者は此方面より見て、人類には一般的に罪の感がある事をいひ、キリスト敎の所謂原罪說なるものを人類の本能的缺乏感に對する象徵であるといふてゐる。そは兎も角確かに人類には一般的に罪の感がある。子供が虛僞を語り、殘忍なる行爲をなすのは、心の深奧なる處から、僅かに表面に現れた惡の徵候である。人は其本性に於て惡に對する傾向を有してゐる事は既に、いなむべからざる事實である。夫れ故自己を反省し、理想の光明に觸れる事を得たなら、何人でも自己に對する缺陷の感、罪の感なきを得ないのである。所で統計によりて現れた結果を見るなら回心前に於て、全く罪の感のないものがないでもない。スターバックのいふ所に依れば、回心前に路を踏み迷つ

た經驗あるものでは、殆んど皆罪の感を有してゐる。それを有しない者は男は僅か十分の一で女に於てはそれよりももつと少數である。回心前に淸い生活を送つたものでも罪の感を有するものは半數で、女に於ては三分の二は皆罪の感を有してゐる。若し然りとせば人が罪の感を抱くのは自己の過去の生涯を反省した結果のみでなく、他の原因からである樣に思われる。他の原因といふものゝ一つは多分生理的であらう。靑年期に於ては生理上の狀態が不完全である。故に病的徵候が靑年期に最も多く現れる。特に女に於てはヒステリー其他の神經病及び血管系統の疾患が靑年期に於て男よりも多い。又極端なる氣落ちや、自己不信任や、自己譴責等の如きは男子に於ては幾分の生理的原因に基いてゐるのである。今一つ罪の感の現はるゝ原因は氣質にある樣に思はれる。

斯の如く罪の感は氣質及び身體的狀態などが原因となつて惹き起されるのである故、スターバックは此れを單に靈的事實であると考へる事は出來ぬといふてゐる。（「宗敎心理學」七十一頁）。

憂鬱期　吾人は精神物理的有機體として時に憂鬱期に入り又時には發揚期（エキザルダテーブ・ピリヨッド）に入るのである。精神の發達するには、反對法といふのがあつて相反する方向に行きつゝ次第に精神は發

達を遂げて行くのである。此れは曾に個人の精神の發達に於て認むべきでなく社會全體の進化に於ても同樣である。治亂盛衰が轉換し文弱武强が交代するのも皆同じ事實の證明である。さて回心は憂鬱期より發揚期に移る過程であるといふてもよい。回心前に於ては大多數の人は大抵憂鬱期（デプレッシーブ・ヒリヨド）に這入る樣である。而して自分は罪人である。不完全なものである、無爲のものである、無價値なものであるなどいふ樣に考へて思ひに沈むのである。斯る心持は第一個人々々の氣質により、第二に理想の生活及び罪惡の生活を意識する程度の强弱によりて種々異つてゐる。これに就いてスターバックは次の如き表を作つてゐる（「宗教心理學」五十九頁）。

	意識の中に理想生活が著しく表はされてゐる者	中間のもの
受動的氣質	神から遠ざかり居ること	助けなき力の感
中間の氣質	懷疑	不安憂慮
能動的氣質	ヨリ善き生活に對する願望	熱心、眞面目、斷腸
	意識の中に罪惡生活が著しく表はされてゐるもの	沈鬱、悲愁、沈思
	罪を拒む傾向	罪の感

此れを見ると大體に於て回心前の憂鬱期に於ける心持は個人の氣質と、而して理想生活及び

罪惡生活の意識されてゐる程度に依りて種々異なる事が知られると思ふ。尙スターバックは回心前の種々なる經驗を分類して次ぎの如き表を作つてゐる（「宗教心理學」六十三頁）。

調變的體身及的神精	女	男	平均
罪の感	33	33	33
神から離れたと云ふ感	24	24	24
更らに高き生活に對する願望	18	18	18
沈鬱悲愁	75	60	70
不安憂慮	45	33	41
助けなきの感無力の感	12	9	11
熱心眞面目	12	1	8
祈りと神を喚び求める	39	57	45
罪を拒む傾向	36	50	41
懷疑	6	15	9
眠り又は食慾の缺乏	26	29	27
神經衰弱	6	5	6
泣く	9	3	7
調變の覺	5	6	5
調變の覺	3	7	4
調變の覺	14	12	13

此れに依りて回心は心身全體を働かしめる一過程であつて、生理的にも一大變化を伴ふ事を知る事が出來る。第一には睡眠と食慾で、次には觸覺である。前者は人間の最も根本的有機的作用で、後者は最も根本的な感覺である、此れを以つて見るに回心は深奥なる本能的活動によ

過程なる事を認める事を得るのである。又精神的方面に於ては沈鬱、悲愁が最も多い、其次ぎには不安、憂慮といふのと、罪を拒む傾向あるものが多くなつてゐる。而して更らに高き生活に對する願望とか熱心眞面目懷疑、神から離れたといふ感などが割合に少ない。之れを要するに回心前は多くのものが沈鬱なる經驗をなすこと、及び罪に就ての意識が理想生活に就ての意識よりも强いといふことを大體に於て見る事が出來ると思ふ。或る者は曰く「人が救濟せられるのは、正義を追慕する心によるのであつて、罪の意識に依るのでない」と、併し右に揭げた如き統計によると丁度其反對を示してゐる。固より回心の候補者の心中を分類すれば、第一に自己現在の不完全又は邪惡、卽ち罪から脫れ出やうと焦慮するのと、第二に自己が現在よりも更らに高き生活を翹望するところの積極的思想とがある。併し多くの人にあつては、自己現在の邪惡が、翹望するところの理想的想像よりも意識中に一層遙かに判然たる部分をなすのであつて、大多數の人に就いては實に罪が殆んと全く注意を占領してゐるのである。之れを一言にしていはば「回心は正義に進む努力よりも寧ろ罪から遁れ出る爲めの奮鬪の過程であるのである」(スターバック「宗教心理學」六十四頁)。「罪に死に義に生きる」といふのは回心過程の全體をいひ表はしたもので、回心前に於ける一個人の意識狀態を說明したものではない。何となれば

こは「罪に死ぬる」といふのと「義に生きる」といふのと、つまり二つの中心が意識に存在してゐる事を示してゐる。併し回心前に於ては意識は二つの中心を有するが如き橢圓形的でなく只一つの中心が認められるが一般であるからである。

男女經驗の相異　さきに揭げた表に依りて見るに女は男よりも感情的である。卽ち女には沈鬱悲愁不安憂慮熱心眞面目、助けなき感などが男に比して其數が多くなつてゐる。男は懷疑、新奇、罪を拒む傾向などが女よりも多くなつてゐる。此れを以つて見ると男の宗教生活は女よりも知的であり、又意的である樣に思はれる。回心前の經驗の繼續期間は男に於ては女の二位である。回心の動機に就いていふなら男に於ては主觀的動機が多く、女に於ては客觀的動機が多い。女は四圍の刺戟に對して感性が銳い。何故感性が銳いかといふ事に就て或る人は女の神經原が男のよりも短い故に外界からの刺戟を腦に傳達する事が早いのであるといふてゐるが、兎に角女は男よりも印象を受け易い事は事實である。而して模倣性も男よりも女が强い。それ故敎會の禮拜又は新奇會にて回心するもので、女の回心者は、男の六倍であるとスターバックはいふてゐる(六十六頁)。一身上の問題に對して、他の者の助力を受けたいと思ふ事も男よりも女の方が多い。卽ち女には依賴心が男よりも强いのである。夫れ故男は自力的であるに反し女

るは他力的である。新生活に這入るにも男は自己の力に頼り、自己の直覺によりて其路を切り拓いて行く、而して舊新兩生活の間にあつて躊躇してゐる期間は男は女よりも長いのである。

逡巡　さきに余は自我の分裂に就て述べて置いた、回心前に於ては確かに自我は分裂し意識の統一が失はれ調和が破られてゐる。而して統一を失つた二ッの自我は互に相反對の地位に立つのである。此の意識に於ける破裂は現在の自我を退けて理想的自我を打ち立てんとするのであるが、此の爭鬪が意識下にあつて未だ意識上に現はれない事が屢々である。かゝる場合は有機的の不滿足が感ぜられてゐるが、意識下に於ては未だ明らかに定まつて居らぬ理想を實現せんと努力してゐるのである。而して此の時は外部からは大低逡巡狀態が見受けられるのである。たとひ意識上に現はれてゐる時でも、或る期間逡巡狀態が繼續してゐる例は決して尠なくない。クラシックな例としてはポウロのそれであつて、彼にあつては內なる人と外なる人が長い間相互に爭つてゐた。

ロ、回心の頂點

自己降服　回心の第二段階は、回心の頂點に達した時で、即ち一轉機を現はすべき時期である。回心前に於ては自我が分裂してそこに逡巡狀態が現れる事は右に述べし如くである。所が

愈々回心といふ事になると、低き自我が降服せられて、高き自我が確立するのである。此れを生理的にいへば神經の流れの低級な道路が禁示されて一層高き聯合が成立せられ、而して自我が新しき活動と合同する事である。若し此れをキリスト敎の神學的にいふなら、キリストが心胸に宿り舊き生活が滅ぼされる瞬間に於て低き自我の降服は缺くべからざる事である。夫れ故キリストも敎へて曰く「汝ら生命を得んとするものは之れを失ひ、我が爲に生命を失ふ者は之れを得べし」と、又使徒ポウロは「我れ日々に死す」といひ「我れ生くるにあらず、キリスト我にありて活くるなり」と、前者は低き自我の降服が徹底的に信仰生活を得るに必要不可缺的なる事を敎へたので、後者は自らそれを經驗した言葉である。然らば此の低き自我の降服をなす爲めには如何になす可きかといふに自己の意志の働きを制する事が肝要である。回心に於て意志の働きは甚だ必要ではあるが、又一方から考へるなら自己の個人的意志の働きを禁止する事がなくてはならぬ。固より個人的意志の働きを禁止するまでには充分意志を働かして見る事は差支ない。併し爾に「人力の盡くる所即ち神の行動開始の時なり」とある如く、自己の意志力に訴へて努力して居る間は、回心は完全に現れない。我執的焦慮が堅く門戸を守つてゐる限り遠

大なる信仰は現れるものではない。若し自己の意志を挫いて大なる生命に自己を全く信頼せしめる時、そこに信仰の精神の遠大なる確信が出現するのである。それに就いて余は玆に二三の例を、スターバックより引くであらう（一一四頁）。

「私は單にかういふ「神様私は出來る丈盡しました、私は一切をあなたに任せます」と、すると忽ち私のところへ大なる平和がやつて來た」。

「私は遂に抵抗することを斷念した、それは頗る苦闘であつたけれども、兎に角私は自分を見捨てた。所がそれから次第に私におこつて來た感情は、自分は自分のする丈の事は盡した。では今度は神様がそのみこゝろのまゝにせられるのだといふのであつた」。

スターバックはいふ。ある音樂教師が彼女の弟子に教へやうとする事柄を充分説明したあとで、試みがうまくゆかなかつた時、そこでかういふのが例であつた「試みる事を止めて御覽、さうすれば自然にうまくゆくから」（一一七頁）と。ゼームスは此のところを忘れた名前を想ひ起すときの例で説明してゐる。即ち或る人の、或は或るものゝ名前を忘れた時、其れを想ひ起すが爲め色々やつて見る。而して努めれば努める程、忘れた名前は意識の奥に押し込められる樣な氣がして、止むを得ずそれを想ひ起さうとする努力をやめて全く別の事を思つてゐると、忘れ

た名前がふら〳〵と心上に浮んで來るといふてゐる。（三八〇）これによりて吾人は努力は必ずしも結果を生ぜしめるものでないといふ事を知る事が出來るのである。吾人は宗教に於て殊に此の事を考へねばならぬ。道德家は吾人に自己の意志を常に緊張せしめて置く事をすゝめ、受働的傾向を戒め、而して常に努力する事を教へる。併し宗教に於ては自己の、有意的努力を止めよ、ヨリ大なる生命に自己を信賴せしめて自己を放棄せよと教へるのである。といふのは有意的努力は結局失敗を齎らすに過ぎぬからである。機關は火力が餘り强過ぎるか、又は調革が餘り堅過ぎるかすると運轉しないといふが、それと全く同樣である。一切を抛棄して只管神明に信賴し、吾人が所謂シュライヘルマッヘルの絶對信賴の感に歸着した時に、そこに有限の中に無限の能力が加はるのである。

古への聖き詩人が「神は挫けた魂を求め給ふ」と歌つてゐるが、人が徹底的に遠大な信仰を獲得するには、自己の意志は挫けねばならぬ。低き我れは、高き我れの爲めに降服せなければならぬ。早くいつて見ればポウロの所謂自己に死ぬる事である。罪に死に、義に生きる事である。フイヒテも曰く「吾人が死するは生るゝなり」と。永遠の否定は永遠の肯定に至る大路である。なまぬるい曖昧な否定からは何ものも生れ出ぬであらう。

沈默の刹那　低き自己が高き自我の下に降服された時、即ち自己が完全に否定された時、そこには自らの思慮も言葉も封じられた樣に感ぜられ、意志は全く共働きを中止してしまふ。そしてそこに沈默の刹那がある、此の時人は寂靜の密室の人となり、心ゆくばかり神秘を味ひ、何ものにも妨げらるゝ事なく神と接し神と交はるのである。沈默の刹那は實に神を直下に見る契機である。詩人ダビデは此の契機を求めて歌つて曰く、

「わがたましひよ默して只神を待て、そは吾が望みは神より出づればなり」――六十二〇五、

とエックハルトも嘗て曰く、

「神の事業と生命に至る最善にして且つ最高なる道は沈默して神自らを働かしめるにある」。

と聖アウグステマスも「神に就いて吾々がいひ得る最良のことは彼に就いて沈默することである」といふてゐる。宗教は如何なるものであつても多少進んだものであると、神秘の要素を含まぬものはない。此神秘の語義は何かと調べて見ると口を閉じ耳を塞ぐの謂である。ポウロは曰く「神國は言に在るに非ず、能に在ればなり」(哥前四〇二十)と、此の「能」は即ち神秘の藏に貯へられてゐる能である。求むるものは惜みなく與へられる能である。

禪に「不立文字」といひ、無字を以て悟道の開門とした。老子は「無爲之事」「不言之敎」を說き、莊子が「大辨不言」「辨也者不見也」といふのも、皆吾人の參考とすべきものである。宗敎的眞理は證明を要しない眞理である。說明を許さない眞理である。離言自證である。

潛在意識　扨て信仰は自己降服によりて沈默の刹那得られるものであるとは叙上の如くである。然らば何故に然るかといふ所に尙ほ考ふべき問題が殘つてゐる。此れに就いて心理學者は潛在意識說を立てゝゐるのである。然らばそれに就いて今暫らく吾人の考へを費やしたいと思ふ。抑々此の潛在意識といふ思想は既でにライブニッツに起原し、而してハルトマンに至りて大に此の思想がポピユラーにせられたのであるが、此思想が哲學から心理學に傳つて來たのは極めて最近の事である。而して潛在意識といふのは始めて「無意識(アンコンシアスネッス)」といはれてゐたもので、此の無意識といふ言葉を初めて用ゐた者は、ウキリアム・ビー・カーペンターといふ人で、彼は其著「心的生理學原論(プリンシプルス・オブ・メンタル・フヰジオロヂー)」(一八八九年)に此の語を用ゐてゐる。即ち彼は同書第十三章に「無意識的腦髓作用(アンコンシアス・セレブレーション)」といふ一章を作り、而して彼はテーブル・トーキングなどを此の語を以つて說明してゐる。彼以前には未だ固有の名稱はなかつたが、サー・ウイリアム・ハミルトンとかレイコックなどいふ人等が既に此の心理的事實に着目してゐたのである(カーペンター、同書五一五頁以

下)。ウイリアム・ゼームスも此の事に特に意を用ひて其著「心理學原理」(プリンシパルス・オブ・サイコロヂー」一八九〇)に詳說してゐる。併し彼は依然無意識といひて潛在意識とはいふてゐない。此の語を初めて用ひしは、英國の心理學者フレデリック・マイヤーであらう。ゼームスも此れを受けて其著「宗教的經驗の種々」(一九〇二)に之れを盛んに唱へてゐる。而して其意識といふ語に次意識又は、潛在意識の語を置き換へた方がよい事をいふてゐる(三八三頁)。プラットなどもゼームスの流れを汲みて、頻にこれを尊重してゐる。斯くして現今多くの學者が此の事を考究する樣になつた。併し未だ定說ではないのである。共最も大なる著作としては、米國の心理學者、ジャストローの「潛在意識論」(ジサブコンスシアス 一九〇六年)がある位で其外に大したものはない。

斯の如く潛在說は未だ定說となつたものではないが、其應用の盛んなる事、又驚き事は驚くべきである。心理學上及び哲學上の困難を救ふ爲には、潛在意識は實に萬能膏の如く見做されてゐる。而して何でも他の方法で說明のつかぬ事柄は皆此の潛在意識によつて說明されてゐる。心理學者は千里眼(クラーボアンス)催眠(ヒプノシステレパシー)感等の心靈現象に屬する事項を皆潛在意識によりて說かんとするのである。谷本博士は孟子の浩然の氣を潛在意識によりて說いてゐる。又或學者は梵語の喜德

といふ語は潛在意識を顯はす言葉であるとしてゐる。

マイヤース等の所謂「神靈研究會(ソサイチー・ホワー・サイキカル・レサーチ)」に屬する人々は閾外意識(サブリミナル・コンスシアス)と呼び、又閾外我(サブリミナル・セルフ)と呼んでゐる。(ジャストローは閾外我の別在に就いては反對してゐる)。スコフイルドの如きは此閾外我の身體疾患上に及ぼす勢力の大なる事を認めて茲に心理療法を考案した。此閾外我は格別に暗示に感じ易い。從つて心理療法の效も此暗示に感受し易いといふ所から說くのである。彼のメリー・ベーカー・エデー夫人によりて創始(一八九九年)せられた、クリスチャン、サイエンスは此閾外我に自己暗示の效最も顯著なりと認め、そこから精神治療を考案してゐる。

さてひるがへつて少しく潛在意識とは如何なるものであるかといふに、此れを一言にしていへば、意識の貯蓄所である。我々が意識してゐる事柄は我々の意識全體からいへば極めて一小部分に過ぎないのである。大部分は皆貯蓄所にあるのである。ヂャストローは氷山といふ語にて之れを說明してゐる。蓋し氷山が外部に顯はれてゐるのは極めて小部分で其大部分は水中に潛んでゐるからである。水面以下の部分は即ち意識の貯蓄所に當るのである。水平線は心理學者の所謂識域をいふのである。識域とは知覺の最も小部分をいふ。而して吾人の生活の八分の一は意識的で、殘りの八分の七は識域以下にあるといふのである。併し意識の境界は決して

ッキリと定める事は出來ない。氷山は其容積の八分の一が水上に現れてゐるとしても、實際意識は氷山ではないから然うキッパリと水平線上と、それ以下を區別する事は出來ぬ。意識の中心、即ち最も明確な意識の焦點から遠ざかるに從つて意識は漸次朦朧となり、潛在意識の帶に入るのである。プランセットで何か書かす時、其時自分が書いてゐる事柄に就いては明らかな意識がない、全く無意識で書いてゐるといふてよい。斯の如き現象は意識下から生ずる作用である。我々は往々自分でした事、いふた事に驚く事がある。而して自分は果してそんな性質を持つて居たかしらと疑ふ事がある。これも意識下の作用に歸すべきものである。よく奇想天外より來るとかいふが、何も思想が高い天から天降るのではなく、反對に深い意識の底から出て來たのである。出來心といふのもそれで天使の樣な者と人から目されてゐたものが、意外に萬引をするなどの事がある。つまり所謂ノーマルな人が時に急に其普通の心理生活から脫離する事がある。程度の相異で我々は誰れでも一時アブノーマルの狀態に時々這入るのであるが、此れも潛在意識で說明が附く。或る人が人間の心をピックリ箱だといふたが、潛在意識を考へて見ると確かにピックリ箱に相異ない。斯く考へると自分ながら自分の心が恐しくなる。所で神の觀念なども矢張り此の潛在意識から現はれ出ると云はれてゐる。心理學者の中には此の潛在

意識の中に神が宿つてゐるといふものもある。英國の神學者サンデー博士の如きも彼が一九一〇年出した「古代及現代の基督論」(クリストロヂー、エンセント、アンド、モーダン)に於て此潛在意識說を提唱してゐる。彼は其主張を次の如く二ヶ條に約言してゐる。

一、吾等の精神中に內在する神の玉座、若しくは吾等の精神上に神的作用を現はす原因は潛在意識である。

二、キリストに宿れる神も亦其居所は同じく潛在意識である。

尙キリストの神性に就いていふ所を見るに、彼は從來基督の神性と人性を考ふるに當り、垂直線を引き、一方は神性に屬するもの、一方は人性に屬するものと區別したるより困難は生じたのである。垂直線の代りに水平線を劃し、神性は此の線以下の深き部分に潛在してゐるものと考へるなら、多くの困難は取り去られるであらう。此の線は自然、潛在意識の領分に引かれなければならぬのであるといふてゐる。而して博士は潛在意識を說明するに、首の細き瓶の底に穴ありて無限なるものに向ひて開けてゐる如く、又顯はれたる意識は時計の文字板の如く針を動す力は深き所より來るか如しといふが如き譬喩を用ゐてゐる。

プラットは其「宗敎的信仰の心理」に信仰に三段の別をなし、其第一段は聞いて信ずるので

此れはクレデュリチーによる。第二段は疑ふて而してのち信じ、第三段に於て感情に依りて信ずとしてゐる。而して感情に依りて信ずるのは即ち潜在意識の作用であると認めてゐる。更らにブラットは最近の著「宗教意識」に於て人間の宗教の遺傳的なる事、而してそれが我々の宗教の潜在意識的根抵をなし、爲めに我々の中多くの者は「治すべからざる程に宗教的」である事をいひ、且つ我々が生れるやそれより周圍より種々なる感化影響を受けるが、それが潜在意識の中に貯積せられる。而してそれによりて我々の意識生活が感化を受る。即ち我々の成人した後の全ドラマは我々の幼時の經驗と社會的繼承によりて全然決定せられるものであるといふてゐる(六十一頁)。ゼームスは回心の自己の降服の樣式に於ては潜在意識的效果が一層大であるといふてゐる(「宗教經驗の種々」二百六頁)。更らに彼は結論に於て潜在意識我は人と神との契合一致を媒介するものと斷言してゐる(五百〇一頁)。ゼームスはスターバックの研究の結果より尠なからず影響を受けてゐる樣である。スターバックは回心の要素を有意的と無意的とに分ちて研究をなし、無意的回心に於ては、過去何時か與へられた印象が意識下に於て、或る時日の間意識に上らずに生きて働いてゐて、それが回心の際に急に意識上に姿を變へて現はれて來るのであるといふてゐる(「宗教心理學」百〇六頁)。若し然りとせば宗教々育は此の邊に多大の

意義を有してゐる。フロイドは我々の夢に於て材料となつてゐるものは大部分は子供の時の記憶であつて、其記憶の或るものは全く忘れられてあるものもあると。フランシス・ガルトンは我々の覺醒に於ても我々の心は少しも注意を拂はぬ觀念によつて滿されてゐる事、及び其觀念の大部分は少年期青年期からの記憶であるといふてゐる。斯く考へるなら幼時よりの印象の如何に重大なるものであるかゞ解ると思ふ。何でも第一印象が甚だ大切であるといふが、若し我々が心理的に最初與へられた印象を考へて見れば一層それの大切な事が解るのである。自轉車に乘り初めに向ふから人が來てゐるからそれを避けたいと思つて頻りと梶に苦心するが、反つて意外に人の方に梶が取れ、人にぶつかる。それは卽ち最初其心に「あの人にぶつかるだらう」といふ考へがあり、その次ぎに「ぶつかつてはならぬ、避けねばならぬ」といふ考へが出たのであつて、外部に現はれる能力は「あの人にぶつかる」といふ最初の考へが强いからである。ポウロの「我が欲ふ善は行はず、反つて願はざる惡は之れを行へり」と嘆じたのも同じ心理である。

回心と潜在意識との關係は深甚なるものである。何故に自己を自己以上の前に全く降服せしめた時、而して沈默の中に自己を打ち沈めた場合、全き回心が實現されるやといへば卽ち此潜

在意識の作用あるによるのである。

有意識的回心と無意識的回心　尙ほ爰に有意識的及無意識的回心の事を一言して置く。固より有意的と無意識的を明かに區別する事は困難なる事で到底不可能といふてよい。スターバックは回心に有意識的要素の有無を知らんが爲めに、五つの項目を作つて調べてゐる。(一)有意識的要素の全く缺けてゐるもの、(二)此の要素が少しあるもの、(三)有意識的要素と無意識的要素とが釣合つてゐるもの、(四)有意識的要素が無意識的要素より多きもの、(五)殆んど凡てが有意識的なるもの。而して彼は次の如き表を作つてゐる。

有意識的要素	男		女	
	全數のプロセント	平均年齢	全數のプロセント	平均年齢
缺如したもの	2	11	19	11.8
無意識的要素より少なきもの	34	13.6	42	13.2
無意識的要素と同等なもの	36	16.2	19	14.6
無意識的要素より大なるもの	26	17.4	17	15.4

此の表によりて見るに有意識的要素の全く缺けたるものと有意識的要素の絶大なるものとは、男に於ては數に於て同數である。女に於ては缺如したものが餘程多くなつてゐる。年齢から見ると、男に於ては年の進むに從つて有意識的要素が多く、女に於ては丁度其

有意識的要素が強大なるもの	
	2
	18
	3
	17

(「宗教心理」百〇四頁)

男女經驗の相異　今一ッ男女經驗の相違に就いて一言して置く、スターバックは回心前に於て男女の相異が甚だしかつたが、回心共時になると兩者は餘程類似して來たといふてゐる。例へば決心はリパイパル外の女よりもリパイパルの女の方が少なく、男にはリパイパルの方に決心が少ない。此れを回心前と比較せば丁度反對である。又回心の際には男の方が感情的であるといふ事も回心前とは反對である。此の邊は店屋に行つて何かものを買ふ時の心理とよく似てゐる所がある。男は買ふか買はぬかすぐ判斷もし決心もするが、女は仲々に躊躇してゐる。スターバックは何故に回心の際男は感情的であるかといふ事に就いて說明して曰く、男に取りては回心はより多く劇烈な出來事であり、又ヨリ多く急劇な出來事である。男は此れがため長く準備する。樣々の事を思ひめぐらして見る。自己の意志で外からの影響に抵抗もして見る。併し愈々の場合となると、變化が恰も病氣の發作の如く起つて來る。此場合感情が甚だしく高まる故、有意識的の働きが滅するのであると(スターバックの「宗教心理」九十四頁及九十六頁の表を對照參考)。

反對になつてゐる。

八、安心と喜悦の時期

發揚期　此の第三の時期は心身いづれに於ても前の張り結めた時期の反動と見られる。回心前憂鬱期にあつたものが此の時期に於て發揚期に入るのである。而して前の經驗の如何に依りて、此時期の性質及强度が大體に於て決定される樣である。それはスターバックが作つた表を見て明らかである。

回心後の感情	回心前の感情							
	罪の感	沈鬱	憂慮不安	神より遠ざかる	抵抗	祈禱	努力
喜悦	23	19	9	11	5	26	15
身體輕快	8	11	2	5	5	7	4
涕泣	10	7	3	4	7	10	2
平安	17	13	15	7	8	15	19
幸福	13	13	12	15	13	13	8
解脱	6	3	9	3	2	6	5

重荷がとれた	3	3	5	1	5	2	2
快受	17	13	9	6	9	17	11
平靜	4	1	4	1	1	2	4
奮鬪 責任の感	2	0	1	1	1	0	0
部分的絶望	4	0	8	11	4	1	7

（「宗教心理」百二十三頁）

是れを見るに回心前に罪の感を抱き、其罪より脱せんと感じてゐるものは回心後喜悦を感ずる事が最も多く、回心前自己を閉じて新らしき影響を受け入れまいと抵抗する樣な者は、回心後喜悦を感ずる事が最も少ない。回心前祈禱や努力をなした者は喜悦や快受とを經驗する事が多い。而して試みに回心後の感情の下に記された數字を各々合計して見るに（表の順序にて）108 42 43 94 87 34 21 82 17 5 39 である。然らば回心後喜悦を感ずる者最も多く、次に平安、幸福、快受といふ順序になつてゐる。而して奮鬪が最も少く平靜、重荷が取れた感情がこれに次いで少ない。云ふまでもなく、回心後受くる感情は個人によりて皆異つてゐるのであるが、一般に大體の上

からいへば右に述べし如くであらう。尙はこれをスターバックの次の表を見ても略ぼ一致してゐる。

回心後の感情	女		男		計
	レバイバル	レバイバル外	レバイバル	レバイバル外	
喜悦	18	14	40	35	44
身體輕快	14	8	11	6	19
涕泣叫號	14	6	14	3	18
平安	14	29	11	32	37
幸福	15	25	11	16	31
解脫	11	8	14	0	16
身心の重荷が取れた	8	4	0	3	8
神又はキリストを受け入れだ及快受	17	22	11	22	33

平靜、打勝つた	5	2	3	6	7
努力、責任の感	9	6	3	0	10
部分的絶望	11	8	9	12	18

是れによると全體に於て喜悦が第一で、平安が第二、快受が第三、幸福が第四になつてゐる。

尙ほ此表によりて注意すべきは、レバイバルとレバイバル外に現れてゐる數字と男女の比較である。身體輕快を感ずる事や涕泣叫號の經驗のあるものは男女、何れに於てもレバイバルに頗る多く、平安、幸福、快受などの如き落ちついた心靈的經驗は、リバイバル外に著しく多くなつてゐる。喜悦は身體輕快、涕泣叫號などゝ密接な關係があるので、そのいづれにも何となく身體的に氣輕い心持が含まれてゐる。而して喜悦は男女何れともレバイバルに多く現はれてゐる。

男女を比較して見るに喜悦の如き强烈な感情は、男の方が多數になつてゐる。此れに反し神と自身とが一如になつた感及快受の感は女に於て多數である。又幸福を感ずる事も男よりも女

が多くなつてゐる。而して平靜責任及び部分的絶望の感などは、女に於てはレバイバルの方が多く、解脫は男に於てレバイバルの方が多くなつてゐる。

以上は主として回心が感情に及ぼせる影響を見たのであるが、飯沼龍遠氏は更らに回心が氣質及健康上に及ぼせる影響を調べてゐる。それに依りて先づ氣質上に及ぼせる影響から見るに入信後變化なしとせるもの三十一通、入信後變化ありとせるもの八十八通を得、更らに其れを分類して次の如き表を作つてゐる。

	人數 二三	% 二六、一
(一) 自制力の增加	一四	一五、九
(二) 温和となる	一三	一四、七
(三) 感謝的となる	一二	一三、六
(四) 快活となる	八	九、〇
(五) 意志鞏固に忍耐力增加	五	五、六
(六) 平靜となる	三	三、四
(七) 正義に對し向上的となる	二	二、二
(八) 精力增加		

(九) 度量大となる	二	二、二
(十) 果斷力增加	二	二、二
(十一)同情的となる	二	二、二
(十二)無邪氣となる	一	一、一
(十三)徹底的となる	一	一、一

而して飯沼氏は次の如くいふてゐる。「以上に於て最も著しきは、自制力の增加なり、飮酒を辭せざる豪酒家が、基督敎に入てより、全く盃を擲ち投げ捨てゝ些の不快を覺へず、二六時中バイブを放し難き人の、忘れたる如く禁煙を遂ぐるの例珍らしとせず。由來禁酒禁煙の企は、性癖改變中遂げ難きものゝ隨一なりとは、世人の日常口にする所に拘らず、信仰の力を以て容易に遂げ得るを見れば信仰の心理的性質の研究にヒントを與ふる所少なからざるを覺ゆ。且又是等惡癖の矯正てふ事も、次に述ぶる健康增進の一因たるは明かなり。次に(二)を見るに元來信仰生活にある者が、自信力强き爲に、惡しく云はゞ頑迷、善くいはゞ意志鞏固、容易に人の說を認容し難きものあるは、吾人の日常經驗する所なり、然るにかゝるものが第五位を占め、反つて其反對とも見得べき、温和が第二位を占むること、些か疑問の餘地なき能はず。而

して是等は、只「性質温順になり」「従順となり」等記せるを以て其内容如何なるものなりやは知り難し」と。要するに此れに依つて回心が氣質上に如何なる影響を及ぼすかは察知する事が出來ると思ふ。

更らに同氏が健康上に及ぼせる影響を調べた所に依ると、其影響があつたとし居る答案八十八通、なしとせるもの三十一通其外、格別著しき變化を見ざるも、疾病の苦を著しく減じ、又は殆んど感ぜざるに至れりとするもの八通ありと。此れを要するに、回心の結果神佛の加護利益を信じ慰安を得た結果遂に生理的に身體諸器官の調整をよくし、爲めに健康上に効果を及ぼすに至りしものと見るの外はない。俗に「心配程身を痛めるものはない」と云ふが、其れと反對に一度回心して人生の意義を悟得し、日々歡喜と感謝の中に生を過すに至らば、それが爲めに身體器官は尠からず良好なる結果を表はすのである。試みに精神作用と肉體との關係に就いて永井博士のいふ所を見んに、即ち次ぎの如くである。（永井博士「生理學と哲學との境」三九三—四三八頁飯沼氏より引用）

1. 唾液、恐怖苦痛憤怒等烈しく情緒を動かす時、唾液の分泌が全く停止するか、或は大に減退す。

2. 胃液、苦痛憤怒不興等甚しく情緒を動かす時は、食後分泌を見ざるか、或は一旦起りつゝありし分泌も、其爲に忽ちに停止す。

新生活の特徴　新生活の特徴は今迄の内向的の生活が其方向を全く轉じて外向的になる。而して常に同情的に周圍の世界に結びつく事である。人間に對してはこれまでの態度とは全く異なり「自分さへよければ」といふ考へがなくなり「人をもよくなければ」といふ考へが生じて來て、人々の爲め働くといふ精神が盛んに起つて來る。そこには異民族異人種異邦人の區別がない。博愛の精神の下に凡て行はれる。ポウロが同族人から、いたく反對せられても尚ほ異邦人を救はんが爲め傳道したのも、リビングストンがアフリカの蠻民に傳道したのも、皆博愛の精神からであつた。或は又白耳義人ダミエンが布哇の癩病島、モロカイ島に自ら進んで行き、暗黒と失望の中に蓽々生涯しつゝある患者を、我身を忘れて且つ慰め且つ看護し、遂に彼自身同病に感染して倒れしが如きは實に美談中の美談である。更らにジョン・キープルが牛津大學教授たる事を捨てゝ、好んで田舎の小教會の小牧師になつたのも、澤山保羅氏が大阪府から百圓以上の月俸にて招聘されたにもかゝはらず、其れを辭して僅かに六圓の月俸を受けて獨立教會を起しなど如き例は多くあるが、此れらは皆等しく新生活の止むに止まれぬ精神に由るものである。

所謂傳道といふ事は、新生活に於ては、眞實なる傳道の精神からなすのである。そして友人でも家族のものでもやさしい心で待ひ、眞に愛する心を以て交はるのである。己れを呪ふもの憎むものゝ爲に眞正の愛情を傾けるのである。キリスト及其弟子が信仰の敵の爲めに祈をなしてゐる有樣は、新生活の最も顯著なる特徵である。新生活は又自然に對する態度をも一變せしめる。自然に對して一種特別なる崇敬の念を拂ふ樣になる。ブッケがワルド・ホイットマンに就いて云ふてゐる言葉に「彼は野生にせよ、手入れがあるにせよ、非常に花が好きであつたのだ、どんな種類でも構はなかつたのだ、彼は百合や日向葵を恰も薔薇を愛する如く愛したやうに思ふ、恐らく實にワルド・ホイットマン程愛するものゝ多く憎むものの少なかりし人はこれまで一人もないだらう、凡ての自然物が彼の目にチャームする樣に見へたのである」「どんな動物や昆虫や或は無生物に對してさへも、または自然の法則に對してさへも、または病氣癈疾死の如き自然の法則のどんな結果に對してさへも、賤下する言葉を使ふ事は無かつたのだ、彼は天候苦痛病氣或は、他の何事に就いても苦情を言つたり不平を鳴らしたりすることはなかつた」（ゼームスの書より）とある。新生活に入らば人の自然に對する態度は全く一變するに相違ない。自分の經驗に徹しても、又他の多くの者の語つてゐる所を聞いても、回

心後草木や種々なる動物に對し憐みの感が出て來る事は明かである。ホイットマンの如く、あらゆる人を愛すると同時に、あらゆる自然を愛する樣になる。只愛する、憐れむといふ外に往々それに對して崇敬の念を抱く事がある。人の心に自然宗敎の現はれるのも、よしそれがその起原でないとしても、大いにそれを助長したものは個體に於ける此の心理である事は確かである。次に第三の特徵と見るべきものは神に對する態度である。今迄遠く見て居つた神が近く見へる樣になり、如何なる者よりも神は最も近く在すと思ふ樣になる。而して神人一如の境が現實になる。絕對とか、無限とか、眞理とか、實在とか、本體とか、第一原因とか、最高善とか推理の結果割り出した哲學的倫理的の言葉では滿足せず、神は私の父であるとか、又は友であると云ひ、キリストは私の兄であるとか、又は良人であるとかいはなければ滿足出來なくなる。少なくとも然か云はん事を望む樣になる。而して今迄神を怖いと考へてゐたものが、親しいもの、愛すべきものといふ風に考へる。

以上の如く回心して新生活に入らば、人に對する態度も、自然に對する態度も、神に對する態度も凡て一變し古きは化して新らしくなるのである。今スターバックの研究の結果により其三方面に對する態度變化の割合を見たいと思ふ。

	女	男
(1)他人を扶けやうと云ふ望み	28	28
(2)他人に對する愛	42	42
(3)自然に對する接近	31	34
(4)神に對する接近	43	43
(5)キリストに對する接近	6	4

表の下の數字は上の表から作つたのであるが、それによると社會に對する態度が回心後最も多く變化し、次ぎに神に對する態度、其次に自然に對する態度となつてゐる。

更らに自己に對する態度は如何といへば、極めて純潔なるものである。孔子は「其意を誠にする者は自ら欺く勿れ、惡臭を惡む如く好色を好む如くす、此れを之れ自ら謙ぬと謂ふ、故に君子は必ず其獨りを愼む」と。それと同じく、回心者は自ら欺くといふ事をしない。嘗て彼の宗教詩人として又牛津大學の中心人物の一人として名高いジョンキーブルがクリスチャンイヤ

ー(教會歷咏)を匿名にて出版した時世人は誰れとなく、キーブルの作なりと傳へ好評嘖々忽ち百五十八版を重ねたが、キーブル自身は自分の詩集に對する世人の好評を耳にし、鬱々として樂しまなくなつた。或る日友人に其心情を打ち開けて曰く「自分の書物は非常に好評されてゐるそうだが、それは予に取つては全く豫期のない事だ。あの詩集に現はれて居る自分の感想は只自分の信仰方面、善なる方面のみで、自分の惡い方面は少しも表はれてゐない。だから若しあれを以つてジョン・キーブルと見るなら、そは大なる誤解である。單に誤解を招くといふ事丈でなく、自分は全く世人を欺いた事となり、又自己をも欺いてゐる。此の事は實に予の苦痛の根源である」と。以てキーブルの純潔を偲ぶと同時に、回心者の自己に對する嚴格なる態度をうかゞふ事が出來る。パプテスマのヨハネがユダヤ人等から遣された使者に「爾は誰ぞ」と問はれた時「我はキリストに非ず」「我は其履の紐を解にも足らざる者なり」と答へた所を見ても同じく回心者の純潔さが察しられる。

それから回心者は靈眼鋭く、自己の行爲を酷評し、回心前に罪の感なかりしものも、回心後に至りて自己の罪の感を深からしめるものである。ポウロが「我は罪人の頭なり」と感じたのは回心前でなく、回心後であつた。岡山孤兒院長であつた石井十次氏は宮崎縣高鍋に居る頃病を

得、其間醫師百々平氏より信者になることをすゝめられたそうであるが、彼は病中何等かの靈光に觸れたのであろう、遂に洗禮を受けて信者となつた。然るに其後彼は、罪の感を深く抱いたとの事である。當時妾を蓄へ遊里に出入し藝者と共にたはむれるが如きは何等罪と思はれてゐなかつた。のみならず、日本男子の面目の一つと目されて居つたのであるが、石井氏は、回心後深く此れ等の罪なる事を感じたといふ事が、其傳記に記されてある。

ポウロは嘗て曰く「我が望は此の世を去りてキリストと共に天國にある事である。併し若し生きて世の人の爲めになるならば生きて居りて人の爲をはかりたい」と、此れにも回心者の自己に對する一つの態度が讀み取られると思ふ。即ち此の世の生活といふものに超越し自我を制し自我を脫して新しき理想生活に入らんとするのである。其理想生活に入る爲には貧苦も敢て意とする所ではない。のみならず、他人の誤解も、輕蔑も嘲弄も心に止めず、凡て忍耐と覺悟を以て敢て至難の業にたづさはらんとするのである。

默行　今一つ回心後の經驗に就いて述べて置きたいと思ふ。それは默行といふ事である。前に述べし如く回心後は多く喜悅の感に滿され、何もかも面白く愉快の氣持になる。特にこれといふて別に興味のあるものがない程に一切のものが興味あるものとある。而して感謝の心が胸

中に溢れる程感じられる。所で然うなるまでには自分自身に對しては隨分不平不滿を抱き、時には叱咤もし鞭撻もする。周圍に對しても種々なることを氣にし、所謂人の疳氣を頭痛に病んでゐた。世間の人の言つたり行つたりしてゐる事を默つて眺めてゐると、愚劣で馬鹿々々しく見えてゐた。所が一度飜つて我と我が身を眺めた時「人の事などは云はれる柄でない。自分こそ愚劣で馬鹿々々しい事をしてゐる」と氣が付き、急に我が身が淺ましく思はれる。而して人の行爲や、言說や、人の思想や、すべてについて彼れこれ批評する事を眞におふけない事であると身にしみ〳〵覺える樣になり、そして自分はモー何もいはずに默つてゐたいと云ふ考へになる。默つて行ひたいと思ふ樣になる。回心後の者が「默行」の二字を書いて壁に貼り付け、それを以て日々の敎訓としてゐた者が二三あつた事を知つてゐるが、つまりそれである。回心前には神に就いても、宗敎上の事柄に就いても到る所で口角泡を飛ばしてゐたが、回心後になり大風が止んだ樣に靜かになる者は多くある。極端なものも往々あるが、回心後は幾分かは一般に然ういふ狀態になるのである。北海道のトラピストが神への奉仕に沈默と勞働に日を過してゐる心理は即ちそこにあるのである。彼らは此の沈默と行動の內に人生の滋味を汲んでゐるのである。而して救ひが約束されてゐる事を信じ、感謝と喜悅に滿されてゐるのである。

第七章　回心の心理（其二）

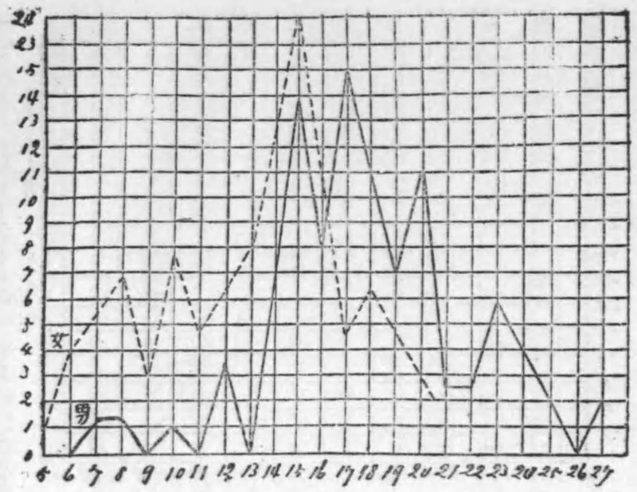
一、回心の時期

回心の年齢　回心現象がほゞ或年齢を限つて現はれる事は、多くの研究者の報告を對照して見て既に明かなる事實である。スターバックは四百八十九人（男二三五人、女二五四人）の經驗を得て研究し、其結果を報告して回心現象の起るのは殆んど專ら十五歳乃至二十五歳の間にある。此れ以外の年齢に於て此の現象の起ることはあるが甚だ稀である。然らば回心は明かに青年期の現象である。現はれ始めるのは七、八歳頃からであるが、十歳又は十一歳頃まで漸次其數を增し、それから十六歳迄に急速の增加をなし、其後二十歳迄に急に減少し、二十歳以後は漸次減少して三十歳以後に於ては稀れである。然らば回心が二十歳以前に起らなければ、回心の機會は少なくなるものと見てよいと。（「宗教心理」二十八頁）いふてゐる。而して回心の平均年齢を男十六歳四とし、女十四歳四としてゐる。

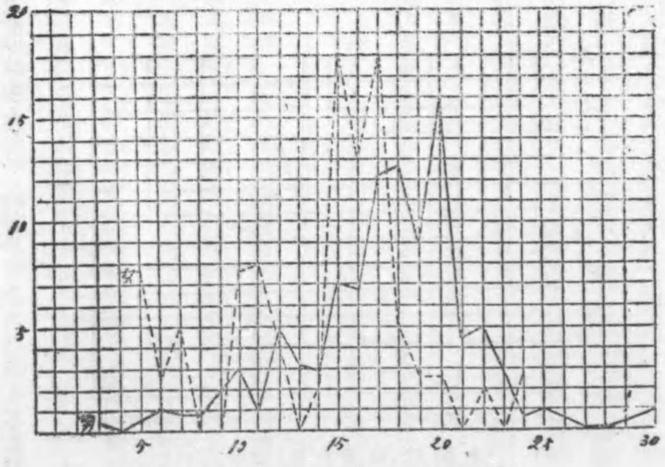
コーは彼自身が決定的覺醒に就いて調査した八十四人と、其他ロックノバー會議の人員二七二人、スターバックの調査した回心の場合の五一人、自發的覺醒の場合の七十五人、基督教青

年會の役員五二六人、ドルー神學校の卒業生七七六人に就いて綜合的に研究して見た結果平均年齡十六歳四を得てゐる。而して最大多數は十六歳の時に起り、十三%は十二歳以下に於て起り、十六%は二十歳以後に至りて起り、十二歳より二十歳迄の間に起るものは七十一%を占めてゐるといふてゐる(「精神生活」四十五頁)。ブラットの「宗教的信仰の心理」二百十九頁の脚註を見るに、コーは後に至りて、其意見を變更し回心の平均年齡を十三歳七としたそうであるが、ブラットは曰く此れは多分コーがギユーリックの研究の結果に影響されたのであらうといふてゐる。

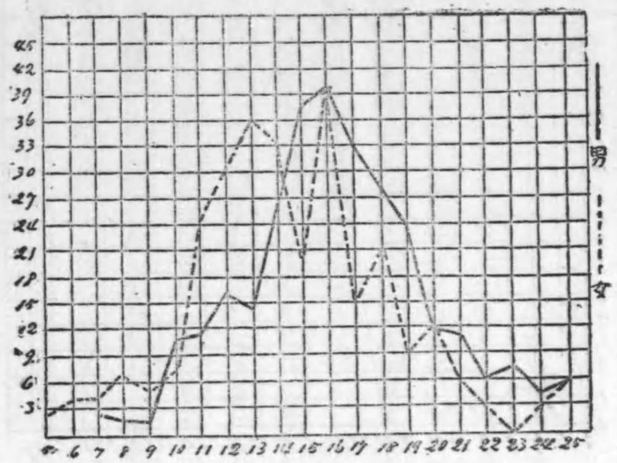
石神氏は百六十六人(男七十一人、女九十五人)に就いて調査した結果、男子の頂點を十七歳とし、女子のそれを十五歳としてゐる(「宗教心理の研究」四十四、四十五頁)。柳原氏は百八十六人の基督敎信者に就いて回心年齡を調べ、男は十八歳、女は十七歳に於て最も多き數を示してゐるといふてゐる(「兒童心理」一一〇頁)。西澤氏は男三百三十九人、女四十人、計三百七十九人に就いて調査した結果「男は六歳、十歳、十二歳、十五歳、十七歳、十八歳と躍進して二十歳に至り最頂に達し、二十歳以後は急激なる減退を示してゐる」といふてゐる(「現代青年の宗教心」百六十四頁)。



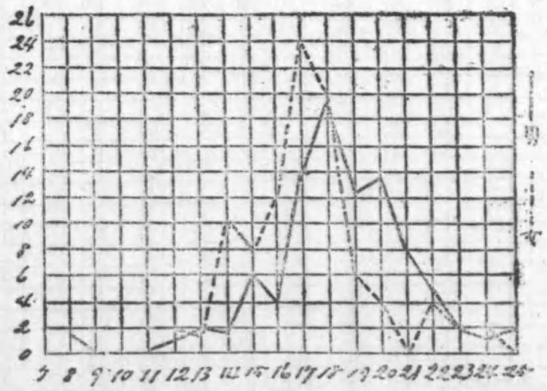
(石神氏「宗教心の研究」四十四頁)



「現代青年の宗教心」百六十五頁



（頁九十二「理心教宗」クツバーター）



（靜原氏「理心童兒」百十頁）

右四種の回心年齢に就いての統計圖表は讀者の參考の爲めに特に揭げて置く。

回心にほゞ定つた時期あるは何故か　此れ等の圖によりて一目直ちに知らるゝ如く、回心が特に或る時期に著しく顯るゝは回心現象に或る年齢が限られてゐる事を證するものと見てよい。洋の東西を問はず、ほゞ同年齢に於て回心現象の現はるゝ事も此れによりて明かだと思ふ。然らば何故に斯の如く、回心にほゞ定つた時期があるか、そは容易に斷言し得る事ではないが、其理由の一つは恐らく宗教そのものゝ性質によるものと見るべきであらう。宗教は元來救濟の手段である。俗に「苦しい時の神頼み」といふ如く人の心は何か苦しい事、痛ましい事に出合ふた時自づから神（又は或るもの）に信頼する心を起すものである。サバチエーは、宗教は苦痛の中から生れ出る事をいふてゐる。固より心理的に極めて複雜なる宗教が單純に苦痛から生れ出づとはいへないが、或意味に於て人の苦痛に對する經驗が遂に宗教心を抱かしめるに至るといふても少しも差支ないのである。今少し云ひ換へるなら現實より脫して理想に生きんとする精神は人生の苦痛を經驗せる時最も強烈である。それ故人が苦痛を經驗せる時熱心に現實より脫して理想に生きんとする所に宗教心が喚起せられるものと見てよい。然り、若し然りとせば回心に時期ある事は說明するに、左程困難はないのである。何故に回心の時期があるかと

云ふ事は、何故に回心が青年期の現象であるかを說明するなら、自づから解決する事が出來るのである。然らば何故に回心が青年期の現象であるかを次に直ちに考究して見たいと思ふ。

何故に回心が青年期の現象であるか　スターバック其他の學者が西洋に於て、或は東洋に於て、右に擧げし如く多數の人々の經驗を蒐集し、研究した結果ほゞ一致した報告をなしてゐるのであるが、吾人は此れを單なる偶然的一致と見做す事は出來ぬ。そこには必ずや何か深い理由があるに相違ない。故に予はスターバックに準じて心理學的方面からと、生理學的方面からと、此兩方面から其理由を考究して見やう。

一、心理學的考察

此の方面から考察するには知情意の三方面に分ちて考へて見る事が便利であらう。

(イ)先づ知識の方面から考へて見るに、十歲前後になると理性が大いに發達し推理力が遽かに增加して來るのである。而して青年期に至りて其頂點に達するものと見てよい。斯く理性が發達する事は宗教的宇宙觀及び宗教的人生觀を抱くべき條件となるのである。古來理性は造物主が人間に植へ付けて置いたもので人間神性の印であると考へてゐたのである。ギリシヤ人は此れをロゴスと云ふてゐた。而して人間は他の動物と種々共通のものを有してゐるが、理性は他

の諸動物と區別する印であると見られてゐた。確かに少くとも理性は人間を他の受造物より區別する所の一つのものであらう。所で此の理性はジャーム(胚種)の中になく、子供と雖も相當の年齡に達する迄は全く理性を缺如してゐる。少くとも十二三歲頃迄は理性なきものと思はれてゐた。併し發生學の進歩と共に斯かる說は變つて來た。而して始めから理性はあるのであるが、丁度草木の種子が日光や空氣や水を得て成長する樣に、身體の發達と共に、又教育によりて、次第に理性も發達するのであるといふ風に考へる樣になつた。而して十歲前後は殊に著しく理性の發達し始める時期である。此の頃に當りて回心が現はれ始める事を思へば理性の發達と回心とは大なる關係ある事を知る事が出來る。幼少な子供は外界からの印象を感受する事が强い。併し理性が未だ充分發達していない故未だ抽象的に事物を考へる事が出來ぬ。所が十歲前後から理性が發達して抽象的に事物を考へる事が出來る樣になるのである。如斯哲學的思考作用が發達すると此頃から宗教的宇宙觀が現はれ始めるのである。それと共に宗教的人生觀も現はれて來るのである。理性が發達し始めると種々なる方面に就いて懷疑の念も抱く樣になる。特に宗教的方面に於ていへば、此れまでは聞いたまゝを信じ、見たまゝを模倣してゐたが、十歲前後から青年期に至るに從ひ次第に深くそれらに就いて考へて見る樣になる。其結果大いに煩悶

もする。苦痛も經驗する。併し其苦痛煩悶の間にあつて、鹿の谷水を慕ひ喘ぐが如き燃ゆる靈的慾望は遂に光明の途を見出す事となるのである。

（ロ）次ぎに感情の方面から考へて見やう。青年期に於ては感情がこれまでとは著しく變化する、例へば此れまでは利己といふ事を以つて何でもやつてゐたのであるが、青年期に到りて利他といふ念も知つて來る。又兒童期に於ては他愛といふ事は解らず只己を愛するものを喜ぶに止まつてゐたのであつたが、青年期になりて他愛といふ感情が強く現はれて來る。斯の如き社會心の發達は宗教的發達と密接なる關係を有するもので、エームスの如きは宗教は強烈なる社會意識であるから、青年期に於て始めて現はれるものといふてゐる（「宗教經驗の心理」第十一章十二章）。固より宗教は兒童期に於て全くなかつたものが青年期に至りて社會意識の發達と共に始めて現はるゝものとは考へる事が出來ぬが、社會意識の發達する頃に宗教意識も亦著しく發達するものであるとは寧ろ合理的と思はれるのである。

社會心の內で特に愛情の發達は、宗教感情の上に大なる影響を及ぼすものである。ロバートソン・スミスは、愛を以て宗教の起原と見た。宗教の起原を愛に置く事に就いては、容易に受取り難い點はあるにしても、愛情の發達と宗教感情發達との密接の關係ある事は明らかである。

ピューローは曰く「愛は信仰の對象を發見す」と（「兒童及兒童の性質」一七二頁）。ヨハネは曰く「おほよそ愛ある者は神より生れ神を知るなり、愛なき者は神を知らず」（ヨハネ第一書四〇七、八）。といふてゐる。然らば何故に愛が信仰の對象を見出すかといふに、一つには愛の中には欽仰的要素を含める故理想が此愛を基として形造られる。此の方面から神を親愛する樣になる。第二には、愛は必ず其友を求める性質を有してゐる。夫れ故愛は神を見出しそれを友とする。青年は實にプラトーンのいへる如く「愛と共に居り愛と共に働く」ものである。此の愛の發動の最も熾んなる時に於て人は其理想を見出してそれに憧憬し、眞理を求めてそこに永久の友垣を作らんとするのである。

人が理想に愛着するは自己に缺陷を見出した結果である。青年は現實生活を省みて、一層高き又一層良き狀態を自ら想像し其完全圓滿なるもの丶中に生んとするのである。併しながら、そこには種々なる苦悶がある。矛盾に對する苦痛がある。こゝに於て人生の如何なるものかを悟る樣になり、眞に求むべきもの丶何なるかを知るに至るのである。

（ハ）次ぎに意志の方面に就いて考へて見やう。青年期は意志が完成して、自己の行動は內部に於ける良心によりて支配される樣になる。それ故青年期は德性の發揚期である。愛他的感情

が發達する事及び愛情がとみに發達して、友情時代の幕が此の時期に開かれる事は前に述べた如くである。青年期に於ては自己中心の利害觀念が變つて他人に對する獻身犧牲の精神が現はれる。如斯青年期は實に倫理的知覺が最も鋭敏な時である。正邪善德に對する差別の念が明かになり、悔恨の情は實に深刻なるものである。青年は自己の罪過を過大視して自ら耐へ難く思ひ、極めて眞面目な赦罪心を有してゐる。又人生に對する莊重責任の念も此の時期に於て大に現はれる。蓋惡讓遜義氣克己柔和道德の庇護其他社會意識も發達する。善に對する鋭敏なる希求、惡に對する强烈なる憎惡が盛んになつて來る。

如斯德性の盛んなる頃に宗教心が現はるゝ事は即ち當然なる事と見なければならぬ。

以上述べし如く青年期に於ては知的にも情的にも意的にも兒童期とは其面目を新たにしてゐるので、而かも宗教の神聖なる花は此の時期に於て開くのである。

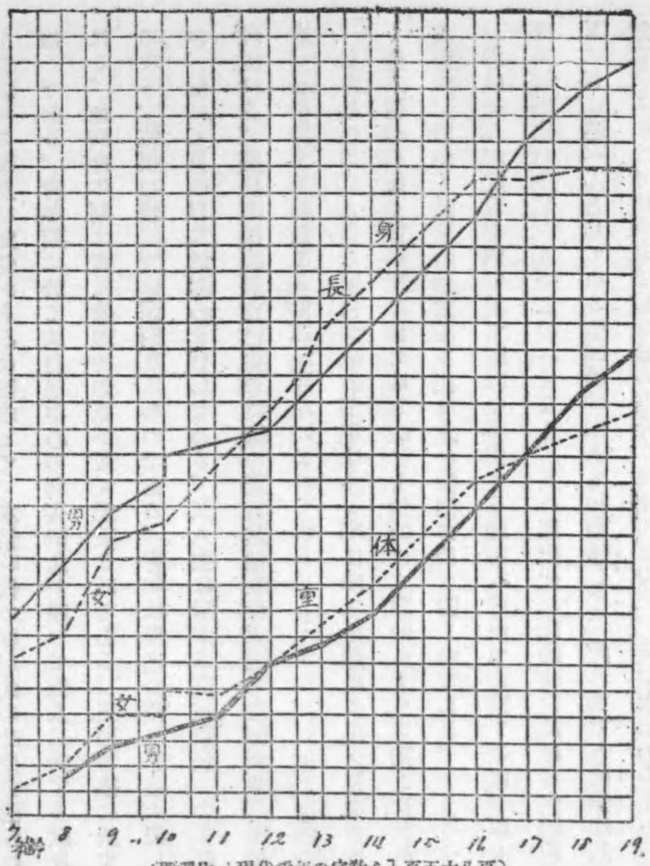
尙ほ吾人が此青年期に於て宗教の發生する理由に就いて考察するに、以上述べし如く單に心理的に變化が生じたといふのみでなく、其心理變化は此時代に於ける生活狀態と深く關係し、又次ぎに述べんとしてゐる生理的狀態とも相關係して、此れまでとは生活狀態が一變するのである。これまでは平氣で親兄弟の厄介になつてゐたが、最早親兄弟の脛かじりも止めなければ

ならぬ時であり、生活上の不安もあり、又親しきものと死別する事がとみに身に感じられて、生の不安にもおそはれるのである。此れは個人心理に於ても、社會心理に於ても同樣である。世界戰亂後は社會一般に生の不安を感じ、それが爲め彼の大本敎などが案外な流行をなした。個人心理に於てもそれと同じく一朝生の不安が感じられて來ると所謂危い時の神頼みで、何か頼るべきものを求める樣になるのである。

二、生理的考察

何故に回心が青年期に起るやといふ事に就いて、心理的には叙上の如き理由があるのであるが生理的には如何なる理由があるかを次ぎに考へて見やう。青年期は心理的變化の時期であると同時に生理的變化の時期である。聲變りがあり、髭が生じ、頭の大さが變り、心臟の容積が増し、動脈の容積が減じ、血壓が高まり、所謂血氣盛なる時である。はき出す息氣の中には炭酸（カーボニックアシッド）の量が大に増加する。別けても生殖系統の機官に一大變化が現れる。而して子供は成人となるのである。此の生理的變化の最も大なる時期に於て回心が現はれる事は其間に何等かの關係ある事を示すものと認められるのである。

身長及び體重の發達の盛んなる時期に於て回心現象の現はるゝ事は、スターバックを始め、



（西澤氏「現代青年の宗教心」一五八頁）

その他の研究者の既でに認めてゐる所である。

次ぎにスエーデン人、ケー氏は他の多くの者と共に身長及び體重の發育狀態につき協同調査した結果を示す曲線を掲げんに即ち上の如くである。

此れに依れば

は二十歳迄急速の男身體發育の狀態を示し、女子は十六歳まで急勾配を以て躍進し來るも其後は遲々なる狀態を示してゐる。此れを前に掲げた回心の曲線と對照して見るに回心の高まる時期と身體發育の盛んなる時とは殆んど全く一致してゐる事を知る事が出來る。

尙ほ此圖に於て男女を比較して見んに、身長體重共に十二歳より十六歳まで女子は發育狀態が優勝で十六歳以後になると男の方が良好となる。此の現象は何人の調査の結果に依るもほゞ同樣である。日本兒童に就いては三島通良博士の調査がある（「日本健體小兒の發育論」明治三十五年出版）それによりて見ても亦略ぼ同樣である。然らば何故に、かゝる狀態が現はれるかといふに、卽ち女子に於ては明らかに知らるゝ如く、女子特有の生理的現象なる初潮期があるが爲である。男子に於ける春機發動期は明かに調査する事を得ないが女子よりも凡そ二年位遲くなると見ればよい。初潮期はベルツの調査によれば平均年齢十四歳六ヶ月となつてゐる。

人員	年齢
二	11
六	12
五〇	13
五四	14
六四	15
三四	16
二〇	17
〇	18
一〇	19
二四〇	計

（西澤氏「現代青年の宗教心」一五九）

三島博士は本邦女兒の發情期の中心を凡そ十二歳にありとし、其全期間を十一歳より十四歳に渉る四個年間とし、男兒の發情期の最盛時は十四歳にして、其全期間は恐らく十二歳より十六歳に至る五年間であるとしてゐる。其他スターバックなどが引用してゐるものを參考せんにロバーツは五百七十五人に就いて最初の月經が平均十四歳八ケ月に起る事を見た。ヘレングネディは百二十五人に就いて平均十三歳七ケ月にそれがあつた事を觀た。初潮期は氣候により、又境遇によりて多少の相異はあるが、先づ十四歳であると見て置いたならさしたる間違もなからう。

さて此初潮期即ち春機發動期と回心と如何なる關係があるかといふに、スターバックに依れば回心は、春機發動の最も盛んなる時と時期に於て一致してゐるといふよりも、寧ろ前後してゐる。而して彼は此の兩者が互に相關係してゐる事を認めてゐる。又身體發育の狀態と、回心との關係も時期の上に於ては春機發動期と回心との關係と類似してゐる事を、スターバソクは述べてゐる。

	女	男
春期發動前の回心	二十八	二十九
春期發動と同年の回心	十六	九

春期發動後の回心	六十一	五十四
最迅速成長前の回心	三十二	三十九
最迅速成長と同年の回心	十六	二十
最迅速成長後の回心	四十一	五十

併し春期發動と同年の回心といひ、最迅速成長と同年の回心といひ、皆一ヶ年間の回心數が出てゐるので、其前後の回心數は何れも數年間に渉りての數である。それ故それを一年毎の數に割つて見るなら矢張り回心數の一番多いのは、春期發動及び最迅速成長と同年に起るものである。して見ると春期發動及び最迅速成長と回心とは互に相並行し關連せる事は認められるのである。そこで吾人の注意すべき點は、身體の發育が稍緩徐になつた時、又初潮期の終りたる時回心現象が起る事である。即ち人は其時期に於て生理狀態に伴ふ衝動的不安、動搖の經驗は宗教的信念に影響するものと思はれるのである。何故に春期發動及び最迅速成長と同年の回心が小數であるかといふに、勢力が生理的方面に注がれるからであるといふのである。果して如何。

要するに全體から見て青年期に於て回心多き所以は此の生理的狀態に基づいてゐる事は疑ふ

べくもない事である。それ故宗教經驗の動機から見ても青年に於ては生理的發育狀態が基礎となつてゐる故、內部の意識の發達に伴ふ內發的動機が最も多く現はれる。此れに反し壯年期老年期の回心動機は外發的動機即ち社會狀態の變遷に基づくものが多いのである。

青年期以後に回心は何故少くなるか、二十歲以後になると回心は漸次其數を減じてゐる事は前に揭げた圖によりて一目瞭然である。何故に青年期を出るに從つて回心が少くなるか。それは右に述べし如く青年期に於て回心が何ぜ多くなるかといふ問題と連續してゐるのであつて、青年期を過ぐれば青年期に於けるが如き心理的生理的の特徵が最早やなくなるからである。而して青年には印象を感受するに銳敏であり、又靈的直感力が强烈であるに反し、青年期以後にてはそれが次第に弱くなる。その上社會的の事情が決心する事を躊躇せしめる事も多くある。又生活上の多忙といふ事も尠からず影響する。「先づパンを求めなければ」とはしばゝ〳〵聞く所である。青年期を過ぎて社會に出づれば所謂社會的の地位が出來るわけであるが、其の地位によりて回心が影響せしめられる事も亦ないとはいへぬ。兎に角、事情は數々であらうが、心理的にいへば、前に述べし如く印象を感受する力が鈍ぶれ、靈的直感力が弱くなつたといふ所に歸すべきである。

二、回心の動機

回心の動機は簡單なるものではなく極めて複雜なるものである。中には比較的簡單なるものも無きにあらざれど、多くは種々なる事情が纏綿し、種々なる動機が錯綜してゐるのである。夫れ故嚴密に回心の動機を取り調べるには甚だしき煩雜をなすのである。或は寧ろ嚴密なる調査は不可能であるといふた方がよいかも知れぬ。されば玆には極めて大體に涉り、其根基となると思はるゝものを列擧して置きたいと思ふ。

今便利上動機を知的動機、情的動機、意的動機の三つに分類して考へて見やう。

(イ)知的動機

此れは懷疑思索等の理知作用の結果に基づくものをいふのである。從つて敎養の可成りあるものに多く。小學校中學校等の子供には稀である。

懷疑に就いていつて見れば、ベルンハムは其「青年期研究」の中に人々の四分の三までが懷疑に陷るといひ、スターバックは女の五十三%、男の七十九%までが長かれ短かれ懷疑時代を通過するといひ、其內男に於ては七十三%までは學問の影響であるといふてゐる。(「宗敎心

理」二三二、二三四頁）。ターナーの「兒童」を見ると、それには男は三十六%、女は六%といふ
てゐる（一八三頁）。

懷疑は信仰の反對でなく、矢張り信仰の一つである。或る人は此れを「困難なるものに對す
る信仰である」といふてゐる。併しそれは確實なる信仰では固よりない。不確なる信仰である。
スノーデンは其「宗教心理」に懷疑を「朝の薄暗き」であるといふてゐる。即ち太陽が未だ地
平線上に乘つて來ない前のツアイライトで、其ツアイライトに於ては不確なる眞理や、朧ろげ
なる希望や思索は皆漸次に確實なるものとなりつゝある。日が西方に沈みて後のツアイライト
ではない。懷疑は知能及び信仰の確立するには殆んど何人も免かる事は出來ないものである。
他の宗教信者に於ても同樣であるが、吾人がキリスト教信者に於て見るに、何等の懷疑もなく
教會へも出席し、其信仰箇條を繰り返し居りながら極めて不眞實な、戒律的な、習慣的な信者
が尠くない事を見るのである。斯る有樣を見る時吾人はテニソンの詩の一節を思ひ出すのであ
る。

熱心なる懷疑の中にヨリ多くの信仰がある。
信仰箇條を半ば信ずるよりも、

（ロ）情的動機

感情は宗教生活の基礎として最も有力なる地位を占めてゐる。宗教の歷史的發達にも個人に
宗教心の現はるゝにも感情は最も大なる働きをなすものである。従つて回心の動機としても亦
甚だ價値あるものが此の感情の中に認められるのである。情的動機の中には又種々あつて戀愛、
寂寥、恐怖、驚異、信賴、適意、感應、感謝等がある。

一、戀愛。戀愛は個人の精神生活に根本的に作用する事は明かである。エームスの如きは宗教
の起原を食慾と性慾の二慾に歸してゐる（宗教經驗の心理第三章）。スタンレー・ホールは戀愛
と宗教との類似點を次ぎの如き十二項目に分ちて列擧してゐる。

1. 兩者共に死を憧憬する事。
2. 兩者共に自然に對して非常に鋭感になる事。
3. 兩者共に熱狂的である。従つて鬪爭絶對的征服を求める事。
4. 兩者共に巢を作り且つ建築美術裝飾等に意を注ぐ事。
5. 兩者共に潮の干滿の如く拒絶挑戰及び肯定等の特色あり、即ち獲得せる歡喜と失へる悲哀
等の動搖ある事。

6. 兩者共に胸中に流るゝ音調を詩に作り歌に唄うて其情緒を發露する。即ち儀式音樂等を伴ふ。

7. 兩者共に自卑の念、得意の感を懷く、而して戀の勝利者と見神者の壯快の感等熱烈なる事

8. 兩者共獲得する事に形式又は儀式を伴ふ事。

9. 吾人の總ての行爲目的は色欲によりて司配せらるゝ事を知る。

10. 戀愛に於ては性的淘汰行はれ、自我の積極的想像力を有する事、又宗教に於ては神と人間との關係に於ても此種の關係を見る事。

11. 兩者共に內部的受動性を有する事。

12. 眞の最も深き宗教的經驗は青年時代に至らざれば不可能なる事、戀愛の發生も殆んど同樣なる事。

斯くの如く宗教と性的現象とは多くの類似點を有してゐる。併し此の類似點が多くあるからといふて宗教を直ちに性慾の轉倒したものと見る事は出來ぬことはいふまでもない事である。所で戀愛が信仰に入る動機を作る場合は決して尠くない。宗教と戀愛とが本質的に關係あるか如何は暫く別問題として、少くとも類似點の多き事は戀愛が入信動機となるに最も容易なる事

を示すものであらう。コーの傳へてゐる一例に、或る人で神の愛と人間の愛とを區別して考へられぬ事を自らいふてゐたが、其人が青年達の集會に自分の戀してゐた一人の婦人を連れて出席した事があつた。其時其人は自己の胸中に湧いてゐた情緒が神的起原であるか、人間的起原であるか判斷する事が出來なかつたので、特に其時其人は地的の情と天的の情とを混同して瀆聖罪を犯さぬ樣に注意したとの事である。」矢張りコーの傳へてゐる實例であるが、或る人が死の間際に於て其妻にいふには「お前の眼の中に……お前の眼の中に私は永遠（エタナール）を認めた」と（「成人の宗教」二三七頁）。斯る例によりて見ても戀愛が如何に容易に入信動機となるかゝ推量せられるのである。戀愛の反對に失戀の結果悲觀し、此世の望み絶へて遂に信仰生涯に入るものも多くある。

二、寂寥の感、寂寥の感の中には思鄉病もあるが、クライン は思鄉病に就いて百六十六人を調査し其八割は十二歲より十八歲迄にある事を報告してゐる（「現代青年の宗教心」一九十八頁西澤氏著）。青年期は實に寂寥の感に襲はれる時期である。それは異性に對する感情より起るものもあり、又只單に孤獨の淋しさを感じ不安の念に打たれるものもある。或は又結婚したもので其子供を亡ひ、夫に別れ妻に逝かれて寂寥を感じ遂に宗教に回心するものもある。

三、恐怖。恐怖と宗教との關係も亦實に大なるものである。と云ふのは此れまで多くの詩人學者が恐怖を以て宗教の基礎と見て論じた所を以て見ても分かる。(拙著「宗教教育の基礎」七十九—八十二頁)。併し最近諸學者の實驗的に研究した結果によると、現今の人々に於ては恐怖が宗教心の基礎となる事は極めて少數である。スターバックの研究によるに死又は地獄に對する恐怖から回心したものが男女共に十四%となつてゐる。コーによると十八%以下であり、リューバは僅かに二%としてゐる。石神氏は男子二、八%女子一、八%とし平均二、三%としてゐる。西澤氏の調べによると十一人で、此れを百分比にして見ると僅かに九%である。尤も人間の精神は極めて復雜なるものである故、「恐怖」以外の項目の中にも恐怖の分子を含み、恐怖の中にも他の多くの分子を含んでゐる事であらう、それ故研究者の手心がある事は忘れてはならぬが、大體の所は斯る學者の研究によりて知る事が出來ると思ふ。さて何故にかくの如く恐怖が現代人の宗教心に失はれて來たかといふに、リューバは三個の理由を擧げてゐる。其第一は現今は昔野蠻時代の者の常に遭遇してゐた様な危險が殆んど止みしのみならず、電光の如きは却て之れを日常の用に供する様になつた事。第二には教育訓練に由つて此の情緒を制御する事、第三には宗教上の恐怖は本來不都合なものと考へ始めた事、即ちそれである。

四、感應の感。西澤氏によると此の種のものが一、一%ある。此れは靈感によりて作られたる動機で、即ち何か强大無邊の或る宇宙的大靈と交りて、其所から得る感じである。併し此の感應の意味を田中氏が取り扱つてゐる様にモット廣く解し、莊嚴なる神境神殿又は儀禮等に遇ひては俗界を超越して一種の啓示を直覺するが如き感を含めて見るなら、此の感應の感によりて入信する者は仲々多くなるのである。即ち男子は此の靈感的動機が最も多く二十五%、女に於ては十九%である。例へば「寺に參詣し御經を聞きし時より有難いと思ふ樣になつた」「毎日神棚や御佛壇の前へいつて御辭儀をしてゐるうちに自然に……」「度々神社に參詣してゐる中に自然に有難くなつた」等である。此の靈感によりて入信するものに二種ある。一つは突發的で、他は浸潤的である。上に擧げた最初の例は突發的で、後の二つの例は浸潤的である。

五、慰安。此れは云ひ換へるなら適意の感である。例へば或る宗教的儀式を行ひて心中言ひ難い愉快の情に滿ち、遂に信仰を獲得するに至る者がある、固より慰安を得るからには種々なる心的過程があるに相違ない。西澤氏は疑惑思索不安戀愛恐怖等をそこに數へてゐる。

六、感謝。何か自己の祈禱する所の事が實現された時特に感謝の念を抱いて心から神を拜む樣になる。或は遇然にも或る災禍を免かれた時、それを神助けと思ひ感謝の念を抱いて回心する

事がある。石神氏によれば感謝の動機を有するもの七、三%、西澤氏によれば三、八%である。我がいとし子の病氣平癒の願がけをなし、其願がとゞいて平癒した時、又は親の病氣平癒を祈りて不可思議にも恢復した時感謝の心で宗教生活に入る者は決して尠くない。

七、驚異。他人が不治の疾病にかゝり又は大けがをなし、一生懸命に神を念じ不思議にもその疾病なり其きずなりが癒へた時神力の偉なるに驚き自己も信仰に入る事がある。古代人に於ては特に驚異が宗教心の建設に大なる要素となり居りしは何人も疑はぬ所である。カーライルは「驚異の心が無限無際に增進したものが即ち崇拜である」とまでいふてゐる位である。ユダヤ人がキリストの奇跡を行ふを見て信仰するに至つたといふ事はしば〳〵聖書に記されてある。英國の文豪エチ・ジー・ウエルスは無神論者として有名であつたが、歐洲大戰亂に際し白佛方面の戰線とイタリー方面の戰線とを見廻り神を信ずる將卒等の如何にも勇ましく働ける樣を見、神を信ずるものと信ぜざる者との間に意外にも大なる差違のある事に驚き彼は過去に於ける自己の無神論的立脚地を抛棄し、自己の主張を飜へして遂に有神論者となつたといふ。彼は「見へざる王者としての神」なる一書を著はし其信仰を告白してゐる。更らに子供の宗教心を考へて見ると其中には矢張り驚異の要素が多くある事は、人の屢々いふ所であ

る。宇宙は實に神聖なる秘密即ち神秘を以て充されてある、フイヒテは此れを「外觀の根底に横れる神の心」と名づけた。此の秘密は公開されたる秘密であつて何人でも自由に此れを味ふ事が出來るのである。故にゲーテは此れを特に「公開の秘密」と稱したのである。人は此の秘密を見出し驚異の感に打たれる。而し畏敬の念を抱き遂に崇拜心を起すに至るのである。尙此の驚異を動機とせるものゝ中には夢や幻想の中に神來の意義を感じて、あはたゞしく入信するものも含めて考へる事が出來る。

「(上略)どうか早く信仰が頂きたいものだと、一心に願つて居りました、一夜いつもの如く佛檀の前に座して、御禮を申して寢ました、すると不思議の事には、目も眩むばかりに立派な處を見ました……、丸で繪に書いた極樂のやうな處で、阿彌陀樣の御光で一杯でした……目が覺めてから、あゝ私が佛法を捨てんとしたからこんな夢を見たのだ、此一刹那、心中の黑雲が一時に晴れて、唱名の聲と共に湧き出で……、すが〳〵として有難くて堪りませぬ」。(四十三歲男)

「(上略)私の病氣は益々重くなりました(卅五歲の時)、安心が定まらずして死んで行くが、如何にも殘念に思はれて……、ある夕方私の寢て居る室の一隅から、見た事もない强い光のラ

ンプを持つて來るものがあります、そして其光が矢の樣に私にさしました、驚いて飛び起きますともう何事もありません……、實に不思議に堪へませんでした、其時は、あゝ是は阿彌陀樣の御光に違ひない、あゝ有難い有難いと、此時直に御慈悲が分りました」。（年齡不祥の女）

八、信賴。シユライエルマツヘルが信賴を宗教心の根底と見た事は其後の學者の大なる注意を惹いた。信賴は少くとも宗教心の基礎としては最も有力なる一つであらう。從つて宗教心の起る動機となる事も大である。

九、罪の悔恨。スターバックによればリバイバルの場合とリバイバル外のものとを分ちリバイバルの時は一四%で、リバイバル外の時は一八%としてゐる。ターナーは前者の場合十七%で後者の場合二十%としてゐる。而して此れに審判者としての神を恐怖する事或は死に對し又地獄に對する恐怖（十五%、十六%）を加へるなら三二%三六%となるといふてゐる。リユーバは「恐怖はしばゝ罪の感と見做されてある。而して多くの場合ヒステリーの如き身體の病氣と入り交つてゐる」といふてゐる。罪の感に就いては既に述べて置いたから再びこゝに繰り返す事をやめる。

（八）意志的動機

次に意志的動機であるが、此れにはスターバックの分類中の他愛的動機及道德上の理想を追求する動機、其他自己の修養及希求などの動機を含んでゐる。

一、他愛。スターバックの擧げてゐる例を以つていふなら「私は學校で私の生徒に正しき感化を與へたいと思ふ」「私は世界に於てモット善良なものとならねばと感じた」などいふのはそれである。或る婦人が愛する弟の試驗の合格せん事を祈る爲め八幡神社に百度を踏んだが、此れも他愛的動機の中に入れられる。スターバックに依れば此の種のものが女六%、男四%となつてゐる。

二、道德上の理想—修養動機。此れもスターバックの擧げた例をかりていふなら「私は義務の感に動かされた」「私は自己の怒り及激情を制して善ならんと欲す」「私は人生のモット高い理想に對するあこがれをもつた」などいふのはそれである。此の種のものが女十五%、男二十%である。此の中には石神氏西澤氏等の分類中の「修養」を入れて置くべきと思ふ。何故なれば修養といふ中には道德上の理想が大低含まれてゐるから。修養を動機とせるものは石神氏によると女三、六%で男にはない。西澤氏によると一二七八人の內九十一人である。此れを百分比にして

見ると七、一%である。

三、希求動機。以上に擧げた所のものも希求には相違なきも各々修養的動機、他愛的動機として分類し得られるものである。茲に特に希求動機としたるものを大別すれば國家的希求、世界的希求、家庭的希求、自己的希求等である。

國家的希求は愛國の精神に基づいてゐるもので、先帝陛下御崩御の前、國民が熱烈なる祈願を神に掛けてゐたのは其一例である。

世界的希求といふのは、國家的希求よりモット大なるもので世界精神に基づいてゐる。予の友人に今は既に故人となつてゐるが上田純一君といふのがあつた。彼は熱烈なるキリスト教信仰の持主であつたが、彼がクリスチャンとなつた動機は、キリスト教が世界的宗教で、其說く所の福音は廣く人類の爲めの救へであると知つた時に其心の根底に築かれたのであつた。而して彼は世を辭する最終の瞬間まで、枕邊にあつた親兄弟に向つて「人類的宗教を信じて人類に對する責任を完ふせられよ」と說いてゐた。彼は取りも直さず世界的希求の下に信仰を獲得するに至つたのである。

家庭的希求、此れは自己の家庭に對する祈願で、家庭平和を希求する事が動機となりて回心

するものは決して少なくない。

自己的希求、此れは希求の中に最も多數を占めてゐる。（西澤氏現代青年の宗敎心一〇七頁）自己的希求の中には、自己の罪の赦される事。自己の身體の病氣癒えん事、虛弱なる自己の身體の鞏固なるものとならん事、此れ等は皆自己的希求であるが、それ等は既に前に述べて置いた。こゝには自己の立身出世に關するもの、生活に關するもの、自己の利益幸福に關するものなどを含めていふのである。又學生が試驗の合格する爲めの願掛をする如きは此の中に入れて考ふべきである。

右に擧げた外矢張り個人的動機の中に田中氏の擧げてゐる、經驗的思索的動機といふのがある。例へば「私は齒の痛みし時一年間梨をたべない事を約束しました、それからは決して齒が痛みません」「善い事が偶然あると神のした事であると思ふからである」「惡い事をすればキット善い事があるからである」の如きもので、此等は自然界又は人事界に人の動かすべからざる、自然の法則があり、又人の左右し能はざる能力の有る事を自己の經驗によりて感得し、そこに一種のオーソリチーを感じ而して遂に神佛を信ずる樣になつたのである。斯くして信仰を得る者は又可成り多くある、田中氏の表に

よると男二三%、女二四%となつてゐる。而して此の動機は十五歳以後が盛んで其頂點は十五歳である。所で此れはさきに擧げし「驚異」の項に入れて考へる事が出來やう。

三、回心の外的影響

回心の外的影響に就いては外的原因と外的感化とに分ちて考へて見やう。

一、回心の外的原因

此の中には境遇の變化、近親の死、疾病、虚弱等がある。

イ、境遇の變化。境遇の變化には順境と逆境とあるが、順境の時よりも逆境の時が回心の經驗を惹起する事が多い。又境遇の變化には一時的のものと、永續的のものとがあるが、永續的のものよりも一時的のものが回心の動機を作り易いのである。一時的のものであれば順逆何れの場合に於ても宗教的情操を生ずる事が多い。境遇が徐々に變化して來る場合は、よしそれが良好であつても不良であつても、個人の信仰に強き動搖を與へる事が少ないが、一時的急激的に變化が起る場合は良好不良何れに於ても宗教的信念を喚起する事が多い。併し此の場合急激なる回心者の中には所謂「喉下過ぐれば熱さを忘る」的の者も多くある。

ロ、近親の死。近親の死といふ中には祖父母の如き尊屬の死、兩親の死、同胞の死、其他親戚の者の死などを含む。此の近親の死は外部的動機の全體より見て個人の回心に最も有力なる動機を作るものと思はれる。特に兩親の死は最も强烈なる印象を與へて個人に宗教的情操を喚起する機緣を作る樣である。夫婦間に於て見るに夫が妻の死に就いて回心したものは僅か一、八%であるが、妻が夫の死に就いて愁嘆し其結果回心したものは實に一一、三%の多數を示してゐる。又子供の死した爲め世をはかなみ子供の未來往生を祈つて回心したものは男は〇、八%で百人の中一人にもなつてゐない。女(母)は實に五、六%になつてゐる(以上石神氏に依る)。以て夫が妻に對する情、妻が夫に對する情、父が子に對する情、母が子に對する情の如何を知る事が出來る。

ハ、疾病其他體身上の缺陷。疾病の中には、他人の疾病、自己の疾病などある。他人の疾病の中でも知友の疾病よりも兩親、同胞の疾病が强き印象を與へる。併し自己自身の疾病は回心動機を作る上に最も有力な機緣となるものである。所で自己の疾病といふても肺病の如き期間の長いものと急性的のものとあるが、急性的なもので餘りに激烈な場合は宗教信念を抱く事少なく。稍々緩退せる場合に起つて來るものと見へる。期間の長いものにあつては煩悶苦惱の期間

長き故入信の機會も多いわけである。

或る老熟な牧師の言に「病院の病室で信者になつたものが信者として一番性質がよい」と。以つて自己の疾病が如何に善良なる回心の基礎を作るかゞ察しられると思ふのである。

飯沼氏は發心動機に關し健康不良なるものを特に調査して、次の如き表を作つてゐる。此表によると肺病によるものは健康不良によるものゝ三分の一になつてゐる。何故に肺病患者が最も多く回心するか。共理由は此病が一般に期間長く、而して不治の病であるといふ暗示により、且つ此病氣が直接苦痛を身體に與へぬと雖も、漸次衰弱せしめる爲め、神經過敏を增長し、人生問題に付煩悶苦惱を惹起する事蓋し他の諸病よりも大なる事、尙又病氣の毒素が腦髓に害

病名	實數	百分比
肺病	18.	30.5
不治病	8.	13.5
大病	7.	11.8
病	7.	11.8
腦病	4.	6.7
眼病	4.	6.7
神經衰弱	2.	3.3
瀕病	2.	3.3
皮膚病	1.	1.6
腹膜炎	1.	1.6
黴毒	1.	1.6
産後の大病	1.	1.6
骨膜炎	1.	1.6
胃病	1.	1.6
蠶生	1.	1.6
計	59.	100.

飯沼氏「現代日本人の信仰」七十四頁

を及ぼさゞる事などであらう。今一つの理由は此の病氣が特に青年期及少壯期に於て、他の病氣よりも其威を逞ましくする事であらう。二十歳乃至二十五歳の間の一年間總死亡者の三分の一は實に此れが爲めに斃れるといふのである。

二、虛弱、此れも自己の身體虛弱と他人の身體虛弱とあるが、回心に强き動機を與ふるものは自己の身體虛弱である。遠大なる希望を抱いて居る時、又は家族的に、或は社會的に、何か責任を背負つてゐる場合、自己の虛弱の爲めに制約される時、神に大願成就の念を掛けるは自然である。併し身體の苦痛が激烈でない爲め、自己の病氣の場合よりも回心動機を與へる事が少ない。

身體虛弱なれば生理的に種々なる狀態が現はれる。例へば、まぼろしを見たり、神のみ聲を聞いたりするのは身體虛弱が原因となつてゐるのである。

二、回心の外的威化

此の中には家庭の威化、社會の威化、自然の威化の三ツがある。

イ、家庭の威化、家庭の影響といふても尊屬の威化、兩親の威化、兄弟の威化、家庭生活又は家風の威化等を含んでゐる。此の中最も威化の大なるものは兩親の威化で、スターバックの作

つた表によれば、女33 39、男33 52となつてゐる。石神氏によると、高僧八百十五人に就いて調査の結果、兩親の感化によりて入信したもの女五、六%男三、二%を得てゐる。更らに氏は、當時の人から得た答案を調べき結果、兩親の感化を受けたものは女三、六%男二、一%を得てゐる。西澤氏は一二七八人の内三十三人が兩親の感化を受けた事を報告してゐる。兩親の中でも、母親の感化が父親よりも大である。西澤氏は父八人母十四人とし、スターバックは、女で父親より感化を受けた者三%、母親より感化を受けたものは八%であるとし、男で父親より感化を受けたものは一%で母親より感化を受けたものは六としてゐる。されば父親よりも母親の感化が大である。マーカス・アウレリユースは「冥想錄」に曰く「母樣から私は宗教的である事を學んだ」と。感化を受ける方からいふなら、男より女の方が多く受ける樣である。尊族の感化は祖父母の感化が最も大で特に祖母の感化は祖父の感化よりも大である。此れを受ける方からいへば男よりも女が多く受ける樣である。西澤氏によると、一二七八人の内十三人で、其中祖父母の感化五人祖父三人、祖母五人となつてゐる。石神氏によると、祖母の感化が、女五、五%、男二、八%となつてゐる。兄弟姉妹の感化に就いては石神氏が昔の高僧等を調査して男、七%、女二、八を得てゐるのみで、予は未だ他に此の種の報告を見出さぬ。スターバックは兩

親以外の家族の感化を女三%男一%としてゐる。此の中には多分兄弟姉妹の感化も含まれてゐる事と思ふ。次に家庭生活又は家風の感化であるが、一例を擧ぐれば次の如きものである。(西澤氏より)

「私は理論上神の存在を認めないけれど家庭が神職である爲に神に禮拜する樣に小さい時から習慣つけられた爲に今では神前で禮拜しなければ氣が濟まぬ樣でもあるし、自然に神前では頭が下がる」

此の種の感化を受けたものは西澤氏によると一二七八人の中十九人となつてゐる。スターバックは家庭生活の中に、宗教的感化を受けたものが女二%男一二%であるとしてゐる。此れによりて見ると、女よりも男が家庭の宗教的空氣によりて自己の宗教心を養ふ事が大である。家庭の影響の全體から見ても女は三九%で男は五二%である(スターバックによる)。以つて男子には女よりも一層家庭的空氣の中に宗教心を養ふ事が大切である事が解る。

尙ほ此れは餘程昔の調査ではあるが元良博士などの調べた所を見ると、佛教神道キリスト教及び儒教を分ちて家庭に於ける宗教的感化を擧げてゐるが、其れによると、家庭の感化の最も大なるものは佛教で。特に眞宗、日蓮宗の如き他力宗に多い、即ち十七、七%である、佛教に

次いで多きは神道で三、七%、キリスト教は更らに少なく一、六%儒教はキリスト教より更らに少ない。若し然りとせば家庭が宗教的感化を及ぼす、教育的に最も有力なるものは佛教及び神道である。キリスト教儒教は最も微弱である。然らば何故に然るかといふ事に就いては玆にはいはぬ。

さて家庭に於ける宗教的感化の性質に就いて考へて見るに、家庭に於ける感化は熱烈な信仰を湧起する事はないが、繼續性の強い信仰は家庭の感化によりて與へられる樣である。而して家庭の感化の中で、最も繼續性の強いものは、雨親の感化で其次きには家風の感化である。次の表は西澤氏の作つたものである。

家庭に於ける感	其後の經驗	繼續中絶時々	繼續絶不明
尊屬	一〇	一	一
雨親	三八	一	二
親戚	四		
家風	一六		三

化	二	九
計	一三	
	六八	

（四十六頁）

ロ、社會の感化。社會の感化としては友人其他の人々の感化、牧師及敎師の感化、敎說勸誘、神社敎會寺院儀式集會學校及日曜學校寄宿舍及其他の場所、科學美術音樂詩書籍、等種々なるものがある。此等の中最も感化力の大なるものは、スターバックによれば友人その他の人々の感化である。スターバックは此種のものを女三四%男四二%としてゐる。元良博士によれば親戚朋友の感化は三五、一%であるとしてゐる。而して其親戚朋友の感化を受けたものは多くは朋人若しくは親戚に耶敎信者ありて其家庭の淸らかなるを見、或は其性格が非常に人にすぐれてゐる高潔なる所あるを知りて宗敎の必要なるを感じしものゝ樣である。更らに石神氏は知友の感化を女九、一%としてゐる。此れは家庭の感化と同數である。所で石神氏によれば社會的感化の中最も感化力の大なるものは說法の感化で、それは女十八、二%男は二十五%となつてゐる。此れに說話の感化女七、八%男二、八%を加へると女二六%男二七、八%となる。然らば說敎說法などは最も感化力が大なるものとせなければならぬが、併し其中には、牧師敎師及

僧侶などからの思想の傳達、例へば愛に渇いたものが「天父の愛」を說敎中に敎へられたとか
又は自暴自棄に陷つて悶へてゐたものが「神は一人の罪人の亡ぶるをも好み給はぬ」事を敎へ
られるなどで信仰に入る如きものがある。又自分で何とかして信仰生活に入らんとして說敎を
聞き書物を讀みなどしてゐたが、一向信仰に入る事が出來ずして苦しんでゐたものが信仰上の
「あかし」又は信仰告白を聞き一時に悟道が開かれた如く感じて信仰に入る人もある。又牧師敎
師及僧侶の人格感化もある。如何に辯舌は達者でも只言語のみではそれ程大なる感化を及ぼす
事の出來ぬ場合は多い。夫れ故說法說話の感化の中には牧師敎師及僧侶の人格的感化の大なる
事を忘れてはならぬ。小西博士が曾て歐洲留學をせられた時埃國の哲學者として又敎育學者と
して有名なヴヰルマンといふ敎授を訪問せられた時の話に「余輩は旅行中突然に訪問した事で
あつて敎授は丁度不在であつて晝食後再び訪問したるに未だ歸宅されなかつた、そこで突然初
めての訪問に夜、訪問する事は西洋では非禮であるけれども旅行の日程上已むを得ず其夜三度
訪問した處が敎授は丁度歸宅になつて戶外へ出で余輩を迎へられ眞實に余輩の手を引き客室へ
導かれた、夫人も挨拶に出でられた、敎授は言ふに言はれぬ懇情を盡された、溝淵敎授や谷本
博士などの話も出て多くは日常の通俗的の話を一時間許り交換し宗敎上の話などをせなかつた

唯だ敎授の高著「敎化學」に關して一二の問答があつた許りである、然して敎授の宅を辭して
歸つたのであるが其歸途には橋があつて橋の上には聖母「マリア」や聖徒の肖像が建てられて
ある其日には敎授の宅を訪問せん爲め此橋を往復六度渡つて其夜の歸途には即ち六回目であ
る、其處を通行する每には往來の人は老少男女を問はず「マリア」の像の前にて額や胸に「十
字架」を空書して敬意を表して通過するを見た、新敎國とは違ひ舊敎國は何んとなく奥床しく
感せられたが自分は基督敎信者でもないから「マリア」の像を通過しても別に何も敬禮を行は
なかつたのである。然るに今敎授を訪問し敎授の謦咳に接して第六回目に此橋を渡り「マリア」
の像の前に來るや思はず帽を取つて敬禮した。實に不思議である。吾ながら實に不思議に感ぜ
られた。「ヴイルマン」敎授は舊敎派の人で熱心なる宗敎的信仰を有してゐる人であるといふ事
を自分が知つて居つて、而して直接に其人格に接した時別に宗敎的の話は毫も交換せなかつた、
然れども敎授の人格が已に宗敎的である。余輩は其崇高偉大にして情緒の綿々たる敎授の人格
に感激した。此感激が即ち殆んど無意識的に「マリア」の肖像に對する敬禮となつた」（「學校
敎育」四〇八頁—四〇九頁）とある人格的感化に就いての最も美はしい物語である。此の他人
の感化の中には又次ぎの如きものがある。

「私は元來宗教なぞ云ふ事は大嫌で、何でも一種の「アキラメ」と思つて居りました。……夫の留學中色々と人から勸められましたけれども、どうしても說教なぞ聞く氣になれなかつたのです……。或日友人の方が今日は近角さんの御話があるからとて誘うて下さいました。近角さんとは、どう云ふ人かと尋ねますと文學士で熱心な信仰であるとの事でした。文學士といへば一通は何も彼も學んだ方だ、そして信じて居られる位なら間違はあるまいと存じまして、それから先生に御話を聞かせて頂き、御本を讀ませて頂き、あゝ今迄こんな有難い敎があるのをどうして知らなかつたのかと淺ましく思つて居ります……」—二十八歲女—（飯沼氏より）

此れを見ると此の婦人は始め宗敎嫌であつたものが友人の勸誘をうけ、これに話をする人が文學士であつたといふ事によりて遂に宗敎に近づき又信仰を得るに至つた樣である。それ故一方よりいへば欽仰心が動機となつてゐるが他の一方より云へば模倣である。文學士たるものでさへ宗敎を信ず、故に宗敎は下らぬものではない、のみならず文學士でも信ずるのであるから自分にも此れを信じやう、つまり上の爲す事は下此れに習ふで、つまり模倣である。而して又文學士たるものでさへ宗敎を信ず「故に宗敎は今迄思つてゐた樣に下らぬものではあるまい」。斯

く考へて宗敎の價値が急に認められる事になつたのであらう。それで此れも此の他人の感化の中に數へて置くべきである。幼少なる頃は敎說の感化は特に大であるが、併し年長するに從ひ敎說よりも人格の感化をより多く受ける樣になる。サンホード・ベルの調査した所によれば十二歲より十八歲までの間に善良なる感化を受ける最も多い時期があるといふ事である。而して彼は曰く「女子に於ては十一歲から十七歲の間の時期及び男子に於ては十二歲から十九歲までの間の時期は一生涯中に於て善良なる感化の來る黃金時である」と。

次ぎに敎會神社寺院などの感化に就いて考へて見るに敎會に於ては敎會其ものゝ感化よりも牧師の人格が主なるものとなつてゐる。（西澤氏四十九頁）スターバックの例に「敎會は我全生涯に於ける第二の家庭である」といふのがある。又「敎會は靈的の食糧を備へて居つて我が生涯に於ける舵であり又錨である」と云ふのもある。此等の中にも人格的要素が主なる感化となつてゐる樣に見へる。併し彼のコジック風の壯嚴なる建設そのもの又はカソリック敎會の多くの聖者天使の像等は勿なからず宗敎心を喚起せしめるものであろう。神社に於ては其神社の性質により或は偉人崇拜、祖先崇拜など人格崇拜が祭祀せる神體に對する意識から來るが、尙ほ兩行が「何ものゝおはしますかは知らねども忝けなさに涙こぼるゝ」と歌ひし如く何となく忝

けなき壯嚴の印象を受ける事がある。それには國民性の作用もあるであらうが、一つには自然の感化建築の感化も大にあるであらう。嘗て京都の或る小學校にて卒業期の生徒を伊勢大廟に參拜せしめその後で、男女兒童の感想を集めたそうであるが、その中には次の樣なものがある。

「自然頭が地につく樣に思つた」。

「何とも云へぬ氣がした」。

「思はず神々しさに頭がたれた」。

「生神の前のやうな氣がした」。

「何となく有難い」。

「有難く勿體ないやうに思ひ歩く時足が振ふた」。

（兒童研究二十卷二百四十六頁）

此れを以つて見ると如何に神社の感化の偉大なるを思はざるを得ない。所で其感化は教會の與ふる感化とは全く異つてゐる。教會の感化の何となく温かく親はしき感化に反し、神社の感化は偉大なるものに壓倒せられる樣な印象である。次ぎに寺院の感化であるが、此れには教會

神社の場合と異なり説法説教などの感化が主となつてゐる。佛そのものゝ感化は殆んど稀である。今以上の教會神社寺院の感化の比較を見るに西澤氏によると、

教會	一一
寺院	二九
神社	五七

である。神社の感化は最も大である。

次ぎに儀式集會などの感化であるが儀式の内に祈禱の言句行動讃美歌などあるが恐らく讃美歌の感化が最も大であろう。基督教の教會で行はるゝ儀式は日本人に未だ慣れない所から反つて反對の印象を與ふる事が尠くない。讃美歌などから生涯消す事の出來ぬ印象を受けるものは屢々ある。集會は其中に宗教的氣分が滿されてゐる場合宗教的印象を與へる事が甚だ大なるものである。社會精神は個人に殆んど不可抗力を以つて接するからである。

次ぎに學校の感化であるが學校に於て宗教的感化を受ける場合は教師の人格的感化に外ならぬ。元良博士の調査によると此れは割合に少ない。全體として一五、八%である。神道、佛教、儒教、キリスト教の中、キリスト教の感化が最も多くなつてゐる。内村鑑三氏の如きは學校に

て感化を受けた一人である。

學校の感化としては積極的感化よりも消極的感化が元良博士の調査によれば寧ろ多くなつてゐる。即ち積極的感化一五、八%に對して消極的感化は二一、一%となつてゐる。

次ぎに日曜學校の感化である。これは石神氏によると女三、六%で男はない。西澤氏による と一二七八人の內七人である。日曜學校の感化の他に比して少きは日曜學校教育の未だ不完全なるにもよるであらうが、併し日曜學校は教會の教育事業で此れによりて特別なる印象を受けなかつたにしても長期間に渉りて養成せられてゐた兒童の宗教心は他の場合に於て容易に回心を得る準備をなす事に於て、日曜學校の感化は少なりとのみ考へる事は出來ぬ。

次ぎに寄宿舍の感化であるが西澤氏によると寄宿舍に於ては「積極的の感化よりも宗教的情緒の破壞される場合が多い」といふのである。併し「宗教を信奉する信者の寄宿舍生活は神の教へによりて個々の心が結合せらるゝを以て宗教的信念の醞釀される機會が多い」と云ふてゐる。

以上擧げたる外科學の感化もある。此れはスターバックによれば女三%男八%である。此の感化の一例を示せば「進化論の研究の結果キリスト教の救ひの意義が大變深く思はれて來た」

といふのはそれである。併し科學の感化を消極的に受けて全く唯物論者になるものも多くある。書籍の感化を受けしものはスターバックによれば女一〇%男一二%である。元良博士によれば讀書により積極的感化を受けた者は三三。七%で比較的多い。而して佛耶儒神を比較すると佛教が最も多く五二八耶教は之れに次ぎ四十八、儒教は僅程少く十八、神道は僅かに二人のみである。耶教の中にはバイブル、ルーテル傳外國の文學詩歌、內村鑑三、松村介石兩氏の著書などより感化を受けたものがあつたといふことである。讀書により消極的感化を受けたものは元良博士によると一九、五%となつてゐる。美術音樂詩は自然と共に算してスターバックは女八%男十五%としてゐる。

ハ、自然の感化。ウォーズウォースは「嫩草萠ゆる春の野の告ぐる教は昔今聖者の說ける法よりも多くの道を示すなり」と云ふた。イエスは彼の有名な山上の說教に於て人々に教へて曰く、「何故に衣のことを思ひわづらふや、野の百合花は如何にして長つかを思へ、勞めず紡がざるなり、われ爾曹に告んソロモンの榮華の極の時だにも其裝この花の一に及ざりき……」と、自然が人心に暗示する所は實に大である。ヘブライ民族は恐らく他の凡ての民族よりも多く自然の感化を受けた民族であらう。故に其道德も宗教も文學も其肉となり、骨となつてゐるものは悉く

自然の感化によるものといふてよい。歴史的に宗教の發達を考究する時自然の感化を無視しては殆んど考究すべき材料を失ふであろう。幼稚なる精神には特に自然の感化が大である。

スターバックの得た答案にも「自然は常に宗教的感化を呼び起す」「或る安息日の朝牧場を散歩してゐると、私は突然神の愛と善の實現を感じた、それは私の全生涯の中で最も惠まれた時であつた」など云ふのがある。天地日月星晨山川草木など、これらは凡て或る神秘の感を抱かしめ個人の宗教心を喚起せしむるものである。或は沛然たる豪雨轟然たる雷電蓬然たる大風或は逆まく怒濤など悉く自然界の權威勢力高大を人心に印象して宇宙に或る實在者を想起せしめ、驚嘆恐怖交々胸中に浮ばしめる。又天災と宗教心の關係も決して淺からざるものである。

次ぎに讀者の參考として二、三動機に關する表を掲げて置く。

內容		女	男	平均
主觀的	(1) 死又は地獄に對する恐怖	一四	一四	一四
	(2) 其他自己的動機	五	七	六
	(3) 他愛的動機	五五	六三	五八
	(4) 道德上の理想追及	六	四	五
	(5) 罪の自覺悔恨其他	一五	二〇	一七
		一五	一八	一六
		%	%	%

內容		女	男	平均
客觀的	(6) 教訓の結果	一一	八	一〇
	(7) 感化模倣等	四五	三七	四二
	(8) 社會壓迫等	一四	一二	一三
		二〇	一七	一九

（ス氏「宗教心理」五十二頁）

回心の動機		百分比 男	百分比 女	百分比 平均
消極的動機	死の恐怖及死に對する感	10	9	9.5
	自己及境遇の不滿	7	6	6.5
	不安又は寂寞の感	10	7	8.5
	罪過自證	28	46	37.0
積極的動機	道德的理想の追求	45	32	38.5

柳原氏「宗教々育の一研究」より

內容		男	女	平均
主觀的	經驗的思索的	二三	二四	二四
	靈感的	六〇	五五	五八
	無常的	二五	一九	二二
		一二	一二	一二

客觀的					
教育的	其他	四〇	一七	一五	八
教訓的	感化的	四五	一八	一五	一二
教訓的	感化的	四三	一八	一五	一〇

田中氏「信仰を基とせる道徳的陶冶の研究」一四〇頁

信念初發の動機

		(女子)	(男子)
個人的經驗	恐怖	1.8	2.8
	不安寂寥	7.8	2.8
	疾病	10.9	2.8
	失望		2.8
	希求	2.6	
	感謝	7.3	
	近親者の死	18.4	19.6
	父	5.5	5.6
	母		2.8
	祖父		2.8
	祖母	5.5	
	兄弟	5.5	
	知友	1.8	5.6
	師		2.8
	思索		5.6
	讀書	3.6	8.3
	修養	3.6	
	敵愾		5.6
社會的感化	家庭の感化	9.1	13.9
	父母	3.6	11.1
	祖母	5.5	2.8
	朋友の感化	9.1	
	說法の感化	18.2	25.0
	參寺	7.8	
	日曜學校	3.6	
	說話の感化	7.8	2.8
	人格の感化		2.8
個人的動機		43.6	55.6
社會的動機		56.4	44.4

石神德門氏「宗教心の研究」五十八頁より

此れは紀元第七世紀の始より第十九世紀末に至る十三世紀間に現はれたる商

出家及入信の動機

		出家 男	出家 女	入信 男	入信 女
素質	相親	2.9			
	惡靠	2.1			
	性的異狀	0.7			
精神的	自歸佛法	2.4	5.5	6.0	8.5
	頻頻出家	21.4			
	厭世的傾向				
	幼	9.2	5.5	9.5	1.4
	青	5.3	8.3	9.2	1.4
	壯	1.4	2.7	5.6	4.2
		45.4	22.0	30.3	15.5

		出家 男	出家 女	入信 男	入信 女
個人的經驗	近親の死				
	兩親共	4.3	2.7	1.1	
	父	11.7	2.7	2.1	2.8
	母	3.9	5.5	1.1	1.4
	兄弟	0.7			1.4
	知友	0.9		0.4	1.4
	夫		38.3		11.3
	婦	2.9		1.8	
	子	2.2		0.7	5.6
	祖父母	2.2			1.4
	恨恨の情	1.2		4.9	2.8
	疾病の不安	6.7			
	老義の不安	0.7	5.5	6.3	
	夢幻	2.9		2.8	8.5
	懷疑	0.7			
	讀書感發	2.6		2.5	
	自修	0.7		2.5	4.2
		37.3	40.7	98.0	40.8

		出家 男	出家 女	入信 男	入信 女
社會的經驗	家庭の感化	8.0	21.9	5.8	
	父	1.9	5.5	0.7	1.4
	母	0.9	5.5		1.4
	兩親共	4.8		3.2	5.6
	兄弟姉妹	0.2	13.9	0.7	2.8
	祖父母	0.2		0.4	1.4
	夫				2.8
	婦			0.4	
	子			0.4	1.4
	主家の感化			0.4	5.6
	知友の感化			2.8	1.4
	說法の感化	2.4		8.8	8.5
	人格の感化	1.2	2.7	2.5	9.9
	模倣			1.8	
	利他				1.4
		16.8	27.6	22.6	43.6

石神氏「宗教心の研究」二十三頁

四、機會の力

以上述べし如く回心には内的動機があり又外的影響がある。而して同一の影響或は同一の動機は必ずしも何人にも常に同一の結果をもたらすとは云へぬ。又同一個人であつても同様の戟激が此れまで何回も繰り返されても回心出來なかつたのに此の度は其戟激が特に身に染むが如く感じたといふ事は何人にもある。つまりこれは機會の力である。所で機會の力といふものは果して何であるか、此れは今直ちに説明する事は出來ぬ。此れを心理的にいふなら少なくとも内心の慾求が成熟した時である。固より慾求が成熟した事が直ちに機會の力となるのではなく、何か他に心理的要素が加はるからである。併し内心に慾求が充分熟してゐる時は恰かもよく熟した果實が微弱な風にも落下する樣に極く些の戟激によりても直ちに回心する事が出來るのである。飯沼氏の書よりこゝに一例を引かん。

「(前略)不遇甚だしく遂に宗教に入るに決し宗教書を讀み説教を聞きしも、今一歩てふ處にて信仰に入れず、惱み苦しみたり……人寢靜りて後端座冥想し居たりしにふと時計の十二時を打つ音に驚かされ其刹那電氣にでも打たれし如く「我に絶對の親あり」てふ叫びを感

得し宿疑一時に晴れたり」

の如き其一例である。此れを見ると宗教に入らんとの慾求より端座冥想をなし居りしが十二時を打つ時計の音に電光石火の如く悟道の光明に接してゐる。即ちよく熟したる慾求の薄皮は時計の音の如く些々たる戟激に接しても破れるのである。斯く考へると吾人は回心に就いて動機や外的原因を考へると同時に機會の力を無視する事は出來ないのである。

五、宗教感情の繼續期間及其現はれる時季

宗教感情の熱烈なる期間及び衰へる時期は人によりて種々異つて居る。それは各人の神經組織の如何に依りて或は長く、或は短くなるのである。或る者は數年間繼續するものもある。又或者は數時間で衰へるものもある。

宗教感情の熱烈なる期間は斯の如く各個人に相異つてゐるが、然らば宗教感情の最も多く現はれる時期は如何といふに一生涯に於ては青年期が卽ちそれである事は既に前に述べた。では一年の間で何の時季が此の感情を最も多く惹き起すかと云ふに、スターバックに依ると、冬で而して夏に衰へる樣である。マーリングハンセンは子供の身體の成長は秋の間が最も大で十二

月から四月の終りにかけて減少し、最も減少する時期は四月の終りから七月の終りまでである。十二月から四月迄に得た凡ての體重は此の四月から七月迄に失なはれて仕舞ふといふてゐる。それ故スターバックは、冬の間に宗教感情の高まるのは、一方に於ては此の時季に於て有機體に於ける生理的變化に原因するものであると云ふてゐる。併し此の點に就いては吾人は尚大に研究を要するのである。人間の體重の增加は秋に於て最も著しく、春夏は減少する。併し身長の方は四月から八月までの間に最も著しく、九月より十一月までに漸次遲緩となり、それより三月までに多少增進する。精神活動の中で注意及び記憶の如きものは十月より一月までが最冥で、盛夏は最も惡い。筋力は晩秋から初冬にかけて增大し、又初夏に於て强くなるが、一月から三月までと七月から九月までは減少する。斯くの如き有機體に於ける變化は温度などゝ密接なる關係を有してゐる樣である。氣温は身體に影響を及ぼすのみでなく精神的にも大なる影響を及ぼすのである。自殺、性的犯罪、其他精神病、神經衰弱などは皆四月から七月までが最も起り易い時期で特に五月と六月とは其最頂點である。此の氣温の增進する時期に於ては精神に興奮を惹き起し、從つて著しく不安を感ぜしめる事となるのである。併し此の不安の時期が過ぎて氣温が減じて來ると次第に反省を促し來るが故、冬期に於て特に宗教的感情が高まるのか

も知れぬ。

六、氣質と回心

回心は心身の如何に依り、又外界。境遇、事情の如何によりて其現はるゝ狀態及び性質を異にする事は、此れまで述べた所で既に明らかであると思ふのである。氣質の如何によりても亦回心に變化を來すものである。此れに就いての研究をなしたものはノースウエスタン大學の教授コーであつて、彼は實にスターバックがいへる如く此の研究をなした事によりて宗教心理學に永久的寄與をなしたものと云はねばならぬ。スターバックはコーが未だ其研究を公けにせぬ時コーの許しを得てコーの原稿から直ちに其書「宗教心理學」に引用してゐるのである。

コーは七十四人（男五十人女二十四人）に就いて宗教的變化の急劇の度合を決定する所の氣質の條件を調べたのである。彼は先づ其等の人々の中に、(1)著しき變化を經驗したものと然らざるものを分ち、(2)次ぎに其等の人々の中で前から著しい變化を經驗しそうな傾向を有してゐたものと然らざるものとを分つた。かく二種の分類をなすことによりて二種の人々を得た。即ち變化を豫期して果して變化したものと、變化を豫期して變化しなかつたものとである。又此

の二種の人々の何れにも入れる事の出來ぬものもあつた。かくして先づ第一に感性と智性と意志の何れが最も著しく作用するかを調べた。次ぎに何れが著しいかを見、次ぎに此れ等三つの能力各々の働きの遲速と強弱との度合を調べた。而して次ぎの如き結果を得たのである。

		膽汁 憂鬱 多血 粘液	感性の最も著しきもの	智性の最も著しきもの	意志の最も著しきもの	速にして強	遲にして強	速にして弱	遲にして弱
I	變化を豫期して果して變化したもの 十七人		12	2	3	1	6	8	2
II	變化を豫期して變化しなかつたもの 十二人		2	9	1	(7)	3	2	0
III	何れにも屬せぬ者 五人		2	2	1	0	0	0	0

此れに依りて見るに豫期通り變化した人々には感情の著しい人々が多く、豫期に反して變化しなかつた人々は知性の最も著しい人々が多い。而し豫期通り變化した人々は能力の働きからいへば遲にして強（憂鬱質又は神經質）であるか、速にして弱（多血質）であるかである。此れに反して變化せなかつたものは主として速にして強（膽汁質）の人々である。若し又早さと強さの方から見れば變化しなかつた方が變化した方よりも勝つてゐる。

コーは又精神上及運動上の自發現象（オートマチズムス）の有無を調査した。七十三人の中で二十二人（或は三〇%）は或る種の精神上及び運動上の自發現象を經驗した。その中には著しき夢や幻覺や或は又抑へられない笑や思はず手を叩くが如き運動上の自發現象などある。而して此等自發現象を呈した人々は大部分は變化したものゝ中に屬してゐる。そこでかゝる研究の結果自發的精神過程への傾向は著しき宗教的變化に對し最も都合のよい土壤であるといふ結論に達する譯である。今感情知力意志の三つによる回心の割合を見るにコーは回心の七〇%は感性により一二%は智力により一八%は意志によるとしてゐる。して見ると回心の動力となるものは大部分感情と見なければならぬ。疑懼時代には思辨的に神の有無を論じてゐるが愈々回心となると感情と價値との上に立つわけである。云はゞプラグマチックになるのである。ゼームスは如何なる事情の下においても回心されない人があるがそれは其人が理知的であるといふ所に原因があると云ふてゐる。

七、犯罪及自殺と回心

以上に於て予は回心に就いて從來諸學者の實驗し研究して來た所に徴して大略陳述した積り

であるが、尙二つの項目を設けそれに就いて一言費やして置き度いと思ふ。其一つは回心と犯罪、他の一つは自殺と回心である。

一、犯罪と回心。青年期は舊生涯を棄てゝ新生涯に入り、低級なる生活を脫して高級なる生活を取る時代である。然れ共一面より此の時代を觀んか、人生の最も危期を示してゐる。それは身體上より見ても、精神上より見ても人生最大の危險期である。而かも最大發達時期である。モーローによると最大發達期は疾病に抵抗する力の最も小なる時期である。精神上の危險に就いては子供の犯罪に就いて考へて最も明かである。フエルリアニが二千人の少年犯罪者を調査した所によると次ぎの如くである。

年齢	犯罪數
八——一〇	三五一
一〇—一二	二四〇
一二—一四	三五〇
一四—一六	四六五
一六—二〇	五九四

此れによると十四歳以上は犯罪數が著しく增してゐる事が解る。更らにコールの作つた表を

見るなら、此れと同樣の現象が見へる。コールは一八八三年フランスに於けるる犯罪者七四七三人の中二十一歳以下のものを檢したのである。

年齢	男	女
八歳以下	一四人	六人
八——一〇	一五九	三七
一〇—一二	四二五	一一七
一二—一四	一、二一四	二六九
一四—一六	一、七三九	四〇九
一六—一八	一、七六五	三八五
一八—二〇	七一四	二〇九
二〇以上	三	八

此の表によりて見ても十四歳より二〇歳までが最も多く特に十四歳より十八歳までが頂上となつてゐる。今一つ人間の懶惰に就いて考へて見やう、「懶惰は凡ての犯罪の父である」といふ諺さへある位で此れは犯罪と餘程關係が深いものである。コルレといふ人は曰く「犯罪は賢淫と同じく懶惰によりて養はれる」と。モルーは曰く「懶惰と浮浪とは子供に於ては殆んと常に犯

罪の源である」と。今フエルリアニが二千人の少年犯罪者に就いて調査した結果作つた表を示さば即ち次ぎの如くである。

年齢	全く懶惰	半懶惰	活動する併し活動を好まぬ	働きを好む	併罰を恐れて働きを好む
八―一〇	二一七	一〇〇	一五	三	一九
一〇―一四	三八〇	一七五	二五	一二	八
一四―一八	二八三	七五	四〇	二〇	四
一八―二〇	二三二	一九五	一五二	四四	一
合計	一、一二二	五四五	二三二	七九	三二

（チエンベーレンの「兒童」より）

此れを見ると全く懶惰なものゝ増加は前の犯罪の増加とほゞ同じ年齢で少し此の方が早く頂點を示してゐる。犯罪の方は十六歳以後に頂點があるが此の方は十歳より十四歳までが最も多くなつてゐる。そは因果關係を有する故當然そうあるべきである。而して全く懶惰をむさぼるものが全數の半數以上に上つてゐる。刑罰を恐れて働をなす精神は十歳以下の子供に最も多く

それ以後は著しく減少する。

かゝる事實より考へるなら身體上にも精神的にも青年期程危險なる時期はないとせなければならぬ。斯かる時に於て一方に回心の現象があるわけで共意義の一層深き事を思はざるを得ないのである。モリソン曰く「若しも青年にして十六歳と二十歳の間に罪惡的犯罪的經歷の發することを防止するを得ば犯罪の數を著しく減ずることを得べし」と。蓋し正當なる觀察といはねばならぬ。序であるから今一言附言して置きたいと思ふ事は少年者の犯罪は成年後累犯する胚種となるといふ事である。佛のデレヤネルは曰く「人は一朝にして忽ち極惡人となるものに非ず、少年時代の邪惡が往々成長後に於て大罪を犯さしむるものにして何れの國に於ても一般犯罪の動勢と少年犯罪の進歩とは相互共通連絡相互比例するものなり」と。（兒童研究十八卷十號ヨリ）。更らにフエルリアニも曰く「只少しの除外例はあるが一般に犯罪者は其子供の時から犯罪する胚種を携へてゐるのである」と、（「チエンバーレンの兒童」三六八頁）。かく考へて見ると少年者の犯罪は成り上つて一層惡質なるもので、且つ犯罪者の性格は益々不良となるのであるから少年時代に於て豫防し根絶せしめなければならぬは勿論である。然らば此れを防ぐ一策として幼年裁判などの設立もせられてあるのである。併しさきに述べた如く、犯罪數の最も大

なる年齢は正に回心現象の最も盛んに現はれる時期であるから、少年教育者は常に此點に意を用ゐ、子供をして神を認め神を畏敬して自ら自己の行爲を制御する樣に導かねばならぬ。

以上は年齢上に於て犯罪と回心との關係を見たのであるが各々の內容に於ける心理的關係を詳細に調査するなら一層有益なる事實が見出されるであらう。

二、自殺と回心。玆に自殺者の心理狀態を研究して、それと回心の心理とを比較し兩者の關係を見出し尙進んで年齢上の關係を見んとするのである。或る人が人類の定義を下して「人類とは自殺し得る動物なり」といふたが一面の眞理を表現してゐる。然り、人類は確かに自殺し得る動物である。併し他の半面に於ては生きんとする意志を有す。故に不老不死の靈藥を求むるに苦心し、醫師よりは既でに死の宣告を下されたものも尙生きんとする意志を拋棄せず、莫大なる財貨を投じて醫藥を買ふのである。かく考へるとそこに人生の大なる矛盾がある樣であるが、併し自己の生存を自覺し凡ての生物中生存慾を最も多く有する人類に於てのみ自殺があつて自己を知らぬ動物に自殺がない事を考へるなら生命に對する强烈な慾求があるところに自殺行爲が起つて來るものと見なければならぬ。然らばこゝに自殺と回心との類似點が見出される。回心は生命に對する慾求ある爲めであるからである。

自殺は精神錯亂の結果であるとは一般に認められてゐるが單にそれのみでなく欲望の倒錯が自殺の原因となる事もある。人間は元來生きたいといふのが自然の欲望であるにもかゝわらず死にたいといふのは欲望の倒錯である。欲望の倒錯は單に自殺のみでなく同性戀愛といふ性欲異常、食物拒絶症といはれてゐる一種の精神病、其他男であつて女の衣裝を好んだり、理由もないのに孤獨を好んだりするのは皆欲望の倒錯である。回心も亦欲望の轉倒した現象に外ならぬ。今迄肉的生活に耽つてゐたものが靈的の生活に這入るのであるから欲望は前と全く轉化してゐる。それ故こゝにも自殺とよく似た所がある。

次ぎに自殺は苦悶の脫却である。固より自殺には種々あつて一概に言ふてしまふ事は出來ぬが、一般に自殺は苦悶を脫れんとする一策に外ならぬ。此の點も自殺と回心とは極めて類似してゐる。ゼームスは救ひに對する感があつて宗教が現はれるといひ、其救の感を分解して、(1)不安と(2)其解決とよりなつてゐる事をいふでゐる。

次ぎに自殺の年齢を調べて見るに我邦に於ける大正二年より同五年までの年平均自殺數は次ぎの如くなつてゐる。

に至り再び増加を示し七十五歳より八十五歳に至つて第二の頂點に至りて增加したのは多分其頃になると自己自身の人生の價値が定まつて「何程やつた所でどうぜ高は極まつてゐる」「もう此れまでだ」などの心持ちになるからであらう。云ひ換へるなら彼岸が見へたからであるともいへやう。人生には希望がある間は澁滞たるものであるが、其希望がどうぜ遂げられぬと見とめるか、又は一つの希望は達しても他の新しき大なる欲望が現はれ、而かも其欲望を達するには時既に遲く、勢力既につきたと思ふ時そこには只絶望あるのみである。其絶望の結果は自殺となるのであらう。七十五歳より八十歳に至りて第二の頂點あるは、其頃になると身體既に老衰して、此の世の働きは出來ず、生きて孫子の厄介者になつてゐるよりと思ひ、自殺心も浮ぶのであらう。其上老ゆれば自然に死の欲望が現はれるといふ事を誰れかの書に見たと思ふ（併し予は此れに就いては多少の疑ひをもつてゐる）。兎に角身體の自

自殺數	年齡
130.1	10—15
995.1	15—20
1403.1	20—25
945.5	25—30
727.2	30—35
707.5	35—40
606.7	40—45
641.0	45—50
619.2	50—55
757.2	55—60
748.0	60—65
732.7	65—70
580.5	70—75
366 0	75—80
191.2	80—85
61.0	85—90
11.7	90—

此れを見るに、二十歳—二十五歳までが最初の頂點を示し其の後少し減じ四十五歳以後

由がなくなり種々なる不運不幸が身にせまる時自殺心を起すものと見てよからう。所で考ふべきは二十歳より二十五歳までが第一の頂點となつてゐる事である。松本亦太郎博士も自殺につき調べ「日本人の全生涯中自殺の突撃的に現はれるは二十歳乃至二十五歳の期間を主とする」といふてゐる。（飯沼氏「現代日本人の宗教心」一三六頁）。此れは回心現象と大なる關係があるやうに思はれる。二十歳乃至二十五歳は未だ生活の安定期に入つてない。而して種々なる問題の爲め苦惱せなければならぬ時期である。異性に關する問題や、生活に關する問題や、極めて眞面目に考へられてそれが爲め苦悶する。其上此の頃には普通教育、專門教育を受け自分では知識的に幾分か確信があると自己の知能に信頼する傾きも生じてゐる。併し經驗淺く、知識も亦公認よりも自認の方が強い爲め動もすれば老熟の者と意見を異にし、何を云つても社會が自己に反對する樣に思はれ、その點より苦悶する事は此れまでとは一層烈しくなる。種々なる原因があらうが、此れも此の頃自殺する大なる原因の一つであらう。二十歳までは回心して人生の新しき進路を見出すに最も都合よき時期であるが、二十歳後になると靈的直感力も鈍ぶれ、當面の問題を解決する爲め遂に自殺の途を選ぶものと見へる。して見ると此の頃の自殺は回心と時間上の一致ではないが連續的に關係があると思はれるのである。人は苦悶の極に達して回